と辯解して見たが、

母「お前は何故そんなに病院をなつかしがるのです。不思議ぢやないかね」

疲勞で神經過敏になつたお母さんは、言葉をとがらせて達子の心に突込んで被入る。

なる程、達子は生命を拾つた所だが、お母さんは生命を消耗しなすつた所だ。樂しい思ひ出があるものは、慕ひ、苦しい思ひ出のある者は嫌がるのは道理だ。

それにしても達子の病院を慕ふのは並はづれの程度かも知れない。自分にも不思議だ。何かにつけて病院々々と思ひ出される。光景が目にチラづく。副醫長のスリッパの音が聞ゐたりするのは確かに普通でない。仕末におへない心だ。戀ぢやなからうか？馬鹿らしい戀なんかするもんか。春にはI先生の結婚に嫉妬を感じた自分ぢやないか。さう易々と度々戀する奴があるものか。と自分で叱つたり嘲つたりして見るがやつぱり忘れられぬ。足が自由に運べだしたら一度行つて見たい氣がする。お母さんが達子の心の底まで見ぬいて被居りはすまいかと煙たい樣な恥かしい樣な氣がする。戀は排他的だといふがこんな心が其の發端かも知れぬ。此の數日前まで六根清淨だと思つて居たのに早やこんな塵がつきかけた。穢らはしい。戀などする分際でない。今やつと命を拾つたのだ。お母さん始め周圍の人に恩返しをせねばならぬ。戀なんか榮耀な贅澤だ。排他的にでもなつたら人間ぢやない恩知らずの我利の畜生だ。と一人で思ひ消し思ひ消しした。

三十九

達子の顏色は日々よくなつて來た。足も次第にガク〳〵の程度が少なくなつて、歩行にたへられる樣になつた。

お母さんが國に歸られるのを停車場まで徒歩で見送りに行つて來た時は、さすがに疲れて二時餘も寢込んだが、三學期の始まる頃には、お粥のお辨當を以つて徒歩で通學し得るに程に元氣になつて居た。

、「まあ嬉しい、高野さんが被入したわ」

××「やあ——高野さん」

○「まあよく御丈夫におなりになつたのね」

周圍に堵を作つて友人が歡迎してくれる。

◉「もうあへないかと思ひましたわ。皆で戸内體操場の隅に寄つて泣きましたのよ」

○○「ほんに寄宿舍をお出になる時には笑ひ〳〵出てお行きになるし、皆も笑ひながら諧謔をいつたりして送り出したのに大變な事になつたのでしたなあ、でもまあ二度とこんなに會へて結構でしたわ」

達子にはこゝにも此の樣に嬉しい天地がある。人の情けを鵜の毛ほども見落さない鋭敏さで一々を感謝といふよりも感銘した。

わけて毎日病院を見舞つて呉れたTさん、Yさん、Mさんの友情は生涯忘れられない。忘れては義理知らずだと思つた。

嬉しい通學が十日程つゞいた。達子は其の間に考へる事が一問題あつた。

それは國の小學校に職を奉じないかと云つて呉れる人があつたからである。

樂しい學生生活を打ち切つてしまふのも惜しい。病院の方にも力强い引力がある樣な心持がする。

病氣がよくなると上の學校へ行きたいといふ希望も復活して來る。伸びようと思ふものは先づ縮んで、尺取虫の樣に伸びる準備をする必要がある。それにはこゝでやめて金儲にかかる方が得策だ。

此の間まで白紙の樣にあつた心に、早くも次から次と二重にも三重にも慾の小紋がうたれたものだ。

達子はとう〳〵退學して歸鄉する方に決した。寄宿舍を三日程離れて外泊するつもりだつたものが、遂に永久に其の緣を斷つ事になつてしまつたのだつた。

事がきまると、本校も寄宿舍も一順挨拶をして廻つた。よく叱つた舍監も、親切に見送つて下すつた。生花をちよい〳〵敎へてやつた居た小使も、太い體を玄關口まで持ち出して送つて呉れた。

寒風に揉まれて居る柳の下をくぐつて見返りがちに達子は校門を出た。其の足は「今日こそもう最後だから」と病院の方へ向いて動き出したのだつた。

達子は道々「自分が病院へ行くと云ふ事はよい事か惡い事か」と考へた。「世話になつて

病氣をなほして貰つた有難い場所だ。それがたとひ私人としてでなく、公的なものであつても、職業的なものであつても、受けた恩は受けた恩だ。禮に行くのは當然で、どちらから見ても誤つては居ない」と考へる下から「お前敵本主義ぢやいけないぞ、腹の底に不純があつちや公明正大な行爲ではないぞ」とたしなめる聲がする。

其のうちにも一歩一歩病院に近づいて行く。

「なに正義の名をかぶつて惡事をするのぢやない。正義が目的なのだ。私慾がそれを侵害しに來よう來ようとする。それを自分で知つて居るからこんなに苦しいのだ」と思つて見ても、やつぱりどうも云ひ譯らしい氣がする。もう目に繃帶したり、手に藥瓶をさげたりした人が、往きかひして居る道にまで達子は來てしまつた。

門まで來た。達子が退院した時の樣に、青い顔に嬉しさうな笑を浮べて、ゴロ〳〵伸に挽かれて出て來る人もある。白い服の人が忙がしさうに廊下を歩いて居るのも見える。スリッパの音も聞えさうだ。色んな雜音をぼんやりと聞きながら達子は這入らうか這入るまいかと暫く考へるのだつた。やつと思ひきつて、

「正當だ、かまふ事はない」と一歩門を潛ると却つて落ちついた心持になつて來た。

プーンと藥の香が鼻をつく、決して氣持惡いものではない。世の中の煩惱で熱くなつた頭に、冷たい水を注ぎかける樣な清々したものだ。山門に入る時抹香の香を聞くと同じ味がする。山茶花はもう疾くに散つてしまつてゐる。

長廊下を左に折れ右にまがりして重病室の棟まで來た。看護婦長が白い服を着てヒョイと出て來た。

達「アラ暫くでした。相變らず御元氣で」

と頭を下げると、不思議げな顔をして

看「貴女は？」

と自分の記憶を呼び起さうと、半ば努力し半ばこちらの説明を期待して居る。

達「あの三番に居りました高野達子です。御厄介になりましてお蔭でこの樣に丈夫になりまして有りがたう存じました」

看「ア、あの三番に居られた」

達「ハイ出血致しましたりして、格別御世話様になりました」
看「まあ御丈夫におなりになりましたなあ、見違へましたよ」
と皺の顔に嬉しさうな表情をして、
看「まああちらへおは入りなさい」
と云ひ捨てゝ忙しさうにどこへか去つた。
醫員の詰所をそつと窺ふと、見てはならない者を見た樣に、ピリッと全身に電力の樣なものを感じた。副醫長だ。「どうしよう?」「はいらうが?」「這入らんでどうする」「でも」「でもどうした。其の弱い所が惡いのだ」「そんなら這入らう」とう〳〵ドアーを開けた。
視線が注がれる。平氣で居ようと思うのに赤くなる。
達「三番に居りました高野で、どうも其節はお世話樣になりまして有り難う存じました」
「ヤアー、說明せんでも覺ゑて居るわい。元氣になつなあ、もうすつかりいゝかね」
達「ハイお蔭樣でよくなりましたが、下痢はまだとまりませんので、やつぱりお粥を頂いて居ます」

副「もう御飯くつてもよからう、あんまりお粥をたべるから下痢するんだハッハ、、、」
達「ほんとに左樣でございませうよホ、、、」
副「それで學校へ通つて居るのかね」
達「ハイ、あの今まで通つて居たのでございますけれど、もうやめて國の方へ歸らうかと存じまして、一寸御挨拶に上りましたので」
副「それは御叮嚀に、まあ御用心なさい病後だから氣をつけてね」
達「ありがたう存じます。先生もどうぞ御體をお大切にあそばしませ。それぢや失禮致します」
達子は逃げる樣に出て來てホッとした。
丁字形の衝きあたりの部屋、それが三番だ。白いカーテンが引いてある。見知らぬ附添が廊下で七輪に火をおこして居る。患者は若い男であるらしい。
隣の部屋にはもう師範生は居なかつた。初雪を食べて居た男は達子より早く退院したのだから居る筈はない。方々部屋があいて患者は極少數の樣だ。ガランとして淋しい。

四十

達子は病院を訪問して滿足した樣な、又何だか忘れ物をして來た樣な心持で、今見て來た光景を思ひ浮べながら、とぼ〳〵歸つて來た。

中姉「あ、お歸り達さん。少し遲かつたな。もう皆お晝をすませましたよ」

達「エ、一寸病院まで御禮に行つて來たものですから遲くなりました」

達子は自分の行爲が不正や秘密でありたくない爲にさう云つた。でも努力した重い聲で。

中姉「さう、それは遠方まで御苦勞樣。疲れたらう、さあお上り、少し冷ねましたよ」

達子の努力の跡には氣づかぬらしく氣輕い。

○「まあお粥を三度々々こしらへて戴いてすみません。姉さん晩には御飯をいたゞいて見ますわ」

中姉「まあ何故？」

○「今日副醫長の先生が、お粥をたべるから下痢するのぢやないかと被仰いましたから」

中姉「そんないらぬ世話を云つて貰はなくてよろしい。あの方が醫者ならうちの兄さんも醫者ぢやないかね。うちに引きとつた以上はうちでよい樣に世話をしますよ」

案外の言葉を貰つて達子は驚いた。惡い事を云つたと思つたけれどもう「一言駟も及ばず」だ。

達「それはほんとにさうですが手間もかゝりますから」と糊塗といふか、緩和といふかを試みた。

中姉「何の病氣の爲ですもの手間隙が云つて居られますか。一生懸命でなほしてあげようと思つとるのだもの」

ほんにさうだ。やはり達子が惡い。本末輕重を轉倒して居た。信賴の持て行き場所が横の方にはづれかけて居たのだ。よつぽど考へるつもりでも拔かるものだ、過まつものだと感心した。食後二階に上つて荷物などをして居るとYさんが來て呉れた。

Y「お忙がしいでせう」

達「イエもう大方片附きましたの。どうぞ上つて頂戴、うるさいけれど」

Y「却つてお邪魔ぢやないですか？」

達「イエ、ほんとにもうすんだのですよ。どうぞ上つて頂戴」

Yさんは殘りの二三段を上り盡して、狹いゴタゴタした中に坐を占めた。

達子は行李や包みを隅の方におしやつて、

達「ほんによく來て下さいましたわ。あんなに病院へ毎日見舞つて下すつたのに、私はまだ御禮にも上らず失禮して居ます。貴女から尋ねて頂いて恐縮です事ホ、、、」

Y「そんな固い事を貴女、友達ですもの、お禮なんかに被入るなよ。それよりか又度々出て被入い、田舍にすつ込んでしまはずにね。そして遊びにうちへ來て下さいよ。よくこんなに御丈夫におなりになつた事。歸つて敎員をなさるのですつてね。まあ御用心なさいませ」

達「浮世といよ〳〵緣があるのでせうよ。地獄へ行きかけてうろついて戻つて來たりしてホホ、、、」

Y「緣といへばね貴女、副醫長さんの事御存じですの？」

達ちやんは喫驚した。何事があるのだらう？自分の身の上に重大事件が起つた樣な氣がする。腸出血した時の驚や心配や所ではない。しかし其の驚を外には表はすまいと努めて平靜に、

達「何んな事ですの？私何も知りませんのよ」

Y「あのね、あの先生については一寸浪漫的なお話があるのよ。でも秘密ですよ。人には被仰らない事を信用してゐるからいふのです」

と一寸淀んで聲を低めて語り出した。

Y「昨年春頃、それMさんが病氣で通院してゐらした事がありますわね。それにあの方は伯父さんが外科の醫長でせう。そんな關係から副醫長と交渉が自然多いので親しくなつたんですよ。Mさんの方では何とも思つては居なかつたのですがね、先生の方ではよほど熱心になつてね。親切になさるし貰ひ受けたいが、來ては呉れないかといふ交渉が直接か間接かしらないけれどあつたのですと。Mさんもそれはよほど煩悶したのですよ其の時は。それあ一高に行つてる許婚の方があの人にはあるのでせう。だからそれを打ちあけて、とう〳〵斷つた事は斷はつたのですけれど、先生の方でも『物言へば脣寒し』だの何だの

といつて長い手紙をよこしたりして悲しみなさるし、Mさんの方でも氣の毒で堪らなく思ふし、どうかして慰めてあげたいと思つて寫眞帖を贈つたり、名刺入をこしらへてあげたりした事があるのですよ。そしたら今度はあの先生もあきらめなすつたのでせう、近いうちに御結婚なさるのですと。其の相手がまた私等の同級生なんですよ。あの俥で通つて被居た分限者の娘のUさんね、あの人を貰ふのですと。一人娘ですから貰ふのか養子に行くのかわからん樣ですが、とにかくあの家の近くで開業なさるんでせう、開業費を貰つて。まあ目出度納まつて、Mさんも安心するでせうよ」

Yさんは小説趣味といつた樣な面白味を以て話しつゞける。達子はたゞそれに應じるだけの單純な感情で其の話が聞いて居られようか。それで居て眉毛一つ動かされない。心の大波をジッと抑へて、普通な表情をなし普通な言語を發せなければならないのだ。お目出たい所の騷ぎやない。

達「そんな事があつたのですか。それでもまあおめでたく納まつて結構ですわ。それぢや近いうちに式をおあげになるのですなあ」

Y「エ、もう結納がいつたとかいふことですわ」

そこへ大兄さんがお蜜柑を持つて來て下すつた。

大兄「よくおいでなさいました。達子の病中にはどうも御親切に、度々見舞つてやつて下さいましてありがたう存じました」

Y「お邪魔を致してをります」

大兄「どうぞごゆつくりなさいませ」

大兄さんが下りて行くと

Y「まだお兄さんは御逗留だつたのですか?」

達「エ、來た序に耳の療治をしたり、支那語を勉強したりして居ますの」

Y「さうですか」

話が變つたので達子はホッとした。

Yさんは達子の心の動搖には氣つかぬらしく、

Y「お兄さんはそれぢや小學校の方はおやめになつたの？」ときくから達子は又至極平氣げに、

達「エ、、それで私と入れかはりになるのです」

「それはよいお都合ですね。貴女はほんとにお兄さんがお有りで羨しいわ。私なんかは姉ばかりでつまりませんわ。義兄まで戰死してしまふのですもの」と話題はうまくそれて來た。

達「ほんにお氣の毒でしたわ。私とこの兄は弱いお蔭で、戰爭には行かずにすみますが、中學さへ得卒業しないのですものつまりませんわ」

Y「お見かけした所ではそんなに弱さうでもない樣ぢやございませんか、支那語研究とは面白いんですね」と生々した瞳を輝かす。

達「渡清して清朝を引くり返してやりたい、それが僕の唯一の望だといふのですよ。大ほらばかりホ、、、」達子は努めて笑つて見た。

Y「ホ、、、面白いわ。小さいお兄さんがも一人おありなのでせう。それいつぞやの教育展覽會に圖畫と習字とをお出しになつて居たでせう、御立派に出來てゐましたわ」

達「よう覺ゑて被入る事、あの兄は手の先だけはかなり出來ますが、數學的の事は私が時には智慧を借す位なんですよ。議論と來ては格別又不得手でして、それは可笑しい程ですの。それでもやさしくて辛抱强いもんですから學校の成績は割によくて模範生になつてるのですよ。それが『所謂』付きの模範生でせうよホ、、、」

Y「結構ですわ『所謂』がついても何がついても。でもう此春御卒業なんですね。又どちらの方面かへお進みになるのでせうねね」

達「エ、當人は高等學校から大學へ行きたいといふのですけれど、父の方は專門學校でこらへよといふのですの、兄も煩悶して居ますわ」

Y「まあお可愛想に、高等學校へ出して貰つておあげなさいな。學資を、そんな事を申しちや失禮かも知れませんが、他人から仰ぐといふ樣な事はお嫌ひなんでせうかねね」

達「さあ、どうですか。父は元來人樣のお世話になる事が嫌なたちですが、何と申します

やら」Yさんが眞面目なので達子も本氣になつた。

Y「それだといけませんわね。私ほんとにお兄さんのおありになる方が羨ましくて仕方がありませんわ」Yさんは學資でま出したい風だ。

達「ホ、、、喧嘩相手になる位の事ですよ。私なんか小さい時から玩具にせられて、男の子と同じ樣に育つたお蔭で、こんなに男やら女やら判らん樣なワイルドになつてしまひましたわ。無い方がよいかも知れませんよ」

Y「そりや貴女の樣に御兩親がそろつて被居る方はそんな勿体ない事も被仰るけれど、私なんかは父はなし、母は有つても義理の仲ですし、又貴女の御存じない苦勞がございますわ。貴女なんかはほんとに幸福ですよ」

Yさんは悲しい事の一つ一つを思ひ出す樣に目を伏せて默つた。達子も心では別の事を考へては居るが、Yさんに同情するだけの餘裕はあつた。

達「それは兩親そろつて居る程幸福はございませんわ。それは束縛もせられる代りには又他の何物でもかへられない有難さがございますからなあ」と云はせもあへず、

Y「束縛といつた所でそれは愛情の大きい一面ですもの、他人が權威を以て束縛するのとは根本がちがひますわ。不平に思つたりしたら罰が當りますよ、ほんとに」

Yさんは束縛といふ言葉を聞きとがめて、達子をたしなめる樣な嚴肅さで曰つた。

達「貴女は御兩親に幾つの時にお別れになつたの?」と達子は外の事を忘れて思はず發問した。

Y「五つの時に母が死にましてね、父が今の母を後妻に貰つたのですよ。そしたら間もなしに父の方が死んでしまつたのですよ。私は父の死んだのはかなり記憶して居ますが母の方は少しも存じませんの。何だか御兩親揃つて被居る御家庭の事をきくと羨ましくてなりませんわ。そして高野さんの御家庭は格別温かい秩序のある立派な御家庭の樣に思はれて御家庭の空氣が懷かしい。自分も其の中に浸つて見たい樣な氣がしてなりませんのよ」

Yさんは決してお追從ではないらしい緊張した眞面目さでさういふのだ。

達「まあどうしてそんなに御想像下さるのでせう。そんな御想像の種がどこに見付かるでせう。偏屈の寄合ですのに」

達子はYさんの心にはいつて見る事が出來なかつた。

Y「どことい事はないですけれど、お母さんもお姉さんもお兄さんも貴女も知つて居ますもの、そして皆義理がたい親切な人ばかりですもの」

達「ホ、、、恐れ入りますわ、何かおごらにやいけませんな、そんなに褒められたらホ、、、まあお蜜柑でもおあがりあそばせ」と碎けた。

Y「イエ、ほんとですのよホ、、、」

達「貴女の御家こそ御舊藩の御家老とかで、お母さまは藩主の御血つゞきといふぢやございませんか。昔だつたら私なんかお側にもよれなかつたでせうよ」

Y「そりや貴女家庭の空氣とはちがひますわ。どんな上つ方にでも家庭の紊亂といふことはございますもの。今の世では無用の長物で却つて縁組の對手が少なくて窮屈なだけですわ。父や兄なりとあれば交際の範圍でも廣くて縁が多いてせうけれどもねゝ」

達子より年が二つも大きいだけあつて婚姻を急いでゐるらしい。まさか達子の家に嫁入して來たがつて居るのでもあるまいが、何やら可笑しな言ひぶりだなと達子は思つた。

二人は夕方まで別々な事を考へながら一つ話題の上で接觸を保つて居た。

達子はYさんを人通りの中に送り出して、再び二階の窓の下の机の前に歸つて來た時には心の張りが弛んでぐつたり泣き崩れた。「あの方が近いうちに結婚なさる。副醫長が御結婚なさる。Uさんと結婚なさる」何度も繰返して云つて見た。「人の事ぢやないか泣くわけはない筈だ馬鹿な私だ」と叱つても見た。烏がアホーアホーと啼いて窓の外を過ぎて時へ行つた。五位鷺もギャア〳〵達子を嘲る樣に啼きつれてお城の森の方へ飛んだ。

思はじと思へど思ふ我心
手にも觸れなば扶りて拋ちてん。
むらぎもの心の池の底淺み
そよとの風に搖れて濁るも。

こんな事を紙片に書きつけて、紙入の中に入れたのは其の夜だつた。

翌朝はYさん始め、二三軒禮にまはつて三年餘り住みなれた○市の空に暇をつげたのだつた。

四十二

肩あげをおろし腰からげをして、急に大人らしくなつた達ちやんは「禮服着用郡衙に出頭すべし」とあつて黒紋付に袴を穿いて辭令を貰ひに行つて來た。「代用教員月俸八圓を給す」といふのだ。大切にそれを持つて小學校の事務室にはいつた。三年前まで習つて居た先生達が被居るので左程恥かしくはない。

太田「ヤアー達子さん」

といつてお千代さんが一番に飛び出して來た。みんなニコ〳〵して迎へて下さる。

太田「あんた、辭令貰うたんな？そしたらそれを以つて校長さんに見て貰つて、それから一順みんなの所に見せてお辭儀をして被入い」

とお千代さんが教へて呉れたので其通りにした。

校長「イヤ、どうかよろしく」と校長はニコ〳〵し起立して叮嚀に挨拶して下さる。たつた此の間まで恐ろしい校長樣として仰いで居たのに、改まつてこんなに云はれると何やら勝手が違ふ。

一寸髪の毛のちぢれたHといふ首席の訓導さん、目鏡越しにヂロリと見て、

H「イヤー大きうなつたのう、今度は同僚ぢやハ、、、よろしくお願ひしますフッ、、、」

カイゼル髭をひねり上げてる。

其次は達ちやんの知らない人だ。

フロックを着て四角い顔をして頭をピカ〳〵させて居る大眞面目だ。椅子を離れて叮嚀に

河「お始めてお目にかゝります。私は河本と申します誠につまらぬ者でございますが、どうぞ宜しくお願ひ申します」

其次も知らぬ人、脊の高い目と目とを摘みよせた樣な特徴のある顔の持主だ。

加「私加藤で、どうぞよろしう」

其次は昔體操を達子が習つて居た瀬川先生。

瀬川「ヤ、高野さん、お久しぶりですな。どうかま、よろしく」

口早な所も、首を振る所も、少しも昔と變つて居らぬ。

其次も昔の先生、お脊の低いチンクシャ見た樣なけれど懐かしげのあるお人。大山先生。

大「ヤア御機嫌よろしいか。お兄さんは御無事ですか？お兄さんがお出でんようになつたら事務室が淋しうて困つて居ました。お代りが見ねたんですな」

ニコ〳〵笑つて辭令を見られる。

お裁縫の先生は達子が直線縫から教はつた先生で、尋常小學校から達子はたゞ一人きり裁縫を此の先生に習ひに高等の方へ來て居たものだつた。――其頃は高一（今の尋五）からでなくては裁縫は正科でなかつた――此の先生を見ると色々思ひ出す事があつて恥かしい。袴だつて此の先生に裁つて貰つたのだ。

裁「まあ高野さん、貴女がお歸りになると聞いて、太田さんと二人でお待ちして居りましたホ、、、どうぞ、こちらこそよろしく」

達子は顔から火が出る樣な氣がする。「坐禮立禮、坐禮と申すは坐りて辭儀を致す事」と此の先生の前に坐つて御諸禮の暗誦といふものをして居たのだもの「途中で貴人に云々」といふ事があるのを達ちやんが暗誦すると何度いつても「とうちゆうで」としか得云はないで笑はれたりじた。ほんとに恥かしい。

達ちやんの後から後から視線を送つて挨拶の一順すむのを待つて居て呉れたお千代さんは

太田「こゝがあんたの席ですよ。おかけなさいな」とお裁縫の先生よりも上の席を敎へて呉れる極りの惡い事。

太田「ほんとに嬉しいわ。裁縫の先生は別として、學科を受持つ女敎員といつたら此の地方にはないんですもの、どんなに待つてたか判らないわ。始めお幸さんが一寸奉職しなつたのだけどぢきにやめてしまひなさるし、ほんとにうれしい事」

久しぶりに達子はお千代さんのやんわりとした氣のおけない心に觸れた。

校長「太田さん萬事敎へてあげて下さい。高野さん會集の時一寸生徒に紹介しますからそのつもりで居て下さい」

校長さんには今まで「お達さん」と呼ばれて居たのに姓を云はれるとどうも勝手が惡い。

達「お千代さん何といつたらよいの？」

太田「何とでもいゝわ、一寸何かいつたらホ、、、」

達「其の一寸が困るわ」

ガン〳〵〳〵昔から耳なれた破れ鐘がとう〳〵九時を報じた。達子の胸もドキ〳〵し出した。先生達は教科書と出席簿とを持つて一齊に椅子を離れた。運動場には鐘がガンと初めてなり出す時、子供等の渦を巻きかけたが、小鳥が飛んで來るように四方八方からも見る間に馳せ參じて、先生達が出て並ぶ迄にはキチンと生徒の方は整つて、「氣を付け—」と級長が號令をかけた。

達子は此の間まであの仲間だつたのにと思はずには居られなかつた。附設女學校の方を見ると、現在自分の同級生が居る。一級上の人さへ居る。そして皆平氣で袴をはいてゐる。風呂敷に包んで來る者も、忘れて來る者もないらしい。大きなお太鼓なんか一人も居なくなつて居る。帶を竪やに結んで其上に袴を穿いたのなんか無論居ない。「三年の間に大分開けたわい」と思ふ。一渡り見まはすと達子の度胸も据わつた。

校長の紹介によつて中央壇上に達子は立つた。

達「只今校長樣が御紹介下さいました云々」

と口をきつた。割に大きい聲が出たが足の方はぶる〳〵振へて居る。附設女學校の生徒の視線がまぶしい樣にも思はれる。壇から下りた時にはさすがにホットとした。

まあ壽榮さんや英子さんが居ないで幸だと思つた。壽榮さんは東京に英子さんは大阪に行つたのだ。殘つて居るのは大抵非優秀なる者だけだから、女學校專任の達子もまあ息がつけるだらうがそれでも世の中は妙だと思ふ。人生僅か五十年經濟的に立ちまはらないと、昨の朋友が今の師弟になつちまふ。何でも自分も早く我道を見出してかけ足で進まなけりやならない。「さあこれからだ」と事務所へ歸る道で人の知らぬ樣に拳を握りしめて見た。

四十三

其の日は授業はしなくても參觀してまはつてよろしいとの事で各學級をまはつて見た。お千代さんの教授振は中々よろしい。一ヶ年に足らないがすつかり先生らしくなつたものだ。學生時代の成績からいへば達子の方が上だつた。それに補習科にはいつて上塗もかけたのだ。けれど教員としての價値からいふと、達子には熟練といふ大なる要素が缺げて居る。お千代さんの方が從つて俸給も高く席も上であるのは順當な事だ。お千代さんが現在

の境遇でいふと成功の方で達子の方が迂回したといふものだ。お裁縫の先生はといふと十五年から勤續して熟練は此上なしだのに、達子よりもまだ下に居なければならぬのだ。私立裁縫塾出身だからだ。社會上の位置、金の收得を畢生の目的とするならば此人なんかは大へん拙い道を通つて來た氣の毒な事だといはなければならない。然し其時代の女の人の中では大成功だつたのだ。そんなに思つて見ると社會上の置位だのといふものは怪しげなものだ。需給の關係で大影響を受ける物價と同じだ。包裝を立派にしたり廣告を巧にしたりすれば需要が大になるし專賣特許だと高くなるのだ。馬鹿らしい。絶對の價値といふものはないのかしらと思はれる。達子は其の絶對の價値が獲得したい。成功といふ言葉を其の時用ひたいと思ふ。私慾の滿足や戀の勝利を成功と名付けるのは惜しい氣がする。しかし人間の絶對價値を磨き上げて至極に到達したいと云ふのも一つの私慾に過ぎないのだが慾が大きいそして形而上であるだけだ。何はともあれ理想に到達するのが成功で、其の理想は人々によつて高低や大小や精神的物質的の差があるのだとしておけばそれでもよい。そこに於て達子は明日より敎壇に立たねばならぬのだから、時間割を見て敎材をしらべて間違なく敎へるといふ事が目下の急務。儉約して貯金して勉強して高等の學校へ進むのが其次。獨立の生活をして四方八方へそれ〳〵恩返しをして今度は人の爲社會の爲に積極的に何か仕事を殘す『天地の化育に參す』何といふ崇高な語だらう。さういふ事が自分に出來たら、自分はそれで成功だとしよう。愉快に死なう。

こんな事を思ひ〳〵參觀を終つて敎科書を受取つたり仕事の引繼ぎをして貰つた。

時間割はと見ると、高一男の理科算術これはまあよいとして、附設女學校の一二三年の國語、一二三補の習字、三の家事、高三四女から附設女學校全部の體操等と中々腕に餘るものが澤山ある。「出來るかしらん」とおぢけ付かずには居られない。一番困りさうなのは家事と習字だ。何で達子が家事を知つて居よう。塚本はま子さんの家事敎科書を一冊習つて隔週一回の割烹實習をしただけの貧弱な智識と經驗しかないのだもの、家庭で始終家持を見習つて居る自分より年上の生徒を捉へて、寄宿舍から飛び出して來たばかりの自分が何であつかましく講義なんかしられよう。一應ことわつて見たが、時間割の都合があるのだから仕方がないといふ事だから仕方がない。習字は昔から嫌でろくに習はぬ罰で大惡筆

の飛切だ。それでゐて鷲堂先生のお手本を二三年も習つて居る生徒を指導するのだ。生徒こそ迷惑至極なわけで、ストライキを起す價値は充分ある。

つい此の間まで「お達ちやん」と呼んでゐたのだから生徒達は「先生」といふのが如何にもきまり悪げに「アノー」といつて何とも得よばない。赤澤さんの「先宅」ぢやないが「お達ちやん生」位蔭ではいつて居るに違ない。

達子だつて師弟といふ名さへつかねば肩の一つも叩いて「しまはん、お久しう。隆さん御機嫌よう。しいちやんおまめでしたか」位いふ所なのに、名分が師と弟とに定またお蔭でいやにしやちこ張つてしまつて息のつまる樣な苦しさを双方が感じなければならない。

達子は翌日から其の重苦しい無風帶を思はせる樣な、教室の空氣の中に立つて教へねばならなかつた。

達子には生憎そんな重苦しさを自分から破つて、微風を起させるといつた樣な社交的な才がない。清凉劑にも得ならず、暖爐にも得ならず、謙遜すればする程、氣壓が妙な具合になつて來る。

一時間やつと終へて事務室に歸つて來ると、ホッとして、ビックリ箱の中に縮まつて居た蛇が箱の蓋を取られた時の樣に心が何丈も急に伸び上る。五時間なり六時間なり終つてしまふと何里も伸び上る樣だ。

火鉢のほとりに男教員も女教員も寄合つて雜談を始める。

H「高野さん、お前は謙遜し過ぎるぞ。もつと威張らにやいけんわい。先生ぢやからのう、あれぢや管理が出來ん」

H先生自慢のカイゼル髯をひねり上げる。

太田「アリーヤ、先生のお髯はどうしたの?」とお千代さんが云ふから見ると眞白になつて居る。

H「どうもしやせん」とH先生眞面目なものだ。

太田「チックを温めて付けたんでせう。ホ、、、」お千代さんは笑ひ轉げる。

太田「鏡を御覽なさいよ。まつ白になつてるわ。ホ、、、冷ねて固まつたんでせうホ、、、」

外の男教員もどつと囃し立てる。達子も笑つた。

H「そんなに笑はずに、拭いてないと呉れんかい」

太田「知りませんわ、御自分でお拭きなさいよ。拭いたばかりでとれますもんか、お顔を火のそばへ持つていてお温めなさいよホ、、、、温めて拭かにやとれんわ、一ばいついてるんですものホ、、、」

お千代さんは男の先生にもよく馴れたものだと達子はまた感心した。そして一緒になつて笑つて居た。

四十四

一日一日とたつにつれて達子は次第に環境に馴應して行つた。女學生時代には男子と話をしても罪惡視せられ、自分でも惡い事と思つて居た。だから折角お父さんの門人が師範を卒業して「國に歸るが用事はないか」といつて、女學校の寄宿舍まで達子を尋ねて來てくれた時でも、達子は決して會はなかつた。其の男の人も儒教を學んで居るからか、或は若い男女が會ふのは惡い事とせられて居る社會上の習慣を重んじてか、舍監が面會させてやるといはれても自分から「イエ會はなくてよいのです、用事の有無だけを聞いて下さい」といつて、達子の賴んだ少しの荷物を持つて歸つて行つたのだつた。盛のついた猫の樣だとI先生が惡口を被仰る若い舍監が「人が折角面會させてあげようと思ふのに偏屈な面會人ね」といつて笑つて居なすつた。それ程男女の交際については氣をかねて居たのに、教員になつては若い男に口をきかぬといふ譯には行かない。隨分おどけたりふざけたりもせねばならず、耳の汚れさうな下品な駄洒落にも愛想笑をして居らねばならない。初こそ自分の品性まで下りさうで悲しかつたが知らぬ間に耳も心も馴れてしまつて、却つて馴れきつて居る自分を見出して時々淋しい悲しい「我老いたり」といふ感じを覺ゑる樣になつて來た。

H「高野さん、お前は其の着物が一枚しか無いんか？」

日鏡越にヂロ〳〵見て半分笑ひかけながら、こんな事をHさんが云つたりするが、達子は平氣だ。

達「エ、先生これきりですのプアーでせう。可笑しいですか」

H「インニヤ、可笑しい事はない。素的にようつる。わしは其の着物の柄が一番好きぢ

や」

達「さう、それぢや丁度幸ひ、こればつかり着て居ませうなあ」

Hさんは女教員にはこんな横柄げな言葉を使ふのだから達子もよい加減に返事をしてお く。こんどは加藤の脊高さんがいひ出す。

加藤「高野さん、もうよい加減に其の着物をお脱ぎいな。繼だらけぢやが、わたしが一枚買うてあげようか」

達「どうぞお願ひします先生。私ほんとに無いんですものホヽヽヽ」

こんな諧謔の樣な、本氣の樣な事をいつては事務室は毎日賑やかだ。

四角の顔の河本先生だけは中々おどけを言はない。博物學者を氣取つて居る。そして時々お千代さんや達子が質問すると非常に得意になつて教へて呉れる。

河本「まだその科に屬するものは澤山ございます。何なら宿の方へでもお越し下さいますれば、少々押し葉をしたのを持つて居ますからお目にかけます。參考書も多少はございます」言葉も此の人が一番叮嚀な如何にも紳士らしい風采言動だ。

達子とお千代さんとは一度河本先生の下宿を訪問した。部屋はキチンと片付いて居て金文字がズラリと並んで居る。ズシンといふ程押葉を出して見せて呉れた。

お千代さんが感心して、

千代「河本先生は中等學校の先生の樣な氣がしますわ」

といふから達子も、

達「先生文檢をおとりなさいませな」

といつた。河本先生は自分が如何に博物が好きであるといふ事を、例證して話して聞かせた。二人の女は感心させられて歸つて來た。後に窃かに人に聞くと師範のバウンドださうな。馴れるにつれて此人の惡い癖を發見した。それは何か尋ねようとして河本さんの側近く立つ場合に、ヂリ〳〵に側に寄つて來て、口では外の事を云ひながらすました顔して肱でジッと押したり、過まつた樣に足で足に觸つたりする事だ。達子は氣味が惡いからなるべく此人の側に行かぬ樣に氣をつけた。

それはお千代さんでも達子でも絶對に男の人に觸れぬとは云はれぬ。過ちでもあたるし、

平氣で指角力でも手たゝきでもする。鬼ごつこでもする。男の先生の帽子やインバネスを取つて着る。生徒が見て居ても校長が見て居られても決して遠慮はしない。キャツ〳〵と騒ぎまはるのだ。でも河本さんの樣な薄氣味惡い觸れ方は嫌だ。ゴム毬がはね反る樣に逃げ出さずには居られない。

お千代さんに話すと、お千代さんも同感だといつて居る。そして男の人と交際するのに參考になる話を一つ二つ聞かせて呉れた。

四十五

お千代さんは姉さんらしく話し出した。

千代「私だちは毎日ギャラ〳〵云うとるけいど、よつぽど用心しとらんといけんのぞな。女教員がまだ此の地方には少ないでせう、それで珍らしいからみんなが目をつけて、何か話の種にしよう〳〵とここらの人は思うとるんですよ。人の事を云うては濟まんけいど、お幸さんが前に一寸の間教員したでせう、あの人は其の間に一評判立てられたんですよ」

達「あらさう、始めて聞いたわ、誰と？」

達子は自分もそんな目に逢ひはせぬかと心配になつて來た。

千代「大山先生とぢなの」

達「マアあんな眞面目な方と」

千代「エヽ、それが原因は馬鹿らしい程の事なのよ。茶話會の後で偶然二人きり殘つたんですよ。でお幸さんの事だから如才なく殘つたお菓子を『お小さい弟さんのお土産になさい』というて紙に包んであの先生にあげたのですと、それを誰かが窺き見をして居たのださうです。町の若い人が遊びにでも來て居たのでせうよ。それから二人が怪しいと云ひふらして生徒が云ひ出す。父兄が云ひ出す。怪しいといふ目で見れば萬事が怪しう見ねだすもんで大きな問題になつてしまうたんですよ」

達「それでそんなら早うやめて東京へ行つたんですか」

千代「さうでもないんですけれど、擔任の生徒までが大山先生の妹をお幸さんが引くというて攻擊し出すし面白うなかつたでせうよ、お幸さんも」

達「それはそれでも多少お幸さんに弱點があつたのぢやないでせうか」
達子は嘗てお幸さんが「教員の中では大山先生が眞面目で親切だ」と達子に話した事があつたのを思ひ出したのでさう云つて見た。
千代「さあそれは、でもまさか、あの人の理想はもつと高いでせう」
それは達子もさう思ふ。もつと高い置位や肩書や名譽や財産をお幸さんは望む筈だ。
千代「一方にそんな噂が立つと、一方には又臭龜一件といふのが持ち上つたのよ」
お千代さんは次の話を始めた。
達「まあ面白さうな一件なんてホ、、、」
千代「ホ、、、それも馬鹿らしいんだけど問題は問題だつたのよ。お幸さんが一人つきり講堂でオルガンを彈いて居た所へH先生が上つて行つたんですと、そしてあの先生の事ですからお幸さんの袴に居る臭龜をとつてあげるとか云うて裾の方に手を出したんですよ。そしたらお幸さんが驚いて『何をなさんです失敬な』と大きな聲を出したんでHさんとお幸さんとの喧嘩になつてしまふ。下の室では何事が起きたかと聞耳を立てる。それは一寸騒ぎだつたんですけいどお幸さんの事だからすぐに狂言化してしまつて笑ひ話になつてしまうたんですよ。ほんとに八方に氣を配らんと油斷はならんのよ。私はまあお幸さんの樣に才もなし華やかにもなしするから人の注意もあまり引かずお蔭で人の噂にも上らんのですけいど、今まで若い女教員がたつた一人だつたのですものほんとにいけなかつたのですよ。あんたがお出んさつて女の連が出來てどんなに嬉しいやら、ほんとに心丈夫になつたわ」
あの無邪氣で達子よりもぼんやりだつたお千代さんが、年のせいだか經驗のせいだかめつきり姉さんらしくなつたものだと達子は思つた。
達「何でも一人居るのがよくないんですなあ。これからはいつつもお千代さん一緒に居て頂戴な私けうといから」
達子は今にも自分の身の上に何事か起きさうで、お千代さんに摺りよる樣にして目を光らせた。
千代「そんなに恐れんでもよいけいど、疑はれんように、侮られんように、乘じられる機會を作らんように二人で氣をつけませうなあ」

達「瓜田に履を入れず李下に冠を正さずとはよく知つて居ても、ついうつかりするから困りますわ、お千代さん氣をつけて敎へて下さいな」

千代「私も同じだわ、二人で氣をつけ合ひこしませうな」

達「私は幸ですわあんたが居て下すつて。一人だつたらどうするでせう。敎室へ行つて自分より年上のムッツリとだまり込んだ僅か五六人ばかりの生徒を敎へて事務室に歸つて來てあんたの顏を見ると助け舟にあうたようですわ。そんな時男敎員きりだつらどうでせう」

千代「もうそれでも敎授にはなれたでせう。此間の研究敎授はよく出來たぢやありませんか、校長もあんなにお褒めにになつた位ですもの」

日前に高一男の理科を敎へて非常に好評だつたのだ。校長が「さすがに縣立高女出身で學校の敎養がよく出來て居る」と感心せられた、それをお千代さんが云ふのだ。

達「あの級は生徒がよいのよ、皆ニコ〳〵して迎へて呉れる。そして何か尋ねると元氣よく一齊に手をあげる。誰かをさすと『ハイ』と柔順に、そして男らしくはつきり答へる。私は始めは不思議な氣がしましたわ。よくこんなに私風情のいふ事をきいてあんなに手をあげる事だ。そして私があの子等をこんなに自由に名をさして答へさせたりしてよいのか知らんと、そんなに思はれましたわ」

千代「ホ、、、それはあんた、あたりまへだわ先生ですもの。尋ねると生徒は手をあげて指名すれば答へますともホ、、、」

お千代さんは總領娘で弟や妹が五つも六つもあつて、毎日姉さん權をふりまはしつけて居るから達子の心持には共鳴が出來ないのも無理はない。

達「あんたはほんとに當然だと思へるでせうなあ。私などは末つ子ですもの、みんなに自由にせられて、自分は人をどころか庭の草や木をでも自由にはした事がないのですもの、ほんとですのよ、花が一輪ほしいと思つても母の許可が出ねば折る事は出來んのですよ、此の年になつても。全く微塵も家庭に於ては權利がないのですからなあ。私に自由になる生徒が氣の毒で可愛想でなりませんのよ」

お千代さんと達子とは人の來ぬを幸、湯沸し場の戸を締めて薄暗い室の中でしんみりと語りつづけた。お釜さんの湯か白い湯氣を吐いてプン〳〵たぎる。

達「ほんとに仲のよいお友達があつたら女はお嫁になんか行かなくてよいと思ひますわ」

千代「それは私もさう思ふわ、いつまでも一緒に暮せさへすればなあ、無理に姑や小姑に氣兼をしによその家に行かんでもねいわ」

達「それには獨立せねば駄目ですなあ、親の世話になつて居れば後には自分も小姑の居候にならねばならんのですもの」

達子は心の中で中姉さん所の小姑さんを思ひ浮べた。

千代「私共が五十位になつた時には、お互にどんな境遇に居るでせうか」

達「お千代さんが五十一、私が五十の時が來たら、どんなに離れて居ても一度會ひませうな。な。きつと」

千代「ねゝ、それは面白いわ。昨年新聞に出て居たように、老人二人連の富士登山でもしませうな」

達「ホ、、、それはよい思ひつきだわ實行しませう」

千代「ホ、、、きつとなあ」

そこへ

H「お前等は何を相談しようる？可笑しい事をいようるぞ」と大きな聲で云ひ〳〵例のH先生がドアーをあけて這入つて來た。有合せた木の箱に腰をかけて、兩足を無遠慮にふんばつて、

H「そいつはいけん、女同志でいけるかハ、、、」

千代「何も云ようりやしませんわ、先生何をお聞きになつたのホ、、、なあお達さん」

加藤先生もポケットに手を突込みながらのつそりやつて來た。

加藤「何を云うて笑ようる。僕も仲間にして貰はうか」

ポケットから煙草を出して長手をのばして火をつけながら、

加藤「太田さん、あんた此の頃よい話があるんぢやらう、わたしはちやんと知つとるぜ」

と濃い眉毛を引きよせて、お千代さんをのぞくようにしてにつこり笑つた。

千代「まあ、よい話つてどんな話ですの？」
加「そんなに白ばくれてもいけん、向ふの相手がわしの親友ぢやからのう。わしには何でも相談するんぢやもの、よからうがよい返事をしておやりい、のう」
加藤先生まるで揶揄でもないらしい。
千代「ほんとうに私知りませんのですもの、どんな話か教へて下さいな」
加「ほんとに知らんのか。そんならいわ、また判る時が來うでい、今はいふまいのう」
千代「そんなに惜しがらずに教へてもよいわ」
加「まあいふまいハッハッ、、、」
煙を吹かしながら薄氣味惡い笑ひを殘して事務室に歸つて行つてしまつた。
H「何か話があるんらしいのう。隱すな〳〵誰にも云やせんけい、わしにだけ云ふて見い」
千代「加藤先生あんな事をいうて、私ほんとに何も知らんのですよ」
H「さうか、時に達子さん瀨川君があんたに感謝して居たぞ」
達「何をですの？」

H「瀨川君の枕元へ花を持つて行つてさしてやつたぢやらう、嬉しがつて居たよ」
達「まあそれの事ですか、それで今日は御病氣はどんなのでせう、今日はまだ宿直室へ伺はないのですよ」
H「惡い事はないようぢや、時々見舞うておやりい喜ぶけい」
クス〳〵笑ひ〳〵H先生も去つた。
達子は冷かされたとは知つたが腹も立たなかつた。實際花は自分が挿してあげたのだ。でもそれはほんの普通の親切からで、達子自身に病氣の時人が花をさして呉れると嬉しいから咲きそめた紅梅を一輪持つて行つてあげたのに過ぎなかつた。
お千代さんと二人で瀨川先生を其日も見舞つた。女の一寸した親切を男はそれ程喜ぶものとは知らなかつたが今日行つて見れば一輪の花を實物のように大切げにして撲訥な口から
瀨川「昨日はどうも有難うございました」
とやつと云つて眼をつぶつてしまひなすつた。餘韻が達ちやんやお千代さんの胸を緊張させた。それは病人の聲を聞いた時に誰もが感じる緊張かも知れないが、達子は刹那に氣の

毒な人、可憐な人、正直な人、質撲な人といふ感じがグルリと総身を一まはりした。

千代「今日は如何です？」

瀬川「私の病氣は御蔭でよいようです。どうも學年末をひかへて居るのにこんなに休みまして皆様に御迷惑をかけます。誠に相すみません」

千代「そんな御心配はいりませんわ。それより御病氣が早くおなほりになるように御用心なさいませ」とお千代さんがいふから、つゞいて、

達「病氣の時はお互ですわ、そんな御氣兼なさいますなよ」と達子もいつた。

瀬川先生は目をしばたゝいて何とも得被仰らない。「故郷を離れて來て居る人は氣の毒だ」と思はずには居られなかつた。しかしそれはありふれた普通の同情であつて性の異つて居る居らぬにはかゝわらないものだつた。

四十七

三月の末が來た。徳利や井が大掃除の時には置場をかへられると同じ様に、三月の末には小學校教員は大片付けをせられなければならぬ。誰も落着いた氣にはなつて居られない。達子の居る學校へも鼠色の封筒に入れた辭令書が三通來た。H先生と瀬川先生と大山先生がそれを受取りなすつた。

H先生のは不意撃で、あとの二人のは豫定の伸展だつた。

瀬川「た、高野さん。ど、御親切にして戴いて居ましたが、いよ／＼轉勤する事になりました。ど、どうぞ相變りませず宜敷お願ひ致します」

甲高い聲で口早に、ほゝゑみの影さへ見せない緊張さで瀬川先生は挨拶せられる。

達「まあ御郷里近くへお歸りになるのださうでございますから御結構でございます。長らく御世話様になりました。どうぞ私こそ相變りませずよろしく」

達子は瀬川先生が興奮すればする程何故か落着いた。そして姉さんらしい慈愛とゆとりとをさへ感じるのだつた。

此先生は嘗てお裁縫の先生に向つて「貴女は助産婦の免許狀をお持ちださうですし既婚者だからよく御研究になつて被入るでせうと思うて御尋ねするのですが、そ、その何です、

私は近いうちに養子に行かねばならぬのに交接法を知らないので當惑して居るのですが、教へて下さいませんでせうか。冗談ぢや決してないんです」と眞赤な顔をして眞面目でいて返答に困らせた事がある。たれだつてそれは知りたいけれど人になんか得尋ねない、親にだつて。やつぱり男の方は男の方だ。特に此方ならでは出來ぬ奇問だと思つた事があつた。

此瀬川先生が土から眞直に伸びた土筆なら大山先生は蕨の拳のような可愛らしさがある。

大山「職替をしますよ、もう教員にも飽いたからハハ、、、。まあ相變りませず御交際を願ひます。私はまあ此の土地の者ですから何ぼでも御目にかゝれます。達子さん大きい兄さんはまだお歸りにならんのですか？御住所を聞かせて貰うて置きませうか」

こんな事を云ひながら机の片付して古雜誌を投げ出したりして、

大山「これあげませうか？」

と被仰る。兄らしい態度だ。達子も兄さんに對して居る樣な氣がする。

Hさんは日頃の碎けて居るのに似合はず、大眞面目な顔をして達子とお千代さんの側にやつて來た。

H「どうも長らく御厄介になりましたが、此度山里校の校長として轉任する事になりました。私は何時までも此の校に置いて戴きたかつたのに、此度の辭令に接して悲しみに堪へません。御兩人の御親切は格別忘れられない事と存じます。どうぞ轉勤後も今迄通り御交際を願ひます」

慇懃に頭を下げられるので、達子もお千代さんも起立して「こちらこそ相變りませず」と叮嚀にお辭儀した。平素なら「先生眞面目臭つて何ですかホ、、、」といふ所だけれど流石にさうも云へない。

H「これは誠に失禮ですけれど御親切を忘れないといふ印の爲に差上げます。是非お納めを願ひます」

と一枚づゝ寫眞を呉れた。達子の目とお千代さんの目とは期せずして合つた。其の目の色は「男から寫眞を貰つてもよいだらうか」と相談した。

H「御迷惑でもございませうが、どうぞお持ち下さる事を強いて御願ひ致します」

どちゞれ毛の頭がも一度屈んだ。

二人は「それでも入りませぬ」と返すわけには行かなかつた。特に女の兒を抱いて居るお父さんらしい寫眞なので、誰が見ても怪しみさうなものではなかつたから二人は氣强くなつた。

二人「有り難う存じます」と頭をさげてしまつた。

H「そこで御兩人にお願があるのですがお聞き下さいませうか。誠に申し上げ兼ますが實は御兩人の御寫眞が戴かせて貰ひたのいですがお聞き入れ下さいませんでせうか。これは御無理なお願ひとはよく存じて居るのですが是非一つ御願ひ致したいものでございます」

達子とお千代さんとは又顔を見合せた。「無い」ともいはれなかつた。それは此間撮つたばかりでHさんもよくそれを知つて居るのだから。

達「でも……先生可笑しなのですものホ、、、」

H「決して人に見せたりは致しません、たゞ私が持つて居るだけですから其點は御安心の上でどうぞ强て御願ひ申します。何なら『私の方から增燒をさせてもよい』といふお許だけでも下さればそれでも結構でございます」

今Hさんのを貰はねばよかつたと思ふけれど仕方がない。

千代「何も先生が增燒をなさらんでもよろしいわ」

H「それぢや貴女方の方でお燒きになつたのを戴かせて下さいますか、有り難う存じます」

二人は仕方がなかつた。

H「何ならお宅の方に頂戴に罷り出でも致しませうか?」

千代「イエそれには及びませんわ」

H「それぢや持つて來て戴けますか有りがたう存じます。いづれ四月一日まではこちらに居ります。どうぞ其日までには必ず御持ち下さいます樣にお願ひ致します」

お千代さんも達子も外交が下手だ。モヂ〳〵して居る間に四月一日迄に寫眞を持つて來ねばならぬ事になつてしまつた。刺も何もないが屁の實蔓の樣な人だから、あつちへ向いて赤い舌を吐いて「お尻を喰へ」といつて居るのぢやないかと嫌で〳〵たまらないけれど、とう〳〵約束の日に寫眞を持つて來ぬわけには行かなかつた。

四十八

人間は物體分子の振動の樣に常に動きまはる。そして化合や分解が自然界に絶ねぬ樣に、精神と精神とが、からみ合つたり離れたり、因緣業のはたらきは果てしがない。

三人が去られて又新らしい人が三人來た。

グリ〳〵坊主で鎭西八郎の再來の樣な體軀の持主と、弓を引けばへロ〳〵矢しか射れない樣な青瓢箪の顏の持主。

どちらも中學校の新卒業で、强さうな方が一名永祐事、永野祐さん。弱さうな方が一名靑忠事、靑山忠兵衛さんださうな。

今一人は何校出身か知らないが、色の白い目の細い口の小さい、何處をどう見ても男性味の出て來ない姫兼さん。三十格恰の敎員としては効經たらしい人物。すら〳〵と物慣れた調子で一同に挨拶をすまされた。所が前の二人と來ては、誰に何時挨拶したのか知らないが、そ知らぬ顏して椅子に收まり返つて、永野さんの方は卷煙草を挾んだ人さし指と中指とをきちんと揃へて下から眞上に向けて口にあて姿勢をも眞直にしてゐる。そして人が挨拶に行くと煙草を灰につき立て、起立して簡短明瞭に答禮して最後に右手を以て自分の坊主頭を後から前にぐるりと撫でて莞爾とすると、濃い男らしい明治天皇樣のお寫眞に似た眉がピリッと動く。

靑山さんの方に挨拶に行くと鉈豆煙管をコトリと投げて、きまり惡さうに顴骨の所にやたらと筋肉を盛り上げて、口を眞一文字といふよりも皿の縱斷面の樣にして默禮する。

物に慣れて程のよいといふ事は有り難い事ではあるが、また不慣れで間が抜けたり、まごついたりする所にも一種云ひ樣のない初々しい可愛らしい嬉しさがある。

敎員の手が揃ふと擔任がきめられた。達子も本科正敎員の位に直つて、高等科女一二年の合級を擔任し、女學校の方の學科をもつ事は初めと殆ど差がなかつた。習字には相變らず困らねばならなかつた。

所が窮すれば通ずといふ理に漏れず一方に血路を見出した。といふのは永野さんが大へん習字好で隙さへあつたら法帖を開いて一人で首をひねつたり人からも揮毫を賴まれて書か

れるといふ事を發見した事だ。

これはどうかして泣きついて助けて貰ふに若くはない。それが生徒の爲でもあると思ひついた。でも新任の先生にこんな事を頼んでもよいかしらんといふ遠慮もあつた。

達「永野先生、私女學校の習字にはほんとに困つてゐるんですよ。先生お願ですから先生のお受持ちの何か私に持てさうなものと代へて下さいませんでせうか。私は生徒よりも字が拙くて、直してやる事も批評してやる事も出來んのですもの」

恐る〳〵かう云つて頼んで見た。

永野先生煙草の煙をパクと吐いて、

永「何時でも持つてお出でなさい、字なら好きですから見てあげます」

卑屈に謙遜げにもせず恩がましい顔もせず、あたり前の事をあたりまへに云つたといふ手輕さだ。

達「有り難う存じます助かりますわ。でも先生勝手な事ばかり申しまして濟みませんなあ」

永「今そこにあるのでしたら今でも見ますせ」

達子は氣兼ねに氣兼ねをしてやつと頼んだのに、何の事もなげに氣持よく承諾して貰へてほんとに嬉しかつた。「出て見れば春の風吹く戸口かな」といつた樣な感じがしてニコニコしながら一組の清書を持つて早速永野さんの側に行つた。

そつと机の上にのせて、朱硯に水を入れた。磨らうとすると、「ね、磨ります」と自分でガシガシすりながら片手で一枚一枚めくつて見ていつて、よいのから順に重ね、やがて楷書で美しく右上の隅に一二三四と番號を入れて何の苦もなくすら〳〵と直したり圓を入れたりして、終りに評語を草書で書かれる。其の文字のまた見事な事。

達子はあの樣に自分もかけたらと思ひつゝ見入つて居た。

終つて達子がお禮をいふと、

永「イエ」

とたゞそれだけだ。ラケットを振り〳〵事務室を出て行きなさる。それが決して高慢ちきでもなく、大して善行をしたといふ感じも、功德をしたといふ意識も御自分にはないらしい、水の流れるような自然さだ。

達子は自分の大役をすませて貰つた嬉しさと、物を人に頼む時に自分の心で自分の作つた窮屈な拵拵から放たれた氣輕い晴々しさとを感ぜずには居られなかつた。

達子はそれ以後はいつでも下清書も清書も永野先生へもつて行つたが一度も面倒臭いらしい顔を見せられた事はなかつた。達子がそれに代るだけの勞働を永野さんの爲にするのでもなく敷島一袋持つて行くのでもなく、達子も氣の利かないものだつたが永野さん一向そんな事は念頭にないらしく、後には達子も生徒と一緒に清書をして生徒の中に交ぜ一切名を書かせずに直して貰ひに持つて行くようにしたがそれでも嫌さうにもなさらない。達子はまるで子供の樣にいそ〳〵として朱筆の動くのを後から覗いて見た。大抵は達子の清書は終から二三番位の所に置かれて拙い評語しか貰へないけれどそれでも嬉しくてたまらなくて一生懸命になつて習つた。お千代さんも後には仲間に引張り込んで二人で熱心に永字八法から稽古し始めた。直して貰ふ時にはいつも二人が椅子の後に並んで立つ樣になつた。廣い肩幅健康らしい太い頸筋がすぐ目の前に見ゐる。それも何だか嬉しい氣がしないでもない。達子は永野先生の椅子の凭りに手でも觸れようものならゾク〳〵する樣に嬉しい氣がする。觸つてはならぬ物に觸つた樣な良心のとがめる聲もどこかに感じながら。

四十九

永野先生が運動好で體操でもテニスでも野球でも駈足でも何でも上手なのに引きかへて、青忠さんと來ては大の運動嫌で體操の擔任を持てあまして悲觀して居る。號令をかけると鼻にかゝつた奇妙な聲が出る。模範を示さうとして手を伸ばせば肘が曲る。歩けば脛が曲つて、所謂O字形の足になる。鐵棒に飛びつく事も出來ねば棍棒も振れぬといふ仕末。放課後若い男教員達は盛にテニスをして居る時でも、女教員と一緒に事務所に殘つて居て藤澤の算術の少しむづかしい樣な應用問題を見つけ出しては達子の所へ持つて來る。それは自分で出來ないで問ふのやら人の力を試すのやらわからない尋ね方だ。

青「高野先生、こんどはむづかしい。なんぼう先生でも出來んと思ひます。まあやつて御覽なさい」

こんなにいつて問題をさしつけるのだが、達子も考へる事は好きだから相手になる。

達「先生が六つかしいと被仰るのでしたら、とても私には判りますまいけれど、まあ借せて御覽なさい」

と受取つて見る。元來數學は好きな上に高師入學の準備を片手間にして居る達子には割に苦もなく出來る。

達「かうしたらどうですか」

といふと青忠さんニヤリと笑つて何とも云はずに自分の席に歸つていつて、暫らくすると今度は國語讀本を持つて來る。そして講義をさせたり、文典上の說明をさせたりして、終れば默つて別に反駁するでもなく、擧足をとるでもなく禮をいふでもなく、默つて煙草を吸ひ出すのだ。黑い長い爪が鉈豆煙管によく調和する。

此の人は大分人から皮肉を云はれても侮辱せられても怒らない。さうかと思ふと怒らなくてもよい時に怒り出す事もある。達子は此人から半紙二三枚借りて使つて、翌日持つて來て返さうとしたら大變怒られた事がある。それが本氣だから面白い。

青「もう穢はしい半紙の二三枚やそこら私のを使うて呉れてもよいでせう、嚴重に返したりおしんさらんでも。もう貴女の物というたら一生涯借りはしませんよ」

鼻の穴を大きくしてプリ〳〵云つて青い顏を一層青くするのだ。達子は喫驚して引き下つた。それから諸諸なんかはせぬ人かと思ふと時々おどける。そのおどけ方がまた一風ちがふのだ。

達子が六時限目を敎へて居てつい時間が延びると、五時限ですんだ青忠さんは、抜き足さし足達子の敎へて居る敎室の障子の外まで來て、急に耳元近くで拍子木の亂打を始める。そしてそれをあつさりやめる事か、何時までゝもつゞけるのだ。決して惡意で敎授の妨害をするのでも何でもない、それが此の人の無邪氣な惡戯なのだ。

此の前永野さんの歷史の研究敎授のあつた時、

青「今日の敎授はアルコール式だつたと思ひます」

と青忠さん平氣で批評してしまつた。永野さん默つては居ない。

永「アルコール式とはどんな事を意味するのか御說明を願ひます」

と返した。

青忠さんはニコ〳〵しながら、

青「アルコー式とは酒の代りにアルコールを飲ませる事て、飲まされた者は逆上して前後が判らんようになる事をいふのです」

と得意でいつた。永野さんの秀でた眉根が一寸上下に動いた。

永「例をあげて具體的に指適して呉れ給へ。一々について『此處はかう敎へた方がよかつた』と敎へて貰はんと僕には判らん」

青忠さん一々はいへないのだ。

青「一々は云へんが総體むつかしかつた。わし等には判りはせなんだフッ、、、」

永「君に判らんでも生徒に判ればよいぢやないか。君の批評の仕方は禮を失して居るといふもんぢや。僕は君の性分を知つとるから怒りはせんけいど、外の者ぢやつたら怒るぞ、少し氣をつけて評語を下さんと」

青忠さんは横に向いてホガリ〳〵煙を吐いてニヤ〳〵笑つて居る。

永野さんは歴史好で研究が深いだけに自然敎科書以外の敎材が多くなつて生徒よりも先生一人で興がつて敎へた傾がないでもなかつたのだ。青山さんのアルコール式といふに無理のない所もあつた。達子は双方の心持を理解する事が出來たが、青忠さんに對しては可憐だといふ氣がするし、永野さんの方に對しては男らしいそして寛大だといふ氣がした。

今一人の姫兼さんとは學科の擔任上交渉がごく少ない、そして聲の小さい穏かな擧止で、居ても居なくても一向目に立たぬ上に大抵は手工の準備室に一人きり閉ぢ籠つて居るので性僻なども知れないが、たまさか話をするといつでも親に早く別れて孤兒になつて難儀をした話とか、胃腸が弱くて困るとか多く泣言を聞かされる。そんな事をきかされると女はどうしても釣り込まれてしんみりとした調子になつて時には貰ひ泣もさせられる。心のどこかでは「又初まつたな」位に思はぬでもないけれど。

こんな人は自分の周圍を沈んだ調子にして置いて、其中にじつと浸つて居るのが云ひ知れぬ慰めであり愉快であるのかも知れないが、何度も繰り返して居るともう此人を見ただけで陰氣になつて、快活に笑つたりは出來なくなつてしまふ。

着かへた袷の袂輕く櫻や桃も少し盛をすぎかけて「落花枝に返ると見れば胡蝶哉」の句を思はせ、菜の花や麥や蓮華が地を彩つて、其の中を野川の水がピカ〳〵とうねり廻る。校外教授にお誂向の時節が來た。各級思ひ〳〵の川へ山へと出て行く。

お千代さんの高三四と達ちやんの高一二と永野先生の附設女と連合して同じ方面に出て行つた。

千代「永野先生はこちらの方面はお珍しうございませんなあ、毎日御散歩に被入るのですから」

永「でも又朝の景色と午後とはすつかり違うた趣がございますよ」

千代「先生はほんとに朝お早くて、私なんかは顔も洗うて居ない時に門の前をお通りになつたり、時々は髪も結はないで寢卷のまゝで居る時に裏の畦道に口笛が聞ゑるのですもの、恐れ入りますわホ、、、」

永「ハ、、、早い程氣持がよいものですから私も顔を洗はずに起き拔けを散歩に出るのですよ」

千代「ほんに降つても照つてもよう續きます事」

永「もう習慣になつて早起して散歩しませんと一日氣持が晴々せんものですからハ、、、」

達子は默つて二人の會話を聞いて居た。自分の知つて居る範圍外の事を二人で話されると心のどこかで燒けた樣な氣もする。

達「先生まあそんなにお早くお起きになるのですか。お千代さんの起きる時と云ふたらきつと五時よりは早いでせうに、私なんかはまだ夜中の夢で居るでせうよ。毎日きまつて散歩なさるつてほんとに感心ですわ」

と話の中に割り込んで行つた。

千代「もう達子さん、ほんとに毎日缺がさずはの暗い時に霞の中を口笛を吹き〳〵、ずつと此の天神が岳から八幡樣を通つて、塚根山から天王樣の麓をまはつて私方の前か後かを通つて、あそこの川岸へ下りてお歸りになるのですよ。私なんか女のくせに朝寢坊して風

が惡い樣ですわ」

達「お願でもかけて居る人で無うてはそんなに毎日きまつた事は出來ませんがなあ。ほんとに感心です事」

達子はお世辭ではなく全く感心した。夜引張りの朝寢坊だから。

永「ハ、、、大變感心して貰へますな。いや全く私も心願あつて八幡樣へ參つて居るのですよハ、、、」

千代「ホ、、、まさか先生、先生が御信神なさりさうにもないわホ、、、」

永「ハ、、、そんなに不信神な人間に見ゑますか、これ程信仰して日參までして居るのにハ、、、」

「ホ、、、」「ホ、、、」

お千代さんと達ちやんとは笑ひ崩れた。永野さんは朗らかに一笑したが、すぐ眞面目になつた。其の顏を見ると達子も笑ふのをやめて、

達「精神一到何事か成らざらんつて本當でせうか」と云つた。多少永野さんの信神を信用したのと「お願かける」といふ事から思ひついて自分の高師入學の志望が果せるだらうかどうだらうかといふ事に考へ及ぼしたので。

永「具象的の事は中々思ふ通りに行くものでないと思ひますが、精神的の事だつたらきつと神に通じ人に通じ成功すると私は信じて居ます」

底力のある自信ある聲の響だつた。達子はシンとする程心に浸みた。「精神的の事だつたら成功する。精神的の事だつたら成功する」と幾度も心で繰り返した。「何を意味する。何を意味する。高師入學といふ樣な形に現はれた事は成功しなくても、精神上の事は成功するぞ。戀するなら結婚は出來なくとも靈の融合だけは成功するぞ。と云ふ意味ではあるまいか。永野先生の心が多少でも動きつつあるのではあるまいか?自分の方へ」

達子はそんな事を考へさせられた。其のうちに川原まで來た。「別れ」の號令をかけられた生徒達は、キャッ〳〵と騷いで蝶を捕つたり蓮華を摘んだりし始めた。先生達はよい石を拾はうと探し始めた。

五十一

三人が石を拾つて居る川原は縣内でも有名な程石の種類の多い處なのだ。

お千代さんは頻りに「よいのが有つた有つた」と嬉しがつては澤山拾ふ。達ちやんは拾つては「これもいけぬ、これもいけぬ」と投げる。

千代「こんどこそよいのを拾つたわ、これ」

と三ケ月眉を晴々しく引き揚げて、お千代さんは達ちやんに石を見せに來た。

達「どこに、ほんとにつる〳〵して丸くて縞も色もきれいですなあ。よい事。私と貴女とは探す標準がまるで違ふわ、面白いもんですな」

千代「あんたはどんなのを探しとるの？」

達「私は形の凸凹した子持石ですよ。お花を生けた時に水盤に飾られさうな風流なのがほしいと思うて居ますの」

千代「さう、それぢや私には判らんわ。永野先生よいのがござんして？先生はどんなのをお探しになつてゐますの？」

少し向ふに默つて拾つて居た永野さん、ぼつぼつ近い方へ歩いて來て、莞爾しながら、

永「よいでせう、これを見て下さい。かう置けば文鎭になるし、こゝへ字でも書くと一寸茶室の額とでもいふ樣な風情が出て來るし、机の上に飾つても置物の樣でせう」

ぐる〳〵まはしたり掌へのせて目から少し遠くへ離して眺めたりして、後にはお千代さんの手へ渡し、坊主頭をぐるりと後から前へ撫でて、少し上目を使ふ樣にお千代さんへ視線をむけた。お千代さんはそれを達子にも見せつゝ

千代「ホ、、、それ〳〵てすなあ、何だか私が一番子供らしい樣です事」といふと永野さんが

永「太田さんのが本當に審美的なのですよ。高野さんと私のとは少し功利的な分子がありさうですハ、、、」と高らかに笑つて、今度は永野さんの視線が達子の方に移つた。達子は永野さんが「高野さんと私」と並べて云つて呉れたのが何やら嬉しかつた。

達「ホ、、、何に使はうと云ふ目的があるのですから、ほんに功利的な慾求が交つて居ますわ」

千代「イエ、私総体に趣味が乏しいのですよ。妹や弟の世話ばつかりに忙しくてお花もお茶

も琴も三味線も習ふ隙がなくて育つて來たのですもの」お千代さんは少し目を伏せた。

達「そんなものは知らなくてよろしいわ。習つたつて趣味の持てないものは何時までも趣味の出て來るもんぢやありませんわ。生れ付きですもの。それよりか家事に馴れた方が何程かよいやら知れません。私の樣に家の事が何一つ出來んのは困つたものですよ。辛抱して習つたお琴や三味線は忘れてしまふし」

千代「そんな事はないわ。自分が習つて居る人はそんなに思ひなすつても、生活に追はれて趣味に遊べないものからは羨ましく思へますわ。永野先生は盆栽がお好きでせう、先生一度達子さん方へ行つて御覽なさい。達子さんのお母さんは園藝趣味のある方で、それは澤山木や草が植ゑてあつてお庭が公園の樣ですのよ」

達「そんなに奇麗な事があるもんですか、數見たようですのよ。でも一度お遊びにお出で下さいませ、此の頃は小さい兄もうちに居りますから」

達子は宅に被入いといふ機會のあつたのが大變嬉しかつた。本當に來てほしかつた。達子の交際相手を達子の家に招待する權利は達子には與られて居ないのだと自分で知つては居るけれど、でも兩親が永野さんと近づきになる機會を作りたかつたのでそんなに云つた。

永「ハイ有り難うございます。私は前からお願がしたいと思うて居た事があるんです。お宅には小田卷草がございますでせう、一株貰へませんでせうか。一つお母さんに賴んで見て下さいませんか」

達「エ、澤山ございますからきつとらくでせう、母にいうて見ますわ」

達子は永野さんから「吳れ」といはれた事が又嬉しかつた。早く持つて行つてあげたかつた。生徒をつれて歸る道々、今日の愉快にあつた事を繪卷物の樣にして客觀する氣になつて見たり、三羽の胡蝶が飛んで居る樣に浮れた氣持ちになつて見たりしつゝ歩いた。

事務室へはいると加藤さんがイガ〳〵した頭を撫で〳〵「面白かつたか」とニヤ〳〵するのが皮肉な樣に聞ゐた。

默つてかゞんで居る靑忠さんの顏が悲しげな樣に見ゐた。

校長さんの側の椅子には見なれぬ奇妙な男がかけて居た。上半身裸體で右の肩から左の脇の下へ斜に風呂敷をかけて生蕃の樣だ、多分氣狂だらう。

男は左右の手を目の高さにあげて指敎へして運動場の方を狙つて、

男「ドボ〳〵ドボン。それ大砲をうつぞ。あそこを見い。露助が逃げるわ。アッハッ、、、、此の天皇陛下に無禮をすると許さんぞ」

達「氣狂ですなあ　可愛想に何處の者です？」

と小さい聲で永野さんに達子が尋ねた。

永「あれはこの町の者です。魚屋ですがなあ、お金が儲かると酒を飲む。飲むと氣が狂ふんですよ」

お千代さんと達子とは半分恐ろしいと思ひながら見て居た。

男「そこの女等はお茶を持つて來い、お茶を」

達子は笑ひながらお茶を入れて校長と氣狂とに持つて行つた。

男「お前はよう知つとるぞ。お前は高野さんの嬢さんぢやらうがな。わしの云ふ事は違やせんて」

ギロ〳〵見るので達子は薄氣味惡かつたが、それでも自分を高野の娘だと知つて居る所を以つて見ると、まんざら違つても居ない樣だと思つた。茶盆を持つて下つたが、

達「永野先生如何です」

と序顏に一杯注いだ。序の樣にはあるが實は此人に一番にお茶があげたかつたのだ。氣狂がよい鹽梅に緒をつけて呉れたのだ。

達「お千代さんは？」

千代「まあすみません、戴きます。一寸これ御覽今さつきの石に字を書きなすつたのよ」

永野さんの拾つて來た石に朱で見事に「養氣」といふ文字が書いてあつた。

達「まあ立派な事、お千代さん貰つたの？」

達子は手に取つた瞬間に淋しい氣がサッと襲つた。てもすぐあとから「淺ましい自分の心だ」と思つた。

達「文字がよく形の中にをさまりました事。そして朱の色と石の色ともよく調和して澁い

事。机の上に飾つたらほんとによろしいなあ」

千代「あんたと私との眞中に置いときませうなあ」

お千代さんは達子の心に一寸兆した嫉妬の影を透視する程敏感な人ではない筈だ。平生の仲よしから出た嬉しさを分つ自然の情なのだけれど、達子は自分の心を見ぬかれた樣で恥かしい氣がした。

永野さんはニコ〳〵しながら默つて二人を見て居られる。

達「有り難う、そしたらそこに置いといて見せて下さいな」

と達子がいつて椅子に凭つて眺めて居ると、つか〳〵と氣狂男がやつて來た。お千代さんと達子との間に立つて

男「何ぢや石か。ハヽヽヽ天皇陛下に献上せうといふのか。石はいらんぞ。そこのけ」

達子とお千代さんとは顏を見合せて立つて椅子から離れた。お千代さんは事務室から出て行つてしまつた。

狂人はお千代さんの椅子にどかりと腰をかけて、

「これに火をつけい」と卷煙草を達子の前に投げ出した。

達子は笑ひながら火をつけて一寸吸口をひしやいで渡してやつた。

氣狂は大威張な風をして兩足を踏ん張つて、何か判らぬ事をクド〳〵云ひながらスパ〳〵吸ひ始めた。達子は流石に其の側に腰を下して仕事をする氣にもなれなかつた。

石を狂者が若し取つてはと思つてそつと懷に入れて、お千代さんの眞似して事務室を出て行つた。

廊下を歩き〳〵兩手はしつかりと石を抱きしめた。人の知らぬ嬉しさが總身をむづ〳〵させる。「私はうどしたのだらう?復た戀に落ちようとして居るのぢやないか知らん。I先生と赤澤さんとの結婚に嫉妬を感じ、病院の副醫長に失戀し、今また永野先生に戀するのぢやなからうか。そんなに幾度も安つぽく戀をしてたまるもんか。戀は苦しい。戀をしてはならぬ。最後は失戀の苦い目を見ねばならぬにきまつて居る。自分は上の學校に行きたいのが本來の目的ではないか。まつしくらに進めばよいのだ。鳥だつて獸だつて人間の耳や目では感覺の出來ぬ樣な遠方の物音をきいたり物を見つけたりする。虫でさへ人に嗅は

の香をかぎつける。そして避けるべき害をさけ捕ふべき獲物を捕へる。『天の未だ陰雨せざるうちに牖戸を綢繆す』といふのは鳥の話ぢやないか。萬物の靈長と自稱する人間に何が出來る？因果の理を知つて、未來を豫知して、道を選んで進む、克己忍耐して本能や衝動のまゝに任せない。それが人間特有の能事ぢやあるまいか。戀は危ない輕々しく近よつちやならん。近よるまい。近よるまい」

こんなに思つて見てもやつぱり懷の石は嬉しい。小田卷の花を持つて行つてあげる事は嬉しい。

お前の考へて居る事は理想だ。理想は現實とは一致しない。春が來れば花が咲く。よく考へて花を咲かせよといつたつて咲いたものは仕方がない。人間だつて自然物だ。時が來れば戀を知るのだから仕方のない成り行だ。と些か辯護もして見たりしつゝぼんやり歩いて音樂室にお千代さんを見出すべく探して行つた。

千代「あんたも被入したの？」

達「エ、後を追つて來たわ」

千代「恐ろしかつたわ、氣狂はあれからどうして？」

二人はこゝで又暫く話した。

千代「私あんたに相談があるのよ。それいつぞや加藤先生が私に『よい話があるだらう先方がわしの親友ぢやからよく知つとる』と被仰つた事があるでせう。あれは本當だつたのですよ。此間私方へは始めて世話をしようと云うて來ましたのよ。達子さんどうしませう私の身になつて考へて見て頂戴な」

達「それはあんた少しの間本人同志交際して見たらよいわ」

達子は人の事は言下に判斷を下す事が出來た。其の話の最中に「高野の嬢さん。高野の嬢さん」と大きな聲で云ひながら氣狂が門の方に走つて行くのを聞いた。

達子はゾッとして固くなつた。

五十三

氣狂がもしや達子の家に行つたのではないかと思はれたので、暫らく間を置いて達子は學

校から歸つた。そして門の外からそつとうちの樣子を伺つて、居ない事を確めてから家にはいつた。

母「達子かね、ようお歸りた。今あの氣狂が來てなあ」

達子が問はぬさきにお母さんが被仰つた。

達「もしや來たのぢやないかと思つて居ました。來てどうしました？」

母「妙な風をしてキロ〳〵見まはしてグド〳〵云うて何やら判らんけいど『嬢さん、嬢さんと』二口ほどいふた樣ぢやつた、學校へも行つたのかね」

達「エ、」

達子は「果して來た」と又心を寒うせずには居られなかつた。不用の親切をするものでない。お茶を吸んだり卷煙草に火をつけてやつたらこそ高野の娘の印象を深くしたのだ。罪な事をした。「其の印象が早く消ねます樣に、氣狂を一層苦しませる事のございませぬ樣に」と心で祈らずには居られなかつた。

それにつけても小田卷草を永野先生に上げる事も、丁度何でもない親切が氣狂の心を交せ返した樣に、二人の心を交せ返す動機になりはすまいかと案じられる。今自分が花をあげる嬉しさが未來になつて、其れに相當する苦しさ或はそれ以上の苦いものになつて戻つて來るような事はなからうか。もし花を上げる達子の喜びよりも、貰つた永野先生の方が餘計に喜ばれたらどうしよう。永野先生に苦の種を植ゑ付ける樣な事になりはしないだらうか。達子は果しのない青黑い淵に臨きかゝつた樣な不吉な豫感が頻りとする。

でも賴まれたのだからあげねばならぬ。有るのにあげないといふ事は現在の自分には苦しみだ。お母さんがもし「大切な花だから人にあげてはならぬ」と被仰つたらどんなに私は失望するだらう。いくら不吉の豫感がしても、やつぱり花はあげたい。現在の歡をなるべく大きくしたい。外の花も添へて澤山持つて行つてあげたい。それは現在としては決して不道德の行爲ではないのだ。それが因となつて二人の心を傷けると否とは天意だ、仕方がない。

こんなに思つて來た達子は、お母さんがどう被仰るかとおづ〳〵しながら、

達「お母さん、小田卷草の蕾が出かけましたなあ、一株私戴きたいのですがらくでせうか」

と聞いて見た。

母「どうするのぢやね？」

達「學校の先生が呉れと被仰つたのですが、持つて行つてあげてはいけないでせうか？」

達子は妙に「永野先生が」といふ事が云へなかつたのでたゞ「學校の先生が」といつた。

母「何といふ先生ぢやね？」

達子は何故か叱られて居る樣な氣がしたが、やつとの思ひで「永野先生です」といつた。

母「永野先生と云や、以前此の近所の借家に居た巡査の息子ぢやないかね？」

達子は「もつと丁寧な言葉使をしてもよかろうに」と少し腹の立つ樣な氣がした。

母「それはあげてもよろしいが、あれ位の株になるまでには何年もかゝつたんぢやで」

達子は又心で「そんなに惜しがらなくてもよかりさうなものに」と思つた。でもお許が出たので嬉しかつた。

達「それぢや貰ひますよ、どれを拔いてもよろしいか？」

「よい」といはれたら一番よい大きい株が拔きたかつた。

お母さんは御自分で庭に出て來て中位な株を拔いて下すつた。

母「植木鉢になりと一寸植ゑて持つてお行きよ、土が落ちんでよいから、そらこれを借せて上げよう」

と椽の下の方から植木鉢を出して下すつた。一寸した事ではあるが、達子はお母さんが自分と同じ方向に心をむけて助けて下さつた事が非常に嬉しかつた。そして今自分が一寸でも不足がましい心持になつたり、「一番大きい株を拔いてやらう」と思つた事が心恥しくなつた。近親の人に自分の愛する者を愛して貰へ、自分の敬するものを敬して貰へる事は、自分が愛されるよりも嬉しい事で幸福の源の樣な氣さへした。今お母さんの愛して居られる小田卷草の一番大きいのを拔かうかと思つた事は惡い事だつた。父母之所レ愛亦愛レ之。父母之所レ敬亦敬レ之。至二犬馬一盡然だつた。心がどこかへ偏よりかけるとつい得手勝手になつたり、道理が判らなくなつたりする。困つた心だと思つた。

達「お母さん、こゝの雛菊を一株一緒に持つて行つてもよろしいか？あんまり可愛い苔だから」

母「そんなもの珍らしうもあるまいが、あげるんならあげてもよろしい」

達子は嬉しかつた。雛菊は達子の大好きな花なのだ。特に莟の尖のポッと赤く匂つた所が無邪氣で、十六七の小娘を見る樣な氣がする。小田卷と雛菊とを一つの鉢に植ゑた時、ふと、永野先生が小田卷、雛菊が達子、といふ樣な氣がしたが、すぐ後から「あゝ惡い事を思つた。そんな意味じやなかつたのだと」取り消した。そしてイソ〳〵と鉢を抱へて門外に出た。

五十四

鉢を抱へて永野さんの門を潛る時は流石に動悸が打つのを覺ゑた。門から戸口までかなり長い間の飛石を殊更にゆつくりと手間をかけて歩いた。どんなに云つて案内を乞はうかと思ひつゝ。それは家の建物が大きい爲に威壓されるのでもなく、家族と初對面の爲の恥かしさでもなかつた。

閾を跨いだ時には、やはり普通に「御免下さい」といふより外なかつた。それは小さい聲だつた。

お父さんはまだ署から歸られないし、お母さんの先年死なれて以後は弟や妹はお母さんの實家へ預けたのだそうなから、家はガランとして淋しい。取次に出て來る人も他にはないので自分でッカ〳〵と出て來なすつた。そして書生つぽげに立つたまゝ障子をあけて、

永「ヤア持つて來て下さつたのだすか、どうも早速に」

と例の頭をグルリと撫でゝ濃い眉毛を上下しさなる。

達「先生ほんの一株ですのよ。それからお宅におありかも知れませんけれど、私が好きですから雛菊を一株持て參りました。どこかお裏の方へでも持つて參りませうか？」

と鉢を持つてウロ〳〵した。

永「イヤ私が戴きます。この鉢は暫く拜借が出來ますか？」

達「エ、何時迄でも」

二人は鉢を授受した。瞬間に達子は自分の血が頭の方に上つて行くのを覺ゑた。耳鳴をも覺ゑた。人から見ればきつと赤い顏をしたに違ひなかつた。

二人は學校で毎日會つて居るのだが、會ふ場所が異ふと又變つた心持がする。話題はないのだ。

永「まあお上りなさい」

達「有り難う存じますが、今日はこれで失禮します」

永「さうですか、どうも有り難う存じました」

達「さようなら、お邪魔を致しました」

簡單な應對だから一分間もかゝるか、かゝらないかだ。でも達子にはそれが生涯得忘れない程の嬉しさだつた。そのくせ嬉しければ嬉しい程、何やら良心が責める樣な氣がした。非レ祭非レ喪不レ相ニ授一器ヲ と昔の支那人はいつて居るが、男と女とが器を手渡しする事はよくない事だ。支那人はよく知つてるとも思つた。

永野さんの門を出てふり返ると松の大木が塀の外に枝を伸ばして、古葉は赤茶けて居るが綠がグン〳〵上つて居るのが見ゐる。「隱るゝまでも顧しはや」の古歌が思ひ出される。

達子は自分で心を引きしめ引きしめして見ても中々自由にならない。雜草を拔いても拔いても生ゐると同じだ。戀の芽は松の綠が伸びる樣な勢で、絕間なく伸びよう伸びようとする。達子は晝となく夜となく理性と感情との大爭鬪を續けねばならなくなつた。そして名譽心が强いといふか卑怯といふか、其の爭鬪を人には感づかれたくなかつた。

一顰一笑一擧手一投足にも心を使つて公平を缺ぐまい、中庸を失ふまいとした。

さうすればする程妙なもので、丁度振子が中央に止まらうとして却つて行き過ぎて他方に振れる樣に、他の同僚には心易く打ち解けられるのに、永野さんに對した時ばかりは嫌に袴を着た樣になる。顏容でも美しく見られたいが一杯のくせに、却つて無雜作に前にも增して襤褸を纏ふ樣になる。

そして人の見ぬ時には聲をあげて泣いて見たくなつたり、無茶苦茶に歩き廻つて見たくなつたりした。實際そんな眞似もした。夜通し泣き明す事も度々だつた。

達子はあの氣狂の心理作用が判つた樣な氣がした。自分も自分の理性で引きしめ引きしめしなかつたら、あの氣狂の樣になるのだ。あの人間は誇大狂だが、自分は色氣狂になるにきまつてゐると思つたりした。

氣狂といへば、此の間の氣狂は其の後達子の家に度々來出した。薄氣味惡くなつたので、達子はなるべく姿を見せない樣に隱れまはつた。

一度は小兄さんを捉へて、

狂「お前は達孃さんの兄貴ぢやらうがな、之を達孃さんにあげてくれい」といつて桃を二つ出すので、小兄さんが「いらん」といふと內庭へはいつて來て竈の前に置いて往んだ事もある。

五十五

ある日、それはかなり暑い午後だつた。達子は放課後一心に直し物をして居ると、誰か椅子の後に來た樣なので、ふり返つて見ると、そこに氣狂が平蜘蛛の樣になつて頭を床板にすりつけて居た。

狂「私やあなたにすみませぬ。わたくしや貴女にすみませぬ。どうぞ許してくーだーさーれーまーせー」

おしまひの方は怪しげな浪華節になるのだ。憐れげな樣子なので可愛想だとは思つたが、頭を下げて居るのを幸、達子はそつと足音をしのばせて其の場から逃げた。そして倉の中に隱れた。達子がそこに居らぬ樣になつたとも知らずに、氣狂はやつぱり同じ事を繰り返して居るらしい。

「何とか云つて慰めてやればよかつた。氣狂でも嘗て自分が無禮をしたと思つて後悔したのだらう。醉が醒めれば理性も目覺める。其の時におぼろげに殘つて居る記憶がどんなにか自分を責めて苦しませるのだらう、可愛想に。私が逃げて隱れたのは大人げが無かつた」とも思つたが、さればとて出ていつて言葉をかけてやる勇氣も出なかつた。

其のうちに詫びる言葉も聞かぬ樣になつた。蒸し暑いのをこらへて氣狂が歸つて行くまで倉の中で辛抱した。その時だつた。退屈まぎれにそこらを眺めてゐるうちに、達子の心を沸かくり返す程驚かす物を見つけたのは。

それは小塗板が四五枚重ねてそこにしまつてある、其の中の一枚に見事な筆跡で文字が書いてあつたのだ。永野先先でなくて誰がこんなに美しい草書を書かう。何が書いてあるの

だらう？　達子は生憎草書をろく〳〵知らない。漢字ばかり並んで居ても漢文ではない樣だ。拾ひ讀みをして見るに、どうも萬葉假名で萬葉風の讀方をせねばならぬらしい。「君し思へば」だの「東風ぞ吹く」だのといふ句がかなり讀める。戀歌らしい。

學校中の男女教員の中で萬葉でも嚙つて見ようかと思ふ者は、校長と永野さんと達子とより他には恐らくあるまい。永野さんが書いたに違ない。さうして見るとあの人も戀をして居られると思はねばならぬ。あの樣に平靜な樣子で毎日學校へ出て被入るが、丁度達子が燃ゆる程の思を包んでゐながら平靜を粧ふ樣に、彼の方も燃ゆる思を包んで居られるのではあるまいか。相手は抑誰だらう。お千代さんだらうか？女生徒だらうか？此の頃は附設女學校の生徒が達子を介せずに、直接に永野先生の私宅へ行つて習字を習つて居る事は事實だ。もしや其の中の一人ではあるまいか。達子は考へねばならない。考へるといつて誰であるかを考へたつてそれは仕方のない事だ。たゞ相手が達子以外の人である場合に達子はどうしたらよいのだらう？　萬々一にも達子だつたらどうしたらよいのだらう？　それを考へるのだ。

もし前者であるなら、彼の人の心を傷つけない樣に遠慮して差控へて傍觀する。それは若い血の通つて居る者には死ぬよりも苦しい事だ。しかし一人の男を二人で爭ふ醜さよりは美しい。そしてそれが愛する人の幸福であるならば、どんなに苦しくともぢつと我慢して色にも出さずに長い一生を默つて送らねばならぬ。それが眞の愛だ。

あゝ理屈はさうだが何といふ悲しい恐ろしい苦しい事だらう。自分にそんな事が出來るだらうか。修養すれば出來ようたつて修養しきるまで最後まで根氣が續くだらうか？　命が續くだらうか？「I先生の時にも默つてこらへたぢやないか、副醫長の時にも辛抱したではないか」といつてあれは今から思へば戀ではない。今の自分の心に比べると小指の尖程の心の動搖にすぎなかつたのだ。でもならぬ堪忍するが堪忍だ。命がけて堪へ忍ばう。一度は自殺しかけた私だ。一度は病氣で死にかけた私だ。死んでゐるのだと思つて忍ばう。もし萬一相手が達子であつたら……あゝ思つて見ても嬉しい事だ。でも有頂天にはなれない。達子には親だの家だのといふ背景がある。彼の方にもある。それをどう調和させて行く？家柄といふ無用の長物――かどうか知らないけれど見た樣な物――がある。達子のお

父さんでもお母さんでも親戚の人でもそれを大變大切にせられる。永野さんにはそれがない。して見るともう其のさきは云はなくても判つてゐる。判つては居るがそれを何とか無理のない樣に、悲劇の出來ない樣に都合よくして行かなければならない。それが又中々の難事だ。それを思ふと、傷ついた心をもつ二人の者を作るよりは寧ろ一人であつた方がよい。彼の方が思つて被入る人は、達子以外の人である方がよいとも思はれる。

種々考へに考へた揚句、達子はお千代さんを連れなつて來て小塗板の文字を讀ませた。そして自分の想像をも打ちあけた。お千代さんは「ほんに何だか可笑しな歌のようですなあ」といつただけで、さう大事件とも考へぬらしく、相手は誰だらうとも考へないらしい。「一寸書いて見なすつたのでせう」と結論してしまつた。

さういへばさうなのかも知れない。物は簡單に考へればらくでよいな、と達子も思つたがそれでも何やら心の底にこびり付いて、以後どれなくなつた。

五十六

そのうち夏休が來た。日直は達子とお千代さんとで引き受ける事にして、二人は縫物や洗濯物を持つて學校の宿直室に集つた。

廣い運動場には人間の蔭も木の蔭もないので、干せば乾き干せば乾き、氣持がよい程糊付が出來る。

惣領娘に生れたお千代さんは此道にかけては先生だ。手早くて、さつぱり出來て、順序よく仕事が片づく。縫物も上手だ。達子は足許へもよれない。

お千代さんの女の仕事になれて居るのは今に始まつた事ではない、達子は昔から感心して居るのだ。女學生時代に夏休がすんで九月に皆集つて來ると海水浴に行つた話や旅行の話や讀んだ小説の話やでもちきるが普通であるが、達子がよつぽど精出したつもりで「私は單衣や綿入や帶や皆一枚と數へて十六枚縫ひました」といふと、お千代さんは七夕樣からお盆までの間に布團を十疊解いて洗つて、繼をあてゝ糊をつけて縫つて綿を入れて綴ぢてしまつた、といふのだからまるで仕事の桁がちがつて居るのだ。そして「妹が此の頃は大分役に立つ樣になつて一々指圖をせんでも煮焚きが出來だしてくつろぎました」といふの

だ。達子は實の處まだ一度も御飯を焚いた事はなかつた。おまはりは勿論だ。お千代さんの妹にも及ばないので恥しくて話にならない。女學生時代からこんなに違つて居た二人は次第に接近所か離れ方が大きくなつてお母さんと子ほど仕事が違ふ。これでも女學校の同級生かと思はれる。達子は見習ひ見習ひした。でも晝食後漢籍の下調べをする時は達子の方が先生になつた。やつと下調を終ると達子のお父さんの所へ二人で習ひに出かける。そして習つて歸るとまた話をしながら夕方宿直の男教員が來るまで縫物なんかするのだ。

千代「小學つてよい本ですなあ、むつかしいけいど少しづゝ判りかけましたわ」

達「ほんとによいでせう。儒教のどんなものといふ入口位は判るでせう。なんぼ支那人の本でも馬鹿にはなりませんわ。日本人でも一通り讀む必要があると私は思ひますよ。それは七去だのと男に都合のよい事をいつたり教令不レ出二閨門一事在二饋食之間一而已矣。といつたりしてあるのは今の女には少しむかないかも知れませんが時世が違ふのですからどうしたつて改良を要するのは免れませんわ。それを以て儒教の総てを古いとして捨てたもんぢやないと思ひます。それにもと〳〵兩端を知つて中道を取つて、日々に新たにして行くのが儒教の精神なのですもの生二乎今之世一反二古之道一如レ此者 哉 及二其身一者也。とさへいつてある位ですからなあ。それはそれとして、小學なんか讀むと一層あんたが感心になりますわ」

千代「ホヽヽ、それはまたどうして？」

達「どうしてだつてあなた。鷄初鳴咸盥漱云々を實行するでせう。理屈は云はなくて日々實行する位よい事はございませんわ。そして和氣があつて愉色があつて立派な德が生れながら備つて居るんですもの。私詩經を習つて桃之夭々灼々其華。之子于歸宜二其室家一といふのがあつた時、あんたの事だと思ひましたわ。私なんかは理屈つぽくこそあれ、女のせんならぬ仕事はようせず、三不祥のそれこそ三つとも備はつたものですわ」

千代「何だかむつかしいわ。三不祥なんて私とうの昔に忘れてしまひました。何でしたかなあ」

達「それ、幼而不レ肯レ事レ長。賤而不レ肯レ事レ貴。不肖而不肯事賢。でしたでせう。今の世の中は此の三不祥が當然とせられかゝつて居るのぢやないでせうか。そして足利の末に

下克上が流行して遂に戰國となつたと同じ事がこれから繰り返されるのではなからうかと私そんな氣がしてなりませんわ」

千代「ホ、、、千里眼見たようだわ。でも本當にそんな時代が來るかも知れませんなあ」

達「ほんとに來ますよ。階級の嚴重にあつた封建時代の反動といふか、差別を本來として大義名分を重んじる儒敎の反動と云ひますか、無階級になつてしまつて極端から極端へ一度走つて、そして其の弊にしつかりなやまされて今度改造せられた社會はよくなるでせうよ、皆の理解した上で出來た得心のいつた階級ですから。民可レ使レ由レ之不可レ使知レ之と嘆いた時代が過ぎ、生嚙りをして上を輕んじ困らせる時代を通り越し、民知而由レ之といふ時代がいつかは來なければなりませんわ。論語に不レ可レ使レ知といつてあるのを「知らせてはならない」と解釋して儒敎を攻擊したりする今の時代はやつぱり生嚙りの生意氣時代ぢやないでせうか」

千代「ホ、、、ほんとに此間來て講演した人も『知らしちやならない』といひましたわ」

達「自分で間違つた解釋をして置いて怒るのが可笑しいぢやありませんかなあホ、、、ほんとに世の中にはそんな事が澤山あるに違あまりせんわ。『人の振り見て我振なほせ』で私共も毎日無知や誤解から色んな失敗を知らずにして居る事でせう。そして知つて居る人から、或は神樣からそれを見ればどんなに片腹痛い事でせうか。まあ滑稽な位ですめばよろしいが、人を傷けたり迷惑をかけたりする事も多いだらうと思ふと、小心翼々にならずには居れませんなあ」

千代「私なんかうつかりして居ますけいど、ほんとにさうですなあ」

達「親が快樂を追ふのに夢中になつて不道德や不攝生を顧みないで、子供を粗製濫造しておいて『生んでやつたのだから孝行をせよ』といつたり、子供を玩具の樣にして育てゝ置いて、『育てゝやつたのだから孝行せよ』と强いたりするから、宿業に苦しんでる子の方ぢや『頼んで生んで貰つたのぢなし、其の當時の享樂と差引にすりやよいぢやないか』と思ふ樣になるので、それは强ち幼者・賤者・不肖者ばかりが生意氣なと責めたもんでもありますまいよ。長者・貴者・賢者にだつて氣のつかぬ極微な所に過が無いとも限りませんわ。だからつまり双方が人を責めずに自分を責めて、小心翼々として居たら云ふ事はな

いんですなあ。男女有レ別。然後父子親。父子親然後義生。義生然後禮作。禮作然後萬物安。といふ句は私ほんとに氣に入りましたわ。此の句を世の中の人がみんな味はふ事が出來たら理想的な國が出來ると思ひますわ。何といつても男女お互に人格を尊重し合つて、狎れ過ぎずに久しくして之を敬すといふ樣だつたら子だつてよいのが出來ようし、隨つて暗黑時代も未然に來るのが拒げようし、これが根本になる道德だと思ひますわ」

こんな話が毎日出會ふお千代さんと達子との話柄だつた。そして喋るのは達ちやんで、お千代さんはおとなしい聞き手だつた。

永野さんはまた毎日きまつた樣にテニスをしに被入る。格子の外をラケットをさげて「お暑うございます」と簡單に禮をして通られるのが例だ。達子は長い教室の一棟を隔てた向ふの運動場にポーン〳〵といふ毬の音のせぬ日は淋しかつた。

五十七

夏休の終りに近づいた頃講習會が開かれた。

講師は達子のお父さんで書物は中庸と大學とだ。講習員は郡內の男女教員の中の有志者で女教員は十名に足らないが男教員は七八十名ばかり集まつた。

達子は宅でのお父さんの教授ぶりは見てゐるが、教壇に立つて百名からの者を教へるお父さんを始めて見るのだ。

七十に二つ程たらぬだけの老年ながら何時間でも講義をつゞけられる。唇の色が紫色に變つても平氣だ。時々手で頸筋を握る樣な風をせられる。耳が聞ゐぬ樣になつた時にいつでもさうせられる一つの習慣なのだ。もう根(こん)がつきて耳が塞がつたのだと平素を知つて居る達子は一人ハラ〳〵するが、それでも講義はやめられない。そこが老人だけあつて、鐘や鈴には一向おかまひなしだ。幹部の人が「暫く御休憩を」といつてお辭儀をすると始めて講義をやめて叮嚀に禮をして壇を下りられる。「どうぞお始め下さい」といふと又始められる。講習員の方は蒸暑さにたまり兼ねて、ハタ〳〵と扇をつかふやら、ハンカチを以て拭きまはるやら、頰杖をつくやら片足を股の上に乘せるやら動きまはつたり話を勝手にしたりするが、お父さんはお湯一口も飲まれず扇子など無論使はれない。

退屈まぎれに講師の態度の研究をして居る一女教員は、「始先生が教壇に立たれた時、踵と踵との距離が二寸だつたが、二時間後の休憩までに一分の變更もしなかつた。其の代りに手は一分間の靜止もしないで動き續けてゐた」と報告して笑はせた。手は宅でもいつも動いて居るのだ。老年のせいて始終ビリ〳〵と震つても居るのだし仕事もよくする手なのだ。寢て居られる時間を除いたら恐らく何十年か手の靜止した事はないと斷言しても誤りぢやない。

父「御質問がございますれば御遠慮なうお尋ね遣はさるやうに」

と被仰つても誰もさう尋ねない。居睡をして居ては質問もなからうし、お父さんが口早いから皆に判らないのだらうと、達子が氣を揉んで部屋中見廻して居ると、永野先生のイガグリ坊主がヒョクリと起立した。

永「一寸お尋ねします。南方の強と北方の強と、先生御自身にはどちらが勝つて居るとお考へになりますか」

父「私はやはり寛柔以敎不ㇾ報ニ無道一。といふ南方の強をとります。衽ニ金革一死而不ㇾ厭といふ北方の強も時として必要ではありますが、和而不ㇾ流といふ方が實行上むつかしい事で、其の方が高い德ぢやと思ひます」

達子は強に關する質問をせられたといふ事が永野さんの性質に非常によく調和した、ふさはしい質問だと思つた。

そして達子自身には鳶飛戾ㇾ天魚躍ニ于淵一といふ句が判つた樣な判らない樣な氣がした。君子語ㇾ大天下莫ニ能載一焉。語ㇾ小天下莫ニ能破一まではよく判るが何だか其次は禪味のある語の樣に思はれたりする。大を語ると際限がなく小を語ると又際限がなく、破つても破つても破り盡せぬほど細かいといふのは、宇宙間に塡充して間隙ある事を許さない即ち有の極で無と一致するものではあるまいか。サイヤンスの方の原子說電子說などと此の點で一致するのぢやなからうか。差無別でありながら其れが其のまゝ差別で鳶は飛んで天に戾り魚は淵に躍る。君は君。臣は臣。父は父。子は子。夫は夫。婦は婦といふ意味ぢやなからうか。一度絕對界に這入つて再び相對界に出て來る、そうして始めて萬物を萬物としてありのまゝにはつきりと肯定が出來る。自分といふものを客觀する事も出來る。隨つて道も

判る。そこで佛敎では安心立命が得られて觀自在菩薩になれるし、儒敎では安行の聖人になれるといふのではあるまいか。

こんなに考へると、こゝらあたりの講義をもつと深く聞きたい樣だが宅で何時でも聞けるのだし、佛敎なんか擔ぎ出すとお父さんは異端だといつて嫌はれるのは判つて居るのだから一人默つて聞いて居た。

中庸の講義が次第に進んで最後の子曰聲色之於(テハ)二以化(スルヲ)一民末也。詩曰德輶(カロキコトシ)如レ毛。毛猶有レ倫。天上之載(コト)無(ク)聲(モシ)無(シ)レ臭(モレリ)至矣。といふ所になつたら達子は涙が溢れる程嚴肅なそして嬉しい心持に打たれた。扇をハタ〳〵使ふ連中もさすがに鳴を靜めて大きい敎室が水をうつた樣になつた。儒敎は宗敎ではないと世の人はいふけれどやつぱり宗敎ではないだらうか、それは葬式の世話をしたりお祈禱をしたりはしないけれど、聲もなく臭もなき嚴肅なるもの、それは名付け樣がないから天といふが、それを信仰して不斷の祈りを續けるのが儒敎ではなからうか。丘也禱久(シ)矣と被仰つて居るが、ほんとに晝夜の別ちなく長い一生を禱り暮すといへばいへよう。達子も禱らうと思つた。

五十八

漢籍の講習が朝のうちですむと、午後は有志の者が集まつてダンスの講習をするのだ。其の頃地方ではダンスは非常に珍らしいもので、生徒は習ひたがる。先生は知らない。遊戯の書物を買入れて見ても、水鷄歩が何やら搖籃歩が何やら、セットがどんな事か、ターンがどんな事か、悉皆見當がつかないといふ有樣だつたのだ。

そこで郡中で一番よく知つてゐるものが講師の役を承はつて皆を率ゐて入門させようといふ企てなのだ。

ダンスを習つてゐるのはどうしても女だ。最近の縣立高女出身の達ちやんが巨擘といふわけだ。其の次がお千代さん、其次が私立高女出の八重子さん。この三人は當然講師の役を仰せ付からなければならなかつた。

「男の手を取つて敎へるのは嫌だ」と一應ことはつたが許されない。「西洋だつたら男女が組むときまつてさへ居るのだから」と一番年上の八重子さんが云ひもするので、思ひき

つて東洋流儀を捨てゝ講師の役を引き受けた。身長順に列ばせて見るとそれは面白い。電信柱の樣なのや、骨と皮とにて作り候といふ樣なのや、十六燭光や、鬚達磨や、家鴨の尻つぼや、平家蟹や、エメラルドグリーンや、セピヤや、豆法師や、電車に敷かれた何とかやとり〳〵だ。それがいづれも硬骨男兒だけあつて硬いの硬くないのといつてお話にならない。「一歩前」といふとドースンと坐板を踏み拔く程徹底した音をさせる。「廻れー右」と號令をかけると「ウオー、二、三」とだみ聲を出す。グランドチエイン位なものをさせようと思つても口の説明だけでは通用しない。一寸手をとると大變だ。もう何時まででも離さない。そして骨まで挫げよと握り締めるのだから仕末にをへない。引きまはさうと思つて一所懸命になつて見ても、中々の事、大地から生ゑた大木の樣でいぢともどぢとも動かばこそだ。いくら「輕く〳〵〳〵」と聲が嗄れる程いつても輕くはならない。困つた先生ばかりだ。講師樣だちは汗みどろになつて泣き出しさうになる。かなりグランドチエインを覺ゑさせた頃には手がヒリ〳〵し出した。

其習日はタンツライゲン其の次の日はドライタクトを敎へたが電柱や達磨の連中中々づるい。自分等はせずにおいて、「先生も一度やつて見せて下さい」といつては女にさせて見物して面白がつて居るのだ。講師樣もそれを曉らない事はないのだが、いはれるまゝに何度でも繰り返した。「かうして何度も見せて居るうちにはいくら電信杭連中でも多少は重いとか輕いとか硬いとか硬くないとかいふ區別だけでも見ゑだす樣になるだらう」といふ公的の美しい犧牲的精神からと、も一つは「自分の輕妙な技を意中の人に見て貰ひたい」といふ私的の野心からとでなるべく氣取つて演じたのだ。達子はもと〳〵永野先生が遊戯の講習をうけに來られたらどうしようと胸をドキメキさせて居たのだ。グランドチエインなんかして若し手を取らねばならぬ事があつたら、どんなに恥かしいだらう?それを假りに想像しただけでも消ゑ入る樣で、嬉しいといふよりは苦痛が勝つて居たのだつた。が幸に永野さんは他の數人と一緒に始めから見物人で通された。それで達子は安心して飛んだり跳ねたりする事が出來たのだつた。

お千代さんは隙を見てそつと達子に囁いた。

千代「そら、あそこの永野先生の右に並んで窓に凭つて居るでせう、あれが私に話のある

西町ですよ」

達子は見ない樣な顏をしてはチョイ〳〵そちらを見た。俄かに敎室が明るくなつた樣だ。何といふ好男子だらう。醜男どもを今引づりまはして居た達子の目にはまぶしい程輝いて見ゐる。永野さんより脊もすらりとして居るし、目鼻だちに難くせがなく上品に出來てゐる。といつて少しもめかした跡はない。にやけては居らぬ。がつしりと男らしく凛々しくて、どこと點のうち所がない小學校敎員には惜しい風采だ。

「あの方も、きつとお千代さんと手を取るのがきまり惡くて、仲間にはいらずに見物人になつて被居るに違ひない」と達子は想像した。

見物人の中にはも一人達子の目にても美しいと見ゐる人が居る。それは皮膚の光澤に於て西町さんを凌駕して居るが、めかした跡の見ゐる事と品格とに於て一歩讓つてゐる。まづ西町さんが雪舟の山水畫なら、此人は輝方さんの浮世繪、永野さんは北齋の人物畫といふ格だらう。

西洋人だつたら思ふ人と腕を組んでダンスをするのだらうが、東洋人にはそれが出來ない。組まねばならぬ機會が來てもなるべく避けようとする。それは周圍の壓迫でも何でもない自然に生れついた性質なのだ。或はでなければ敎育から來た第二の天性なので、しかしそれはたゞ達子の天性なので、達子の主觀から生じた憶測かも知れない。西町さんや永野さんが見物人であつたのは遇然なのかも知れぬ。

五十九

ダンスの講習を終つて〳〵になつた達子は、人の居ない音樂室を選んで、お千代さんと二人でそこに一息ついて風を入れて居た。それをどうして知つたかHさんが後を追つて來た。

H「毎日御苦勞ぢやのう。しかしダシスの講習は大もてぢや。みんな喜んどるぞ。『こんな面白い講習を受けた事がない、漢學の時間の睡氣が醒める』云ようらあフ、、、」

千代「それは先生のヴァイオリンがうまいからでせうよホ、、、」お千代さんはうまく報いた。

H「さうかも知れん、マーチを聞いた事のない連中も居らうでいやフ、、、」

達子の側に來て腰をかけたHさんは少し酒臭かつた。

H「わしも久しぶりにお前等のダンスを見て嬉しかつた。達子さん。お前に惚れて居るもんがたんと居るぞ。洋服を着てシャッ〳〵〳〵と跳躍をするスタイルがよいていやフ、、、」

達子はほんとに洋服を着て居たのだ。それはお父さんの縣會議員時代に着られた服を仕立なほして利用したので、ヅボンを解いてしまつて綴り合せて日本服の樣に前で合せるようにし、其の上に普通の女袴を穿いて居たのだ。

それは一擧三德にも四德にもなるのだつた。第一手の擧げ下しが窮屈になくて運動するのに都合よい事。第二儉約になる事。第三美しくないから男の心を誘惑して傷つけたりしない事。第四隨つて自分が男から誘惑を受けぬ事。こんなに德があるので人が笑つてもかまはずに着て居たのだつた。

達「ホ、、、またよい加減な事ばかり被仰いますな」達子は横をむいて居た。

H「いや本當で、わしの部下に最も熱心なのが一人居るが、わしは『それは諦めにやいけん』いふんぢや。のう、お前はわしの妹ぢやもののう、人の自由にさせるもんか。其の證據にや、ちやーんと寫眞を交換してをるんぢやないかのう」

Hさんは不意に達子の首をかゝへて頬ずりをした。

達「まあ先生」

逃げようとした時はもう頬をもて來て摺りつけられた後だつた。汚くなつた樣な氣がして自分の頬を撫でゝ見たが何もついて居るのではない。「肉を切つて捨てねば此の汚れは取り去られないのだ、腹の立つ」と達子は口惜しくて堪らなかつた。鹿爪らしい顏をして寫眞をくれといふものだから、つい遣つたのだ、一杯食はされたのだ。どうしてこんな人間に遣つたんだらう、地だんだ踏みたい氣がする。でもさうプリ〳〵怒られもしないから、たゞ默つてそこを立つて他の方へのいた。

H「西町が來とつたのうお千代さん。美男子ぢやらうが、あれが郡教育會の東の大關ぢや。西の大關が新田ぢや。そら西洋人のような色澤して八字鬚のすばらしう奇麗な奴ぢや。見たらうが」

千代「後ろに立つて被居たでせう、知つてますわ」

H「うん奇麗ならうが、わしはあれに八重子さんを世話をするとよいと思ふがどうぢや？よからうがどんなに思ふ？」

達「八重子さんを？」

達子はついさういつて振り向いた。

H「いけん？どつちが嫌うと思はれる？」

達「……」

夏休前の或る暗い雨の夜達子は用事があつて外出した。其の時暗い軒下に提灯も持たないで男と女とが相々傘でヒソ〳〵話をして居るのを見たのだつた。見ねばよい事に達子は自分の持つてをる提灯を少し差しつけ氣味にして透かして見た所が、それが八重子さんと博物學者の河本先生とだつたのだ。達子は刹那に「怪しいな」といふ感じがしたが、誰にもそれを言つた事はない。お千代さんにさへも言はなかつたのだ。そして自分で一人、畫不レ遊ニ中庭一夜行以レ火所三以正シクスル婦徳一也。といふ句が眞實だ。あんな事をすれば誰でも怪

しむわいと思つて居たのだつた。

H「二人とも似合うたもんぢやろうぢやないかあの八重子といふ奴はのう、一時はわしに惚れとつたんぞ。わしが今の家に養子に行くときまつた時にや、わしをあの裏の借家に呼び込んでさん〳〵泣きついて困らせたんぞよう。『もう死んでしまふ』ぢやの『一生お嫁には行きません』ぢやのと云うて、こゝだけの話ぢやけい人には云ふて呉れなよう。ほんとにわしも其の時にや煩悶したよ實際。フツフ、、、、」

H先生得意らしくカイゼル鬚を捻つて居る。達子は教育者の仲間にもこんな人種があるのかとあきれた。

達「そんなら新田先生に貰へといふのも氣の毒で、八重子さんに嫁げといふのも氣の毒ぢやありませんか？」

達子はものも言ひたくない程腹が立つて居るのだけれど、努めて穏やかにそんなに云つた。

H「新田もあれで中々隅に置けんのぢやからなかまふもんか、八重さんぢやつてもう昔に氣が變つとるぢやらうでいフ、、、」

達子は、自分だつたら失戀したつて、死ぬなら默つて死ぬし、獨身で暮すなら默つて一人さうする。相手に知らせて苦しめて何の役に立つものか。又そんな心に傷のある人を嫁に世話しようといふ人も人だ。此の人達は戀を遊事と心得て居るのではなからうかと腹立たしい氣がする。

人の事ぢやない。自分も今永野先生に戀をしつゝある樣だ。日に日に深くなつて行く自分の心をどうする事も出來ないでぢつと眺めて居るのだ。たゞ色に出さうな時、行動に現はれさうな時に理性の埒をぐつとしめるだけで、埒の中では狂つて躍つて燃ねてゐるのだ。どこまでそれが燃ねてどうをさまりがつくやら、丁度人が一呼吸毎に墓場に近づく樣に、戀も結末の日に近づきつゝあるのだ。いつかは悲劇か喜劇かが來なければ置かないのだ。あの方の人格と達子の人格とはどう此の戀を裁くだらうか、Hさんや八重子さんの樣にはありたくないものだと思つた。

六十

村の若い者は日露戰爭の爲に召集せられて殆ど全部といつてもよいほど行つてしまつて居るが、徵兵猶豫の學生だけは夏休て田舍に歸つて暢氣に暮して居る。小學校はそんな人達の集り場所だ。美術學校や高商や高等商船や、女では音樂學校のお幸さんや、都會の風を吸つて來た人達が一つ新智識を輸入旁、遺族の爲に慈善音樂會を開かうと云ひ出した。誰も反對するものはない。さうなると小學校は當然會場で小學校敎員は役者にならねばならなかつた。

背景は勿論美術學校の生徒が受持つ。故鄕に於て技倆を示す第一歩でもあるし非常に熱心な人だから本氣で取りかゝる。

活人畫借月照と大西鄕の船出の背景に使ふ月の大海原が出來上つた。遠くから見ると波の音でも聞こねさうな程よく出來た。海を見た事のない田舍者にはよい直觀敎授が出來る。

歌劇「木の葉の宮」に使ふ背景の森の中のお宮さんも一度背景として使つて後を倉の隅にほり込むのは惜しい程入念な立派なものが出來上つた。森の下草の夕日を受けて光つて居る所は格別達子の氣に入つた。田舍の音樂會の背景には實に勿體ない樣なのが次から次と

四五枚出來上つた。

音樂はまたお幸さんの苦學して得た技倆と、天成の肉聲とが故鄕の人の耳を驚かさうと待ちかまへてゐる。

お千代さんや達ちやんは歌劇の身振りを工夫して子供に敎へ込んだり、お幸さんを煩はさなくてもよい程の一寸した歌を彈いたり歌つたりする役をつとめるので、其の方の練習にかゝる。

準備がずん〳〵出來て行くと、みんな緊張もして來る。陽氣にもなる。隨分大きな聲を出しても誰も八釜しいとも何ともいはない。達子とお千代さんとは日にも日にもオルガンにかぢりついて居た。

達子の彈く歌、あゝそれは永野さんの作歌で、達子が他の曲譜の中から適當と思はれる譜を選んで來て節付けをしたのだ。それを自分が歌ふのだ。どれ程嬉しい事だつたらう？

鍵盤に指を觸れて、

見よ天心に紫雲舞ひ

聞け坤軸に絃歌湧く。

と歌ひかけようとすると、もう涙が頰に傳はるのだつた。ppからmfに移らうとすると心も體も歌に融けて流れて、一緒に昇天して行つてしまふ樣に自分ながら自分でなくなつて、莊嚴さと歡喜とに視覺も聽覺もボーッとしてしまふ。ありたけの音量を出して有りたけの命を罩めて

天地有情を示さんと

空に響けり神の聲。

と歌つて來ると神憑りがした樣に、今自分が雲に乘つて悠々と空に羽衣を飜へして居る氣持になる。

恐らく達子の一生を通じて、こんなに大音樂家の樣な心持になれる時は復とあるまいと思はれる。

自分が節付けたといふ藝術的な歡と、永野さんの作歌であるといふ戀から來た歡と、歌詞の宗敎的な喜とが合致したのだから、それも其筈だが、達子はまた藝術と戀と宗敎との極

致は歸一ぢやないだらうかと思つた。

永野さんは又土井晩翠さんの詩集の中から、詩人といふ新體詩を選んで「曲譜をつけて歌ふように」といつて女子の方に廻された。達子がそれも歌ふ事になつた。

詩人よ君をたとふれば光凉しき夕月か
身を天上にとめおきて影を下界の塵によす。

この歌に「春は櫻の花衣」の譜をとつて付けると靜かな調でよく合ふ。

達子は其の歌が永野さんの性格を讃美したものとしか思はれなかつた。それで達子は其のつもりで歌つた。行く雲は止めなくとも梁上の塵は落さなくとも、一つ教室を隔てた向ふの教室で準備に忙しくして居られる永野さんの耳にとゞいて呉れ、腹わたまで浸み込んで呉れよと何度も繰り返して懸命で歌つた。

歌ひ疲れた達子は手をやめてぼんやりと暫くの間考へた。

永野さんはどうしてこの詩人をお選びになつたのだらうか？たゞ歌として調べが優れて居るからといふだけだらうか？それとも誰か心に思つて居られる人――それはどうしても達子には誰だか判らないが――其の人を讃美する心から此の詩人がお氣に入つたのではあるまいか？若しさうだとするとこの讃美を受ける價値のある女は誰だらう？達子の知つて居る範圍の女ではお千代さん程美しい心の持主は他にない。それは詩も歌も出來る人ではないけれども、慾氣がなくて圓くて清くて、自分には知らないのだけれど無意識のうちに光のとゞく所を淨化する德がある。夕月といへば夕月だ。永野さんが若しお千代さんに戀せられるなら盲目ではない確かに選び得たといふものだ。達子はお千代さんと競爭しようとは思はない。美しい人同志の美しい戀として默つて守らう。

しかしお千代さんの方はといふと、誰にも一度も戀心を起したことのない人である事は確かだ。彼の人は多分家庭同志が承諾し合つて居る西町さんに對して初めての戀を起すだらう、そして永久に西町さんの物となつて幸福に暮すのが順當らしい。永野さんは西町さんとお千代さんとの事を御存じだらうか？若し御存じなしに戀して被居るのだつたら必ず失戀なさる時が來る。

我思ふ思はぬ人の思ふ人思はざるなん思ひ知るべく

といふ誰だつたかの古歌はあるけれど、永野さんに思ひ知らせたくはない。達子はそれ程我利ではない。出來る事ならあの方の心を傷つけたり曇らせたりせずに、何時までも月の樣に美しく若草の樣にのび〳〵とさせて置きたいのだ。でも今腹わたまで響けよと詩人の歌を歌つたではないか？あれは何故だ？矛盾して居るぢやないか。達子は苦しくなつた。

六十一

準備は充分出來た。案内狀も發送した。音樂會の當日は來た。夕方から三人五人と見物人は集まる。樂屋にあてられた教室は衣裳や調度でごつちやらかしだ。音樂會といつても實際は歌劇と活人畫と影繪とが大部分なので準備に手がかゝる。プログラムによつて役者を繰り出すのが中々忙しい。

鏡を一縮してこれから新田義貞になつて、稻村が崎に立たうと待ちかまへて居るのもあれば、今白粉をつけて居る最中の正行の母も居る。八重子さんはこんな時には間に合ふ人で無くてはならぬ世話役だ。

八重「一寸、出征軍人の彫像はこれから四つ目ですが、どなたがお出になるの？もうそろ〳〵準備におかゝりにならねばいけますまい」

八重子さんが晴々しい顏をして姉さんらしくいふ。

H「わしぢや。お白粉つけて白服を着るんぢやからわけはないさフ、、、八重さんお前お白粉をつけて呉れる？」

Hさんがのそ〳〵廊下の方から這入つて來る。

八重「エ、つけてあげますとも早く被入い。ビンツケを下にひかぬと厚化粧だからつかんでせう。どこかそこらにあつた樣でした、一寸それを投げて下さい。それからお白粉もそれがすんだらこちらへよこして下さい」

八重子さんは昔の戀人であるHさんに對して、何の遠慮も恥かしさも氣兼ねもなく顏や頸をいぢりまはして居る。そこに何の蟠りも思ひ出も氣拙づさも潜んで居ないらしい。Hさんが昔て話したローマンスは揑造ぢやなかつたらうかとさへ思はれる。それが揑造でないとすると如何にも戀に馴れきつてしまつて、素人らしくない惡むべき態度の樣にも思はれ

るし、また其の大膽さが羨ましい樣にもある。

永野さんは息子を兵士として送り出して居る母に扮するのだ。八重子さんのして居るのを眞似て自分でお白粉を塗つて居られる。お千代さんも達子も手傳はうとしない。又頼みもなさらない。

八重「永野先生待つて被居い、私がすぐに手傳ひますから」

八重子さんはHさんを手早く塗りたくつて永野さんに上塗をした。

八重「一寸白無垢を持て來て下さいな、手のあいて居る人は」

達子が持つて行つた。八重子さんはそれを受取つて、永野先生に着せて前を合せて腰に抱へ付く樣にして腰帶をぐるりと廻してギュッと締める。Hさんにとつた態度と少しも變らない馴れたものだ。前に廻つたり後に廻つたりして帶を結んで、

八重「一寸高野さん帶締」

達子は紐を拾つて八重さんに渡すのさへ胸がドキつく。

結び上げたお太鼓をポンと叩いて、

八重「ホ、、、恐ろしい肩幅の廣いお母樣です事、肩ゆきがチンチクリンで太い手がニュッと出てホ、、、」

お千代さんも達ちやんも笑つた。そして鬘の妙なのを被つた頭の先から足の先まで見上げ見下し穴のあく程眺めた。お千代さんは堪りかねて横腹をおさへて轉び〳〵笑ひ出した。

千代「頑丈なお母さんが卷葉を吸ひ出したわホ、、ホ、、、」

達子は平生人と向ひ合ふと視線のやり場所がなくて困るのだ。男の人には格別困つてしまふ。さうすると顔の筋肉が妙になつてはにかんだ顔になる。小さい時からそんなので大兄さんが「そら達子がはにかんだハ、、、」といつて笑ひなさるとなほの事はにかんで居たのだが、其の僻が大きくなればなる程直りはせずに一層ひどくなつて來て、永野さんの前にでも出る時には視線だけでなくて體の置場までない樣な氣が何時でもするのだ。そして此の頃になつて、其のはにかむといふ事は却つて男を誘惑するのではないかと思はれ出した。何故ならば達子がはにかむと先方の人も妙な目使ひをしたり、誤つた樣な振をして足や手に觸れて見たりする。四角い顔の河本さんだけかと思つて居たらさうぢやなくて、大

抵の男耳皆そんなにする、年の老少をも問はないらしい。そんな事を相手の人がすると達子の心は急に變つて、其人に對しては恥かしさが無くなつて、非常に大膽に輕蔑の視線を正面から浴せかける樣になるのだ。

しかし永野さんだけは決して達子の肉體のはしくれにも觸れそめもした事がない。達子はそれで一層恥かしくて眩しいのかも知れない。大方八重子さんの樣に平氣で肉體同志觸れ合へば、平生達子自身に持て餘して居る恥かしさ眩しさが取り去られるのかも知れない。こんな事を考へながら眞白の大理石の彫像の永野さんを眺めた。そして藝術品の觀賞は戀よりも苦がなくて肩が凝らなくて氣樂でよいと思つた。

會場の方では「肅々颯々今も昔も」とお幸さんが美しい聲で歌ひ終ると拍手が起つて、天神髯の校長の扮せられた菅公の活人畫がすんだ。

六十二

夏休が終つて二學期が開始せられた。校庭のポプラの葉が風にひらついて、氣の早い櫻は黄葉し始める。運動の好シーズンだ。永野さんを中心にテニスが繁昌する。お千代さんを先生にクロッケーが輸入せられる。運動嫌の青忠さんまでが運動場に出て來て槌を握るといふ有樣だ。達子も女學校に居た時からクロッケーをする事はして居たがお千代さんには及ばない。そこで上達の早い永野さんと達子と組んで、先生のお千代さんと下手くその青山さんと組むと力がほゞ平均する。

千代「青山先生、こんどは先生の番ですよ。さあ此の毬を狙つて御覽なさい。ソローッとですよ。行き過ぎたら材料にせられますよ。槌のお尻をもう一寸右、そう〳〵」

お千代さんが本氣で黄な聲をしてゐる。青山さんも本氣で土を掬ふ樣な格恰をしてヒョイと槌をはねる。コロ〳〵〳〵〳〵見當違ひへ。

千代「ホ、、、止れ〳〵〳〵〳〵、あんな所迄行つてしまつたわ。此の次に永野先生のあの毬でせう。また蹴られにやならん。まあよろしいわ。なあ青山先生。向ふには二人ともまだ無神經がすんで居らんのですもの、ようございますよ蹴られても」

お千代さんは青山さんの失敗を慰めるように云つて居る。

永野さんはニコ〳〵と

永「また蹴らして呉れるんか有難い」

カチリと苦もなくあてゝ

永「さつきは東南隅だつたから今度は西北隅かハ、、、」

と毬を並べて足で踏まへ加減をしてゐる。

達「永野先生もう蹴るのも腹に足りたでせうに、またお蹴りになるのホ、、、やつと吾妻屋をお出になつたばかりですから自分のお仕事をなさるとよいのになあ」

達子は勝敗を氣にして居るが永野さんは蹴りたい一方なのだ。

永「まあ蹴らして御覽なさい、其のアーチ位一度で潜りますよ御心配なさるなハ、、、」

ポカ――リ、トン〳〵〳〵〳〵コロ〳〵〳〵青山さんの毬は可愛想に遙か向ふの向ふの杉籬の根まで飛びつ轉びつ行つてしまつた。

青「ヒ、、、また御苦勞せにやならん、まあ二三日かゝつてボッ〳〵歸つて來るぢや」

泣きさうな笑顔をして毬について走つて行く。お千代さんも殘念さうに毬の行方に眼をや

る。永野さんは其の間に自分の毬の位置を三四寸動かして都合のよい所へ持つて行つて、アーチ一つ潜つてしまつた。

達「オヤ先生。毬を動かしちやいけんのですよ」

達子は驚いて注意した。

永「かまふもんですか知りやしませんよ」

お千代さんと青山さんとを一寸見て小さい聲でいつて置いて、今度は大きい聲で、

永「太田さん潜りましたよ、お行きなさい」

千代「ハイ、さあ〳〵お迎ぢやお迎ぢや、青山先生お迎へに出かけますよ」

カチ――ン。露はどもお千代さんは疑はない。達子はさつきの永野さんのカンニングを見つけてからは落膽してしまつた。自分の番が來ても本氣で狙ふ氣になれない。槌を投げつけておいて地べたに伏つて泣きたい樣な氣がする。

たとひそれが遊戯であつても、動かしてならぬと約束せられて居る毬を敵が知らぬ間に動かすといふ事は不道德だ。勝つたつて何の價値がある。昔の君子の射はそんな事はせなか

つた。日本の武士もせなかつた筈だ。達子は武士の娘、永野さんはやつぱり町人の孫だつた。士族と平民と同等だといつてもこんな所にこんな區別がある。悲しい因果だ。あの方の爲に泣かずには居られない。達子の戀の爲に悲しまずには居られない。

天は何を暗示して呉れたのだらう？達子の戀の深淺を試すのか？それとも警鐘か？捨てよか拾へか。理想の影法師に戀して居たのでは駄目だつた。永野さんは人間だ。戀は人間にする筈だつた。缺點のある人間に。そして缺點を見比べて其の中で成るべく完全に近いのを選ぶ、選んだ以上は容易に捨てぬ。それが眞の戀である筈だつた。朝に熱して夕にさめたり。長爪を見て十年の戀を捨てたり。そんな氣まぐれな戀を達子はしたくないが本來だつた。天はよい事を見せて下すつたのだ。しかしそれはあまりに悲しい現象だつた。醒めるなら醒めよ。燃えるなら燃えよ。それを達子自身にどうする事が出來よう。たゞこれからは參考資料を漁つて集めて提供しよう。菊石を暦に見誤らない樣に眉毛に唾をして。そうだ。天の暗示も多分それだ。其の上でどうともなれ。不隨意筋見たように我自由にならぬ靈の領域。其代り隨意筋の支配下は人間が自由にするぞ。教育と修養とは人間の自ら開拓する鍬や鎌だ。ねばり强さだ。五官が內臟を守つて害物を浸入させない樣に、人間の頴智も情を見張つて人格を守らなければならぬ。

クロツケーは負けたが、負けるが當然だと却つて達子は嬉しかつた。

六十三

達子の苦悶が復雜になつて何が何やら判らなくなり顏にやつれさへ見え出した頃、お千代さんは顏の色つやがよくなつて、髮の毛も黑くなまめかしい嬌態が出來て來た。反射鏡の樣な加藤さんが逃さずに云ふ。

加藤「高野さんの前でさう云うては惡いか知らんが何ぢやなあ、校門を潛る女のまるでの中で太田さんが一番綺麗ぢやと俺は思ふなあ。ほんとうぢやで」

河本「君もさう思ふんか、僕も此間からそんなに思ようた。結婚前は誰でも綺麗になるかするとと河本さんが相槌をうつ。

らなハ、い、、」

聲だけ笑つて筋肉のあまり笑はない人だ。

千代「何となりと被仰いッ、、、」

鼻の上に皺をよせて笑へばそれがまた可愛らしい。

加藤「太田さん例の話をどうするんなら、氣位ばつかり高うせずに早うきめるがにいせ。もうおきめい、おきめい、師範學校出が嫌ひなんか？」

千代「ホ、、、氣位なんか高くはありませんわ私」

耳まで赤くして俯くと美しい衿足が見ゑる。

教案を戸棚に突込んで參考書を出してあつちやこつちを開いては閉ぢ、きまり惡げにそわそわしてゐる。

加藤「高野さんは此頃煩悶しとるのう」

加藤さんの第二の征矢が達子に向つた。

達「エ？私が？煩悶を？」

達子は急所を突かれてどまぐれた。目を白黒した。

加藤「少々參つとるんぢやのうや」

イガ〳〵の頤を少し前に突き出す樣にして焜爐口をして笑つてる。

達「參つとるつて、どんな事ですの？」

達子は目たゝきを二つ三つして加藤さんの摘まみよせた樣な目を見た。

加藤「ハ、、、そんなに本氣にならんでもねい、冗談ぢやーからハ、、、」

河本さんが下をむいてクスリと笑つた。

達子の心には大浪が起らずには居なかつた。「參る」とは戀をして居るといふ意味ぢやなからうか？「忍ぶれど色に出にけり」だらう？まだ本當の戀ぢやないと自分では思つて居るのだけれど早や人が感づく、隱れたるより顯はるゝはなしだ。加藤さんならこそ思つた通りを直ぐ云つて呉れるのだ。あの人が感づく位なら他の人も皆感づいて居るだらう、自分一人で心に秘めて居る事なのに、どうして人にそれが判るだらう？何か不公平な事をでもしてゐるだらうか？それともお父さんのお説の樣に神靈も物體もすべて電氣で、相打ち相摩擦すると發電する。即ち情緒が動き出す、すると電波が四方に傳はる樣に、人間は勿論犬

にでも猫にでも傳はつて掩ひも隱しも出來ないものなのだらうか？でないとすると達子の言動や顏色に缺點があるのだ。不公平があるのだ。大いに反省せなければならない。

達子は事務室を出て、生徒の歸つて靜かになつた擔任學級の教室にはいつた。杉籬の向ふに色づいた漆の葉が見ゐる。其の向ふは城山だ。山の中腹から頂きにかけて尾花が多い。傾きかけた秋の日に白く光る。大空は青く澄みきつて居る。

達子は窓から眺めながら考へた。

そうだ確かに不公平だ。此の教室で達子が教へて、此の次には永野先生が教へに被入るといふ時には教卓の上も立派に拭ふ、抽斗の中もキチンと片付ける、塗板も念を入れて拭く白墨も新らしいのを出して紙を卷いて指に粉の付かぬ樣にしておく。事務室の机の上の整頓だつて女教員がみんなのを同じ樣に片付けて拭いてあげるのだが其の時の眞心が違ふ。永野さんの机の上は自然と念が入る、硯箱の中煙草盆の隅まで塵一つ殘すまいとするではないか。それはお清書をなほして貰ふ禮返しに何か役に立ちたいと思ふ心があるからでもあるが、こんな端々がきつと人には目立つのだ。まだ〳〵ある。これは不公平ぢやないけれど本末顚倒かも知れない。それは此の間男教員同志の雜談を横から聞いて居たら、永野先生が「僕は此の頃痔が惡くて困る」といつて居られた。達子はそれを聞いて以後祈らぬ日はない。

「私の痔が惡くなつてもよろしいから、どうか永野先生の苦痛を無い樣にしてあげて下さい、有爲の青年です苦しめて下さいますな」

人に知られたくないから達子は便所の中で合掌し臥床の中で合掌する。人は知らない事だが、よい行だらうか惡い行爲だらうか。

「身體髮膚之れを父母に受けたり敢て毀傷せざるは孝の始なり」の文句も酸い程知つて居る。「父母の在す間は友に許すに死を以てせず」といふ事も知らぬ事はない。死を許すんぢやないけれど達子の祈は五十歩百歩だ。して見るとやつぱり達子か惡いのかな。あの秋空の樣な澄みきつた心になれないとは情けない事だ。こんなに思つて居る所へお千代さんが後を追つて來た。

千代「達子さん相談があるのよ。私ほんとに困つとるのどうしたらよいでせうなあ」

と云ひ〳〵達子の側に並んで窓にのぞいた。

達「何ですの？そんなに困る事つて、例の事ですか」

千代「とう〳〵本人が手紙をよこしたんですよ。『どんな人と結婚する事を希望するか』といつて。どうしたらよいの？返事をやるの？どう書いたらよいの？教へて頂戴なホ、、、」

達「お書きなさいよ。僞はらずに。よい事だわ。豫め双方の希望を知つて置くといふ事は」

千代「でも私何も希望がありませんものホ、、、」

お千代さんは理屈つぽくなくて淡ましい事だと達子は思つた。

達「そんなら『第一人格の高い人』それが抽象的すぎれば『克己して本能や衝動のままにならぬ人』『第二自分を玩具としてでなく正しく愛して呉れて、長所を認め、短所は寛大に氣長に敎へ導いて呉れる人』と書いたらどうです。私はそんな人に巡り逢ひたいと思ひますわ」

千代「そんならさう書かう、さう書かう」

お千代さんはニコ〳〵してゐる。無邪氣な人だ。

六十四

お千代さんの婚約が成り立つと、善は急げで衣裳なんかをゴタ〳〵作らずに、新郎新婦となるべき兩人の意見が一致して質素を旨とし西町さんはフロック、お千代さんは木綿の紋付に袴、頭は勿論束髪で擧式した。太田さんの宅に於て。

披露宴だけは料理亭でするからとの事で同僚は皆招待を受けた。

西町さんとお千代さんとが主人役を勤めて席を並べて座つてゐると實によい匹耦だ。

誰が架けし柳の岸の丸木橋

と校長が被仰ると西町さんが莞爾して

西「もと〳〵薄い親類の端になりますので、世話をして呉れました者も親族の者でございます」

と流石に極り悪さうに少し赤らみなさる。

校長の俳句は連發する。とう〳〵隱し藝の謠曲が出る。

「西町君」「西町の奥さん」と祝杯が四面から集まる。

永野さんも人並に「これを奥さんに」と杯を女中に渡して居られる。

濃い眉が上下して口がきつと結ばれる。五六秒の沈默がある。

永「西町の奥さん御目出たう存じます。衷心から御祝詞を申し上げます」

パッチリと見開いた眼は他の教員達の樣にトロンとはして居ない。醉は未だ廻らぬと見ゐて、意志の力が内に向つて働いて居る事が注意して觀察して居る者には伺はれる。

千代「有り難う存じます」

とお千代さんはニコ〳〵して他の人のと同じやうに飲む眞似だけして返杯する。

加藤さんは猿の樣な顏をして「好夫婦だ實に好夫婦だ」と自分の事の樣に喜びまはつてハシャイでゐる。

加藤「西町君はお父さんが村長だから君も教員をやめたら村長ぢや。太田さんハ、、、、太田さんぢやいけなんだ奥さんも村長夫人になる。家得米はあるし結構なもんぢや。西町

君もよい奥さんを貰うたもんぢや。これが目出たうなうて何が目出たかりや、のう。飲めし、ハ、、、醉うた、よた、ようた、五勺の酒にコラ〳〵」

飲めハ、ハ、、俺も行く〳〵は村長になるのが理想ぢや。國に歸りや許嫁の女ば待つてるとう〳〵立ち上つて踊り出してしまつた。

青忠さんが鼻に籠つた樣な聲をして、

青「ヒ、、、加藤君大分廻つたのう、僕の顏もあんなに赤いか?」

と自分の兩の頰を撫でる。

河本「君の顏色はそれでよい加減ぢや、加藤の平生の色位にまだならんぢやらうハ、、、」

青山「僕はこんなに醉うた事はない。いつやらの氣狂の樣に歸りがけに橋から落ちて死なにやよいがと思ふ樣ぢやヒッヒッヒ、、、」

達「氣狂といや、あの學校によく來て居た魚屋のあれですか?あれが死んだのですか?」

達子は思はず膝を乘り出して目を丸くした。

姫象「まだ高野先生は御存じなかつたのでございますかな。ほんとに可愛想でございまし

た。丁度夏休の漢學の講習のすんだ頃でございましたらう、あの男が案外に澤山のお金が儲かつたものでつひまたお酒を過しましてな。病氣が起きたものでございませう、始めはよい機嫌で橋へ涼みに參つたのでございましたが、わざと飛んだのか過つて落ちたのか、眞逆樣にざぶんと落ち込んでとう〳〵死んでしまひまして死骸が流れて」

加藤「もうそんな話は今晩はよせ〳〵」

姫兼さんがしみ〴〵と哀れつぽい聲で話して居る途中を加藤さんが切つてしまつた。姫兼さんは目の緣をぽーつと赤くしてうつむいてゐる。

達子は默つて考へた。

道理で此の頃一向達子の家に來ないと思つた。それぢや桃を二つ持て來て呉れたのが來しまひだつたのだ可愛想に。達子が恐れて逃げ廻るので悲觀して死ぬるといふ事もあるまいし、失禮な振舞をしたといふ良心の苛責からでもあるまいし、酔つぶれて居たから過つて落ちたといふ方が勝ちではあらうが、それでも常人とは心理作用が違ふのだからどうだか判らない。一種の感情が長く續かず、次から次と出て來る觀念や直感につれて喜怒哀樂が不統一に出沒する。怒れば怒りが常人より烈しく、悲しめば悲しみが常人より深いといふ樣に離れ離れではあつても、一つ〳〵の情が深刻なのではあるまいか。それで今ほく〳〵云つて涼みに來て欄干に腰をかける。何か思ひ出すとすぐ悲しくなつて死にたくなる。理性が邪魔をしないのだから容易に實行する、こんな工合で自殺したのぢやなかつたらうか。若しさうだとすると其の死因に達子に關する觀念が毫も與つて居なかつたと斷定する事がどうして出來よう。或は主因かも知れぬ。可愛想に。それにつけても、永野さんが萬一お千代さんに戀をして居なすつたとすると、今夜の心持は氣狂の死んだ刹那に相當する。いやそれ以上に苦しいに違ない。死に得る者は幸福なのだ。死なずに生きて居らねばならぬ者の方がいくら苦しいか判らない。「淺き瀨にこそあだ波はたて」といふが、永野さんのあの青黑い目の穴からは心の淵は測り知られない。どんな世界が腹の底にあるのだらう?。さう思つて目を上げて永野さんを見ると、相變らずあまりハシヤギもせず沈みもせず坊主頭を撫でまわしてニコ〳〵して居られる。

お千代さんは結婚しても前の通りに學校に勤めた。永野さんは毎日昔の通りの態度でお千代さんと顔を合せて居られる。「やつぱりお千代さんに戀して被居たのではなかつたのだな、私の邪推だつたと見ねる」と達子は思つた。お千代さんと永野先生とは、達子と永野先生とが話すよりも、もつと氣輕に自然に話が出來る。それはお千代さんの結婚以前も以後も變る事はなかつた。

千代「永野先生、此の頃は朝の御散歩はおやめになつたのですか？一寸もお見受けしませんが」

ニコ〳〵しながらお千代さんがいふ。

永「イエ、此の頃は方面違の方に行つて居ますが、やはり散歩はして居ます、私の日課ですから」

千代「此の頃はどちらの方面ですの？」

永野さんは少し云ひ淀んで頭をなでつゝ、

永「高野さんのお邸の前を通つて、ずつと川上に溯ります」

お千代さんよりも達子の方がびつくりして先に聲を出した。

達「まあ先生、私のうちの前をお通りになるのですか？私今日までちつとも存じませんでしたわ」

永「ハ、、、朝早いものですからいつも御門が締まつて居ますよ。歸りには時にあいて居ますがハ、、、」

千代「高野さんのおうちは塀が高いから、私の樣にサンバラ髪を見つけられる氣遣がなくてよろしいわホ、、、」

達子は心窃かに「永野先生はもしやお千代さんに失戀なすつて、自然に達子の方に心が向いて來たのぢやないだらうか」と考へて嬉しかつた。そして其の次の日から早く起きて門前を通る足音に耳を傾け、口笛が聞ねはすまいかと氣を澄まし時々小窓から外をのぞいて見た。しかし自分の擧動が自分ながらも可笑しいと思はれる位だから、家族の人にも怪ま

れるに違ないと氣を配つて遠慮したせいでか、中々毎朝永野さんを見付ける事は困難だつた。いづれ出勤すれば會ふまいと思つても會はずには居れぬ人であるのに、朝永野さんを見逃す事は淋しく悲しかつた。

其のくせ學校で會つた時には用事以外には物も滅多に言はず、お千代さんが以前よく「今朝はお姿を見た」だの「見なかつた」だのとさつくり話して居た樣には達子は話す事が出來なかつた。加藤さんに「參つてる」といはれて以後は一層永野さんの前に出ると固くなつてしまつて、物を言はうとすれば舌さへ硬ばるのだつた。

永野さんも達子と同じ心持でか、或は何でもないけれど、達子が固苦しくする故に禮に報ゆるに禮を以てせられるのか、どちらかは知らぬがとにかく達子に對する態度は溫良恭謙讓で、中以下の家庭で育つた樣にはなく氣品もあり君子らしく、しかも騎士の樣に勇ましくて義俠心がある樣にも思はれた。

それでも缺點が全く目に映せない事もなかつた。

達子が永野さんの缺點を見付け出した第二回目は、T中學の運動會を見に行つた歸るさであつた。

夕もやで堤の柳の煙る頃渡し場にさしかゝつた。男女生徒を數組に別けて舟に乘せる。向ふの岸に早く上つたものからずん〳〵歸るのでこゝから隊伍はくづれた。まだこれから二里あるが、丈夫な男生徒はわざと駈足なんかでワッショ〳〵といつたりして、弱い女生徒や小さい子等を拔いて先へ先へといてつしまふ。達子の村から人力車夫が澤山出て來て、渡し上りに網を張つて運動會歸りのお客を待ち受けて居る。そして誰彼なしに「歸り俥でござんすけいお廉う致します、乘つて遣はさい」と聲をかける。さつきから永野先生につき廻つて居るらしい。ひやかすつもりなのか「二里を十五錢で往ぬりや乘つてやる」と永野先生が云つて居られる。其時達子は其の側を一禮して通り越した。

達「日がくれるといけないから元氣を出して歩くんですよ」

達子は生徒を勵ましたり慰めたりしつゝ、自分も疲れた足を引きずりつゝ運んで居ると、チリチリンと後から人力車が來た。ニコ〳〵顏の永野さんを乘せてスーッと過ぎて行く。

女生徒達は「アリャーリャー、先生等は俥に乘つてゐい事、うち等も乘りたいなあ」

と口々に大きな聲をする。其の間にはもう一二丁も先へ三丁も五丁も、とう〳〵山の麓を廻つてしまつた。

達子の心を不愉快さが過ぎつた。「永野さんは此の頃お體のどこが惡いとも被仰つて居なかつた樣だのに何故俥に召したらう？、いくら俥賃が廉いといつて健脚な者が乘らずもがなだ、浪費とは其の事だ。殊に生徒を引率して歸る責任が今日はあるのに」と思つた。

勤儉力行して學資を蓄へようとして居る達子の眼には、永野さんの此の行動は殆ど不思議な程馬鹿げた締りのないものに見ねたのだ。「ああ財産だつて學藝だつて德行だつて、零細なものを根氣强く積み重ねなければならぬ事は皆同一だ。永野先生は一生涯今のまゝで終る方ではあるまいか？車夫を喜ばせたのは一寸よい樣でも、生徒に羨望の情を起させたのは罪だ」などと考へ考へ歸つて來た事だつた。

理性はかく缺點を見付け出すが、それにもかゝはらず感情の方は容易に冷ねて吳れず、高師入學の希望を捨てたわけではなくても、注意が散りがちで勉强が次第に出來なくなつて來た。時には「もう自分は學問をやめて自分の爲にと思つた學資を永野先生に貢いで、何處かの學校に入れてあげたい。そうしたら人格ももつと高くなられようし、社會上の位置もよくなつて家柄の差が償ひ得られはしないものだらうか？」と考へて見たりし出した。

六十六

達子は固苦しい學術上の書籍には注意が纏まらない樣になつて來た。何度同じ頁を繰返して讀んで見ても何が書いてあつたのやら、もぬけの殼の心には、わけの判る筈がない。棄鉢になつて新聞の小說を讀んだり、人から小說本を借りて來てまで讀み出した。そんな種類の書物なら周圍の音が耳に入らぬ程注意が集まる。自分でも墮落しつゝある自分の心が淺ましいとしみ〴〵思はれて正精進を思ひ立つが、其の後から後から煩惱が追ひかけて來るのをどうにも仕方がないのだ。

金色夜叉の寬一が可愛想でならなかつた、といつて宮さんも憎くはなかつた。自分で自分を知らなかつたので、つまり無智から起つた戀の破綻なのだから、いはゞ緣が無かつたのだ。でも一月十七日の熱海の場には泣かされずには居られない。宮さんには虛榮の魔がさ

したのだ。達子は一生涯にも虚榮の魔にはさゝれぬつもりだが、理性が戀の邪魔を絶にする。それで本能は本能で不自由を苦しむし理性は理性で自分が思ふまゝに他の心を征服する事が出來ぬのを憤慨する、二重の苦しみを一人でするのだ。中有に迷ふといふのか、自己分裂といふのか、何だか息苦しい氣がする。心の欲する所に從うて矩を踰ねないといふ程の意志の自由、それは老人臭くはあるけれど自分も早く得たい。古來難いとせられて居れば居る程意地でもそこまで一生に一度は行つて見たいと思はれる。

さう思つたら小說なんかやめたらよいのにやつぱり夜更しをしてまで讀まねばならなかつた。尤も手では經木眞田を組みつつではあるが。所が突然晴天の霹靂が頭上に落ちた。

大兄「達子。お前は何を讀みをるのぢや？」

柱に凭れてこちらを見て居る大兄さんの眼がもの凄い色に光つて居る。

大兄さんは病院でも中耳炎が直らなかつた。大阪京都と歩きまはつても鼓膜にあいた小さい穴はどうにもならず片耳になつて歸つて來られたのだ。清語の研究は出來上つても體が弱くては支那にも押し渡れず、思ふ事の半分は愚か十分の一も百分の一も實行は出來ない昔の友人はずん〳〵高等の學校を卒業する、弟の小兄さんまでが高等學校に入學する。じつとして居られない氣がする。いら〳〵した目には周圍のすべてが氣に食はなくなつて來る。不平や不滿で一杯になつた心は平生じつと抑へ込んで居ても何かの機會があると爆發したがる。それは人格の破綻だと知つては居ても、顏色か言葉か擧動かに出ずにはすまない。達子は兄さんの顏を見てギョッとした。でも今更仕樣がない「金色夜叉です」といふと大兄さんの唇はブル〳〵震へた。

大兄「そんなものを讀んで何になると思ふ？俺等は勉强したい最中の十八の歳から教員をさせられて、讀みたい本は山ほどあつても讀む時間はなし、一分間でもどんなに惜んで貴重がつて使うたか知れりやせんぞ。丁度今のお前と同じ年ぢやつた。小說なんか讀んで樂しむ時間がどこにあつたと思ふ。七年後の今になるまでさうぢや。お前の時間の使ひ方は全體榮耀なぞ」

達子は驚ろいて本を閉ぢて傍の方に置いたが、兄さんの眞劍さに打たれて一言も出なかつた。ほんとに此の頃の自分の行爲は惡いと自分でも知つては居たが、大兄さんの此の心持、

を汲んで見た事はなかつた。氣樂さうな暮しを見せつけて、大兄さんの心の痛みを一層深めようとは思ひもよらなかつた事だつた。

大兄「云ひ序ですからも少し云はせて下さい。子から親の事を申しちや何ですけいど、全體お父さんでもお母さんでも、姉さん達三人をお育てになつたのと、今達子をお育てになるのとよほど樣子が違ふ樣です。末子だからお可愛いがりなさるのは尤もですが、寛大すぎちや後の爲がよくないと思ひます。小説なんか讀むのを捨てといたら、ろくな人間になりやしませんよ。やつはり姉さん達の樣に、朝から晩まで家の爲や人の爲に働いて、自分の爲に使ふ時間がなうても辛抱しきれる樣に慣らして置かんと、嫁入なんかして急にそんな境遇になつた時に、よう辛抱しやしませんよ。達子つたら全く成つちや居らんぢやありませんか。女として人の前へ出せるかい、お前の樣な奴が。まだ〳〵小説なんか讀んで泣いたり笑うたりそんな事の出來る時代ぢやない。知らにやならん事がたんとあるし、熟練を積まにやならん事が山ほどある。足許に氣をつけい」

達子は大兄さんに叱られたのは始めてだつた。大兄さんの言葉には餘韻があつた。「兄弟六人機會均等であるべきだ。小兄さんと達子とだけが幸福で自分の慾望通り振舞つてよい筈はない」といふ餘韻が。

達子は自分の將來の爲に大兄さんが忠告して呉れるといふ事が、有難いといふよりも餘韻の方がリーンと血管に振動を傳へた。

ほんに自分は我儘だつた。兄さん一人ぢやない姉さん達だつてさう思ひなさるだらう。女學校へやつて貰つただけでも有難い恩借だつた。其の恩借から生じる幸福が切り別けられる性質の物なら切り別けて兄姉達へ分配して、六分の一だけ達子が貰へばそれでよい筈なのだ。それのに達子の貰つた月給は自分で溜めて親に養つて貰つて住ませて貰つて、それで小説を讀んだり戀をしたり勝手な眞似をして居たのだ。男が煙草を吸つたり酒を呑んだり女狂ひをしたりするのと同じ事だ。父や母からまだ巣立ちも得しないくせに、自分の心や五官を樂しませる爲に用ひてよい時間はない筈だつた。殊にお父さんは暗いうちから起きて行燈をつけて生徒に講義をしてやり、夜は十二時が來ねばやすまれない。お母さんは百名以上の塾生の爲に、下女一人を相手に煮焚きをして身を粉にして働かれたのだ。芝居

一つ見るでなし旨い物を食べるでなし、よい着物を着るでなし、長い年月を一つ主義で貫かれた餘澤を達子が今浴びて居るのだ。有難さに馴れたら罰が當る。小説はもう〳〵讀むまいと達子は決心した。

六十七

巣立ちの準備に緊張すべく小説を讀むのはやめたが、どうしても忘れられないのは戀だ。晝も夜も幻に夢に見ゐて見ゐて仕方がない。針を持つて居ても本を讀んで居ても。そしてそれを捨てよう忘れようとすればする程、執念深くつきまとつて達子の心を搔きみだすのだ。

こんな心で奮鬪を續けて居る間に兎も十八の年はとう〳〵暮れてしまつた。一月は來た。女高師の入學試驗のある月だ。達子は學資の方もまだ百圓につまない狀態だし、學問の方も何の準備も出來て居ない。それのに誰も某も願書を出して居ると聞くと羨ましさで一杯になる。そして自分の腑甲斐なさが今更に恥かしい氣がする。二月になると發表がある。人を呪ふのぢやないけれど友達が落第したと聞くと「まあよかつた」と一つの心が云ふ。も一つの心は「何といふ淺ましい事をいふぞ」と叱る。「今年こそは」と思つて居る間に一月と二月とは音もなく過ぎて行つた。「オヤ〳〵」と呆れて居ると梅の花が「もう私の仕事はすみました」といふ。櫻の莟が「一事貫行決哉々々」とニコ〳〵し出す。學校では「父兄母姉會をしようぢやないか」「それはよからう」と決議せられる。

各學級は思ひ〳〵に談話・朗讀・暗誦・實驗・席上揮毫・唱歌・作法・成績品陳列、と練習や準備に忙がしい。擔任教師はここを腕の見せ所と力を入れて血眼で奔走する。

達子も負けじと本氣で頭と體はぎり〳〵舞をして居るが、さて出來ない事は席上揮毫のお手本を書いてやる事だ。また永野先生の御厄介にならねば仕方がない。どうしようか何と云つて頼まうかと云はぬさきから胸をドギ〳〵させながら、やつと思ひきつて遠方から、

達「永野先生」といふと口が妙に引きつる樣な氣がする。

永「ハイ。何ですか？」

と永野さんはにつこりした顔を達子の方にむけて仕事の手をやめられる。

達「アノー申し兼ねますが、今度の父兄會の席上揮毫のお手本が二枚書いて戴けないでせうか？お忙がしいのに濟みませんが」

目を伏せながらやつとこれだけ云つたが、赤い顔になつた樣な氣がして、顔が慰したかつた。手が知らぬ間に頰を撫でて居た。

永「よろしうございます、どれ位の大きさがよろしい？半折位ですか？」

視線を向けられると追及せられる樣な氣がして益々オド〳〵し出す。

達「ど、どれ位でもよろしい。先生のよいとお思ひ下さる位の大きさで」

達子は立つて居る事が出來ずに椅子に腰を下して戸棚の蔭に顏をかくしてしまつた。

永「字數は少ない方がよいでせう、そして字の大きい方が」

達「エ、」

達子の聲は自分でも聞こゑぬ位の小さい聲だつた。

永「よろしうございます、又文句を考へておきます」

達子は交渉がすむとホッとして放たれた小鳥の樣に自由さを感じるのだ。そのくせ永野さんの聲が耳に殘つたり、氣輕に引受けて貰へた事が嬉しかつたり、印象は交渉のある都度濃くなつて行くばかりだつた。

翌日は二階の講堂で他の學級の席上揮毫の手本が、やはり永野先生の手によつて書かれて居るので、やがては達子の分も書いて貰へるのだらうと見物旁手傳に行つた。

默つて永野先生の側で墨を磨つたり紙を展べたりしつつ筆太く書かれて行く文字を見て居ると、小理屈もこねる氣がせず、不平も不滿もない。何といふ穩かなおとなしい晴々とした自分だらう？こんな性質も自分に有つたのかと不思議なほど女らしい自分を見出すのだつた。やがて達子の級の爲に書かれた文字、ああ其の文字は「和而不流」といふのが其の一つだつた。達子は其の四字が出來上らぬ先に「ハッあの句だな」と思つた。中庸の南北の强を論じた處にある文句だ。和而不レ流強哉矯。中立而不レ倚強哉矯。國有レ道不レ變レ塞ヲ焉強哉矯。國無レ道至レ死不レ變強哉矯。といふ達子の好きな文句の一部だ。永野先生もあの句がお好きなのだらうか？「二人が共通な道德上の意識界を持つのだ嬉しいな」と達子の心はゾク〳〵した「だが唯お好きなからお書きになつたに止まるのだらうか、外に寓意

があるのぢやなからうか？『高野さん二人の間はいつまでも和而不レ流で通しませうね。若し道が有つて一緒になれても今の樣な嚴重な交際法を忘れず、道がなくて一緒になれずに終つても死ぬまで心の操は變へますまい』といふのだらうか？『高野さん貴女は和而不レ流ですね感心です。しかし私はそんなおつき合は出來ませんよ』といふのだらうか？」永野さんの顏をソッと伺つて見てもどちらとも判らない。次の紙をのべて筆に墨を含ませて居られる。

登の字が出來た。高の字が出來た。自卑とつゞいた。「登レ高自レ卑」これも中庸の文句で達子の頭に印象の殘つて居る一つだ。君子の修養法即ち道を行ふ順序を云つたものだつたと思ふが、やはり寓意がありさうに思はれる。高きだの卑きだのと達子は何とも思つて居ない家柄の差を、永野先生御自身には氣にかけて自分で卑下して居られるのでは無からうか？『やがては自分で位置を高めて行きますぞ。今こそ高卑の差があつても』といふのだらうか？『そんなに家柄を自慢げになさるな。卑い所から登らにや高い所へは行けませんぞ』といふのだらうか？　此の間永野さんの聞いて居られる所で達子の家の系圖の話なんかしたのは惡かつた。自慢のつもりでも聞けよがしのつもりでもなかつたが、達子は何だか氣の毒な樣な悲しい樣な氣がする。

永野さんは筆を措いて坊主頭をグルリと撫でて「是位の事です」と莞爾せられた。何の變つた表情も味もない。

すべては達子の自分勝手な推量に過ぎないのだ。何んで此の文字が達子の戀に關係があらう。達子は禮をのべて二階から下りて來た。

六十八

達子が事務室にはいると「何やら緊張した空氣だな」と思はれた。

加藤「視學も視學ぢやーなあ、今頃動かすたあ。學年末や父兄會を目の前に控へとるのにひどい事をするもんぢや」

河本「校長も全く御存じなかつたんですか？」

校長「僕も一寸も知らなんだ。今頃こんな事をして呉れては困るが、視學がそれを知らん

事はないぢやらうに」

こんな話がかはされて居るので達子は、

達「辭令が來たんですか？」

と誰に問ふともなしに聞いた。達子と一緒に二階から下りて來たお千代さんも目を丸くして、

千代「どなたに來たのです？」

と加藤さんの方を向いて尋ねた。

加藤「西町さん　あんた轉勤ぢやで」

千代「ほんとですか？」

お千代さんが益々目を見張るとお裁縫の先生がソッとお千代さんの袖を引いた。そして

裁「うそですよ、姫兼先生ですよ」と小さい聲で敎へて呉れた。

達子がお裁縫の先生の方に顏をむけて、

達「まあそうですか。それで姫兼先生御自身には御存じだつのですか？不意擊ですか？」

と眞顏できくと、お裁縫の先生も眞顏で鼻の上を手で摺りながら、

裁「全く不意ぢやつたさうです。へイ。それで大變つらがつて居られますのです。今手工品の整理をして置くというて準備室の方へ行つて居られますが、お氣の毒です。へイ」

沈んだ調子でいはれるので達子も氣の毒になつた。慰めるべく準備室の中に行つて見た。

達「先生御轉勤ださうでございますなあ」

といひつゝ這入つて行つた。姫兼さんは手工品を選り別けて居たのをやめて、しやがんだままで云ひ出した。

姫「ほんに敎員といふものはなさけないものだと思ひます。紙一枚で朝に晩に動かされねばなりませぬ。當人が何と思はうがそんな事はかまつて貰へずに、何時でもヒョイ〳〵動かされるのはたまつたものではございませぬ。私も折角此の學校に來させて貰うて喜んで居りましたのに、一年もたゝぬうちに轉勤させられようとは思ひもかけぬ事でございました。宅に歸りまして年寄に聞かせましたら悲しむ事と思ひます。又山の上に押し込められて單級なんか持たせられねばなりませぬ。それに視學は向ふの學校に困つて居るから、一

日も早う行つて呉れと申されるのでございます。私もこんなに仕事は澤山ございますし、どうしようかとうろたへて居る所でございます」

と細い目を一層細くして泣き出しさうな顔をして居るのが如何にも哀つぽい。

達子は「例の性質からだな」とは思つても、誰にしても不意に轉勤を命ぜられては困るのだから氣の毒だと思つて、

達「先生私で出來る事がございますれば何でも手傳ひますよ。其の手工品をこれからどうかなさるのですか？」

と云はずには居られなかつた。

姫「有り難う存じます。御親切に。これからまだ名前を書きかへて付けねばなりませぬ。生徒が鉛筆で變な紙きれに書いて居ますから、此のままでは陳列が出來ませんのでございます」

達「それ位の事なら私でも致しますよ。何でもございません、捨てておき置きなさいませ。先生御自身のお荷物のお片付やら何やらお忙しいでせう、其の方をなさいませ。まだ外にも似合つた仕事があれば御遠慮なく被仰つて下さいませよ」

達子も蹲まつて竹細工や針金細工を見渡したり、皺くちや紙をのばして生徒の名を見たりしつつさう云つた。

姫「いゑ、もうそれだけして戴きますれば結構でございます。それぢや濟みませんがどうぞお願ひ致します。誰がそんなに親切に云うて呉れる人がありませうか、有り難う存じます」

細い目がチラリと達子を見た。

兼てから「女の様な好かない人だ」と思つて居るがそんな目つきが格別達子は嫌だつた。

達「それぢや陳列する分だけをまとめて其處にお置き下さいませ、明日放課後に致しますから」

といつておいて達子は逃げる様に出て來た。自分の席に歸つて仕事の殘を片付けたり明日の準備をしたり、後の方で男教員が「お先に失禮します」と帽子掛から帽子をとつて被つて出て行くのを聞きつつ、側目もふらず仕事をして居ると準備室から姫兼さんが出て來た。

加藤さんが仕事をしまつて歸らうかと今立ち上つた所だ。

加藤「姫兼君忙しいだらう、手傳はうか？」

と聲をかけた。

姫「有難う存じます。只今も高野先生がそんなに被仰つて下さいましたから、陳列品に名をつけるのをお願ひ致しましたのでございますが、まあ皆樣によろしくお願ひ致します」

加「そんな事はよいさ、又やるから」

と雜作なく云つて湯沸場へ一服つけるべく加藤さんは這入つて行つた。

姫兼さんは達子の側に來た。机に手をかけて、

姫「どうも先刻は御親切に有難う存じました。どうぞすみませんが宜敷お願ひ致します」

と叮嚀にお辭儀をした。そして手を引いてあちらに行く途端に、手の下から小さい紙片がヒラ〳〵と舞ひ落ちた。

「アラ何か落ちた」と達子は何氣なしに足許の紙片を拾ひ上げて見た。文字が書いてある

「これからは木村花子と變名して手紙を差上げますから御返事を下さいませ」

達子はカッとする程腹が立うた。姫兼の後姿を穴もあけとにらみ付けた。

しかし「まだ居殘りの敎員が二三人も居るのだ。つとめて平靜に常の態度に復せよ」とすぐに一方の心が命じたので、紙片を丸めておいて仕事のつゞきをして片付けた。

六十九

達子は家に歸つても姫兼さんの事が氣になつて、いま〳〵しくて仕方がなかつた。「ほんとに仕方のない男も居るものだ。人が一寸親切な言葉をかければ直につけ上つて、人を見そこなつて失禮な事をする。全體『人格』といふ言葉の意味さへ考へた事のない人間に違ひない。行く先で女に艶書を送つて居るのぢや無からうか？　そこへ持つて行けば永野先生はスッポンにお月樣だ。達子がいくら心の奥を知りたいと思つても、大海原に向つて居る樣で水底の動搖が少しも判らない。人をも辱かしめず自らも恥かしめられず儼たるものだ。姫兼なんかは山の井といつてやるのも惜しい、棒振虫が縱にむくとお尻が問へる位の溜り水だ。明日は何とかいつて鼻をつけて置かんと、よい氣になつて變名の艶書をおこす

だらう。何と云つてやらうか。それても今去つて行くのだからひどい事を云つて恥をかゝす必要もない。不同意である事を仄めかせばそれでよいのだが、よい機會があつて呉れればよいが」とこんな事を考へて居ると、相變らず勉強も出來ず一晩たつてしまつた。

翌日は來た。

今日はいよ〳〵何とか云つて止めを刺して置かなけりやならない。何と云つたらよからうか、よい機會が見つかつて圓曲に云ひたいものだと思ひつゝ登校した。

校長に朝の挨拶をして、校長の側の小机に置いてある出頭簿に捺印すべく、ポロくその印を袋の中から辛抱に取り出して居ると、姫兼さんがいつもの樣にのつぺりとした顏をして這入つて來た。そして達子のすぐ傍に肩が摺れ合ふ程に立ち止つた。

姫「校長、お早うございます」

校長「ヤ。お早う。片付が出來たかな？　それて何時お行きる？」

自稱「三十九ぢやもの花ぢやもの」の校長だが、達子の目にはおぢいさんに見ゆる。甘へたい樣な懷かしみのある人だ。

姫「視學がなるべく早く赴任せいと申されますから今日午後にでも立たうかと存じます。こちらにも仕事が殘つて居ますが、高野先生や加藤先生がしてやると云うて下さいますから、昨日お願ひ致して置きました樣な事で」

達子は「今だ」と思つた。印を懷にしまふと、

達「姫兼先生お早うございます。あの、昨日あんなに申しましたが、どなたか他の方にお願ひして下さいませんか。私、都合で先生のお仕事を致し兼ねますから」

といふなり「右向け前へ」をして、さつさと自分の席に歸つて來た。

校長の微笑した視線が達子を見送つた樣な感じがした。自分でも「少し頓狂な聲音を出し過ぎた、そして終の方の言葉がきつ過ぎたな」と思つた。

同僚の視線が一時に達子に集まつた樣な氣がしたが、誰の顏も見ないで机にかがみ付いて其の日の仕事を始めた。

校長「少々の仕事は誰でもするから、それぢや今朝一寸生徒に挨拶をさせますからそのおつもりで居て下さい」

こんな事で姫兼さんは歸つて行つてしまつた。變名の手紙も來ず、缺員のまま四月まで
漕ぎつけたのだつた。
四月になるとまた將棋の駒の置きかへがあるのだ。自分から運動して香の駒が進む樣に突
進するのもあれば、うつかりぼんとして居る間に「一寸失敬します」と摘み出される歩の
駒もある。
H さんが「品行方正ならず、女教員と云々、車夫の妻と云々」のかどに因つて他郡に左遷
せられた後釜に、河本さんが校長となつて堂々四角い顔を持ち込む事になつた。
青忠さんは惡い事も何もせぬに、これまた他郡に摘み出されねばならなかつた。
不意を喰つた青山先生男泣きに泣き出してしまつて、達子の家に挨拶に來た時などは庭に
這入つたなり物も言へなくなつてしまつた。お母さんと達子とが色々と云つて慰さめて、
「まあ上つて遊んでお歸りなさい」
と二人で引張り上げると、又柱にもたれて、つくねんとしてしまふのだ。達子が、
達「お晝御飯をたべたの？」
ときくと、やつと口を開いて、
青「御飯はほしうないからとばしました」
といふものだから、お母さんがお膳をもて來て、
母「青山さん、男がそんな事でどうするのです？うちで御飯をお上りなさい。御飯たべな
んだら往なせませんま」
と被仰つて、無理やり二人で强ひて御飯をたべさせたり、お菓子をたべさせたりして歸ら
せたのだつた。
學校の送別會の時にも青山さんは達子の前に座り込んで、お酒のせいでか少しよい顔色で
青「貴女の學力のあるのにはほんとに敬服しました。最後のお願ひですから私の注いだ酒
をのんで下さい」
といつて動かない。「お酒はいやですから」と達子がいくら云つても口を一文字に嚙みし
めて頭を左右に振つて、動かうとしない。まるで駄々つ子の通りだ。仕方がないから、
達「それぢや戴きます」

といふと頬の筋肉を盛上げた樣にしてニコ〳〵笑つて、湯飲茶碗に一杯溢れる程注いでしまつた。「葡萄酒だからまあよい」と達子も度胸を据ゑて一滴も餘さず飲み干してしまつて、

達「有り難う存じました」

といふと青忠さんは滿足げに涙をにじませて、

青「これで思ひ殘す事はありません」

とまるで死別の挨拶の樣な事をいつて、おじぎをして自分の席に返つて行つた。

達子は心で「青山さんは達子にもしや戀をして居るのではあるまいか？可愛想に」と思つた。戀を安つぽく取り扱ふ姫兼は憎らしくてたまらないが、得云はずにすます青山さんはいくら青い顔のヒョロ〳〵でも可愛いと思はずには居られなかつた。

七十

新學年になつて新らしく赴任した人は、師範の新卒業の秀才二人。春の高い目から鼻か鼻から目か知らないが突き拔けたらしい顔の方が小貫さん。春の低いコロリとしたむつつりが穗積さん。穗積さんの方は小兄さんの友人だつたので達子は昔からよく知つて居る。も一人來た。それは教育會や講習やで見た事のある顔の酒倉さん。將棋の駒を倒にした樣な顔の輪廓と姫兼さんに似た細い目との所有者だ。

達子は教員になつてから一年と三ヶ月になる。大分教員生活にも馴れて來た。男との交際にも馴れて來た。新任の人が挨拶をしそこねて照れて居れば、こちらから積極的に挨拶でもするし、手持不沙汰にして居れば話の一つもしかける位にはなつた。「大分大きくなつたな」と自分で自惚れる位だ。

穗積さんが達子に挨拶をしほぐれて居るからこちらから物を言つてあげよう、大方昔から知つて居るので却つてきまりが惡いのだらうと、機會をはかつて達子は挨拶した。

達「穗積先生。暫らくでございました。此の度は御卒業でお目出たう存じます。こちらに御苦勞になるのださうで、まあどうぞよろしくお願ひ申します」

と叮嚀に頭を下げたが、穗積先生一向返事をして呉れない。のみならず頭もかゞめない。

今度は達子の方が手持不沙汰になつて來た。大分大人らしくなつたつもりでも、こんな時に何と云つてよいか、起立して居る體をどう處置してよいか。默つて立ちん坊をして居る自分を持て餘してしまつた。全く困つてモヂモヂして居ると、穗積さんの頭がぎり〳〵向側に轉向し始めた。凡そ百三十五度まはつた頃

穗「ケッがはからあやハハン」、

といつて頭を突き出して口をほがりとあいた。達子は一層てれなければならなかつた。

達「どうしてまあ先生ホ、ヽヽ」

と笑ひにまぎらして引き下るのが懸命の頓智だつた。何故あの方のお尻がほかるのだらうと達子は考へさせられた。達子の言葉が惡かつたらうか、態度がいけなかつたらうか?と考へた末「そうだ。やはり達子が惡かつた。『穗積先生』といつたのがいけなかつた。新たに教員となると『先生』と呼ばれるのが耳について妙なのだつた。それを忘れて居た。教員仲間の常用語で、敢て敬意を表する爲に用ゐるといふ程の意味もなく、生徒の先生であるといふ事から、丁度子供のある奥さんが旦那さんをつかまへて『お父さん』といふのと同じ工合に用ゐるのだが、穗積さんは先生を眞の先生の意味にとつたのだらう。共通な意識界を持つて居ないと妙に喰ひ違つて來るものだな。それにしても達子はよつぽど教員臭くなつたようだとつくづく思つた。

穗積さんは一風變つた人だし、小貫さんは明々察々といつた風な人だが、學藝と色氣とは反比例するのか、此の秀才兩人は達子に對して妙な目つきやそぶりをしないので氣持よく交際する事が出來たが、酒倉といふ二次會名物の男には實に閉口してしまつた。惡い事には酒倉先生が高一男の擔任、達子が高一女の擔任で同じ學年を持つて居る所から自然日々の交渉が多い。書物だつて一冊を二人で使はなければならぬのがある。酒倉さんすなほに本を出して呉れゝばよいが必らず手から手にでなくては渡さない。そして其の都度書物の下で達子の指を握らずにはおかないのだ。達子はそれが身を切られる程つらいけれど、誰に訴へる事も出來ず、默つて苦い顔をして居るより外仕方がないのだ。

しかし心の中で孟子で讀んだ柳下惠の德を思ひ出さずには居られない「爾爲レ爾我爲レ我雖四袒二裼裸一程於我側一焉能讒レ我哉」だ。これだけの事を我慢がしきれなかつたら、どこの

學校へも奉職は出來ず、學校以外の男女雜居して仕事をする會社とか郵便局とかにはなはの事勤められないわけだ。女を箱入りにして置く時代を打破して、箱から出て來るには何等かの障礙はある筈だ。男つて案外ヤクザ者ばかりだ。女がしつかりして道德を維持してやらないと、箱から出た者から出た者からわやくちやにして、揉んで捨てゝ自分も爛れて朽ちて世の中を濁してしまふのだ。と憤慨もせられる。

達子は梅雨に咲く梔子の花が好きだ。ビショ〳〵降り暮す陰氣な四圍に相手にならずに、純白の六瓣をつや〳〵と展開して氣高い芳香を放つて居る。葉だつて敦厚を思はせる濃綠色だ。自分の事も語らず、人の事も語らず、一切を胸に秘めて耐へられない事を耐へて、道を選んで踏みはづさぬ樣に歩いて行けと暗示すべく其の名が口無しとは格別嬉しい。

達子は圖書室の一輪挿の中に梔子を投げ入れて、唯一人隙さへ有れば閉ぢ籠るのだつた。こんなにして一學期はたつて行つた。

七十一

其年の夏休には動物學の講習があつた。其の講師は嘗て達子を女學校の寄宿舍に訪ねて呉れて、舍監が面會させようと思つても、わざと會はずに用事の有無だけを聞いて歸つて行つたお父さんの門人だ。近頃高師を卒業して某中學に奉職して居るのだが、休暇で歸鄕して居るのを幸に講師として聘したのだつた。

達子は獨學して居る折柄なのでこんな講習のある事は飛び立つ程嬉しい事だつた。開會の日を待ち兼ねて出席した。講師は知らぬ人ではなし、會場は自分の學校だし、自宅からは近し、朝早くから晩おそくまで付ききつて居てもよかつたので、「さあ明日は蛙の解剖だ」といへば達子は自分のうちの廣い邸から蛙を供給し、「鼠だ」といへば鼠を捕へて持つて行き、講師にくつ付いて居て準備を手傳つたり雜用をつとめたりした。お蔭でよほど得る所があつて有難い講習だつた。

其の講習會の最後の日だつた。達子は八重子さんやお千代さんと一緒に講師を旅宿に訪問した。宿屋の裏門を潛ると細い長い道がある。其の道に並行して一棟と直角に一棟と二階建の座敷がある。利休下駄の音が聞こゑたのか眞見付けの二階の客がこちらを見た。それ

が講師のTさんだつた。視線が達子に落ちた時につこりと笑つた其の顔は!!! 嬉しさうな其の顔は!!! 達子の一生忘れられない顔だつた。振別髪の時からの忍ぶ思ひが不用意についた顔の筋肉に出たのではあるまいかと鈍感な達子でさへ直覺する程な顔だつた。講習がすんでもう逢へないと思つて居たのに案外たづねて來たからだらう。座敷に達子等が通つてから後のT講師は、もう心の用意が出來たと見ゐて端然とした溫厚な君子だつた。

「博物を研究するにはどんな書物を讀むがよいでせうか」だの「高師入學の準備はどんなにしたらよろしいか」だのといふ達子の問に親切に答へて呉れた。

達子は家に歸る道々も、歸つてからも思つた。「あの方が達子を女學校に尋ねて呉れた時は、達子がまだ十五やそこらで何の心もなかつたが、男子師範と女學校とは距離も遠いし道順でもないのに、わざ〳〵訪ねて下すつたのだ。それがただの一通りの親切だつたらうか?」振別髪の昔から愛して居て下すつたとすると達子の爲には有難い人だ。儒教の素養があるから人格は確かだし。高師を出て居るといふ結構な條件もある。婿がねとするなら永野先生とは數等上に位する。恐らく達子の生涯にこれ位の婿がねはまたとあるまいと思はれる。御兩親にした所で永野先生に娘をやる事は許されないのにきまつて居るが、Tさんなら事によつたら許されないものでもないのだ。家柄といふ方面から見ると兩家とも地方の名門とも云へず何でもない平の百姓や町人だが、一方が社會上の置位が高いだけ可能性がある譯だ。達子の理性はさう判斷をしたが、しかし感情や意志までがそちらに向ふにはあまり永野さんの牽引力が強かつた。——永野さん自身には知られない事ながら——それでTさんの事は其の後全く忘れるといふ程でもないが時に思ひ起す位に過ぎなかつた。達子には其の頃降る程縁談があつたものだ。それを達子は反古を揉んで捨てる樣に棄て去つて顧みなかつた。顧みない所か、うるさいと思つて時にはほんとに腹をも立てた。

母「人樣の御親切を無にする。そんなにお前の樣に木で鼻を括つた樣に云ふと罰が當りますぞね」とお母さんから注意せられて、口では「有難う」とか「御親切に」とかお禮を云つても、心から有難いとはどうしても思はれなかつた。達子が今迄交際して來たかなり大勢の男の人の中にだつて、そんならどの人を終生の所夫にしようといふ樣なのは滅多にない。永野さんをだつて「いざ」といふ場合が來たら、達子は一歩後に退いて考へるかも知

れないのだ。それをどうして見ず知らずの他人を、他人の意見や趣味で選んで呉れたつて「おいそれ」と承諾出來る筈がどこにあらう？　達子が倒しになつて崇拜し信頼する人でもあつて責任を以つて世話して呉れるか、若しくは兩親が非常な慈愛を以つて娘の心を忖度して、それを標準に自分でも交際して確かめて呉れるか、どちらかでなくては達子は思ひきつて境遇を變化させる氣にはなれない。つまり臆病なのだ。

三人の姉さん達はよくお嫁入をした事だ。特に大姉さんの二度目の嫁入。中姉さんの森からの離縁。これは達子には眞似が出來さうにもない。「一統を大にす」といふ儒教の理想から自己を捨てゝ、家の爲に犧牲になられたのだと思ふと神樣にして祀りたい樣な氣がするが、もしもそれを自覺してでなくて、親い威壓に抗し兼ねて已むを得ずの措置とすると涙ぐましい氣がする。達子は姉さん達に比べると何といふ我儘な事だらう。智識慾も滿足させたい。自分の所夫は理想的の方法で理想的の人物を得たい。そして其の理想的人物とは永野さんでもTさんでもなく、嘗て淡い戀をした病院の副醫長でも女學校のI先生でもないらしい。それ等の人の美點ばかりを抽象して作つた概念的の男性かも知れない。權化としての主觀的の永野さんに達子は今戀をして居る樣だ。つまり達子の自分で作つた幻に自分で戀して居るのだ。

それを朧氣ながら感づいて居るが、さて其の蟬殼を割つて現實の世界に出て來る事が自分の力では出來ないのだ。行きつまつた樣な苦しい氣が自分でもするし、「大慾は無慾に似たり」で非常に慾深の達子が、却つて人からは不結婚主義者の樣に見られて攻擊も受けねばならない。石女だといつて譏られねばならない。此の狀態をいつまでつゞけねばならないのだらうと達子は思つた。

七十二

九月から尋常小學校と合併する事になつたので教員の數が俄に增した。

シャグマの樣にちゞれた髮で、赤べいした樣に下瞼の弛緩した目で、豚の樣に肥ゐた體の女先生、それが肥田さん。

縱橫そろつて立派な體格で、だみ聲ながら江戸辯を使ふ活潑な輕井さんといふ女の先生。

どちらも達子よりは四つ五つ年上だ。

五分刈の頭の頂上がピリケン式で、犬齒が一本上の方から生に、首振り立てゝ物をいふと唇が其の犬齒に引つかゝる、それが一寸可愛らしく見える時もあるし、苦勞を重ねて意地が惡くなつた人の樣に思はせる時もある。それが伊知地さん。

準敎員養成所を出たばかりの赤い丸顏の可愛い坊ちやんが梅田さん。

そんな人達を加へた事務室は前よりも陽氣になつた。特に女敎員の數がふえたので、達子等の肩幅が廣くなつた樣に思はれた。

達子は圖書係を仰せ付かつて、尋常と高等との圖書を合併し、捺印をしかへレッテルを貼りかへ原簿を新らしくせなければならない事になつた。ボロ〳〵した本が何千冊もある上に、原簿にのつて居ても實物の見つからぬのがある。缺本かと思つて其のつもりで記帳するとヒョッコリ出て來る。貸與簿に貸出した事ばかり書いてあつて戻つた事を書いてないのもある。とりに行くと「又今度來て吳れ探して置くから」といふから出なほして行くと「どうも見つからぬ」といふ。中々容易な事に整理はつかない。他の敎員の歸つて行つた

後、一時間も二時間も達子は居殘つて仕事をせなければならなかつた。

秋の日は釣瓶落しのたとへの樣に、まだ暮れはすまいと思つて居るに早や入相がゴーン。

「オヤ〳〵もう仕事を早く仕舞はねば」とあわてゝ夜店の樣に並べた本を片付けかけるともう足許は暗くなつてゐる。

或日の事だつた。大急ぎて仕事をしまつて居るとコト〳〵下の方で人の氣はひがする樣だつた。「誰がまだ殘つて居るのだらう?」と思つて居ると酒倉さんが二階へ上つて來た。

「ア惡い者が來たな」と思つたがもう仕方がない。

酒「忙しさうななあヒッヒ、、、」

いいいによろりと圖書室の入口に立つのだ。半間の三分の二程しかない入口に。

酒「エッヴーッ」

二日醉だらう四角い額は青くて凄味さへ漂つて居る。

袋の口を締められた樣なものだ、一つしかない出入口に立たれては。一刻も早く出なければならない。でもあの人の傍を通るが嫌のだ。どうしてやらうか?あそこを退かす分別は

あるまいか？いや、わざと意地悪くあの柱にもたれたのだから中々退かないだらう。何かいたづらをするつもりだらう。よし。惡戯をするならして見よ。人格の光は神の威靈だ。冒瀆が出來ようか。

達子はこんなに考へながら手早く圖書室内を整理した。一息深く呼吸して靜かに、

達「一寸御免下さいませ」

と小腰をかゞめながら摺り抜けようとすると、いきなり達子の肩を掴んで二つ三つ搖ぐるのだ。でも達子が腰を伸ばして正面から視線を浴せた時はもう其の手は放れて、細い目尻に氣味惡い皺が刻まれて居たばかりだつた。

達子は圖書室外に並べてある書物を片隅に積み重ねて置いて、

達「お先に失禮致します」

と叮嚀にお辭儀をして梯子段を下りて行つた。酒倉は何時まで戸口に佇んで居たのか、達子が事務室の机の上を片付けて、荷物を持つて玄關を出るまでまだ二階から下りては來なかつた。

達子はいよ〳〵女がたゞ一人居る事の危險さが判つた。と同時にそれは貧乏人に金を見せびらかしたり、子供にお菓子を「これ〳〵」して見せると同じて罪な事だと知つたのだつた。こんな事があつたので達子は一つ思ひ當る事があつた。それは幾日も前の事だつた。何だつたか大急ぎの用事が出來て、輕井さんを先頭に達子がつゞいて二階へ駈け上つた事があつた。頭がやつと二階にのぞく所まで上つた時、輕井さんがハタと止つた。妙な顏をして一段後へ下つて達子を振り返つて、

輕「今ここを摺れ違ひに飛んで下りたのは誰〳〵？」

小さい聲でいふのだ。達子は用事の事ばかり考へて居て、誰が下りたといふ事さへ氣がつかなかつた。

輕「太田先生は授業して被居るでせう。肥田さん？でもなし、お裁縫の先生？だらう？」

とさくと、

達「どうしたのです？」

輕「妙な風をして居たわ。『オヤ』と思ふ間に女の方が飛んで下りつちまつたんですよ。私の間違ひだつたでせうか」

と頻りに首を傾けて居る。

上つて見ると酒倉さんが一人ひよろりと立つて居たのだつた。

其の時は達子は輕井さんの錯覺か幻覺かだらう位に思つたのだつたが、今になつて見ると眞實かも知れない。八九分方は眞實だ。いや全く間違あるまい、輕井さんの目が敏捷に働いたのだらうとさへ考へられ出した。

眞實だとすると教育者の風上に置かれない酒倉だと憤慨せずには居られない。

「君子は危きに近よらず」だ。もう〳〵遲くまで居殘つてあんな機會を作るまいと達子はしみ〴〵思つた。

七十三

達子は酒倉に下等な慾望を起す動機を與へた失策に鑑みて、以後はよほど時間や周圍の狀態を考へて圖書室の仕事にかゝる事にした。さうなくても元來が手鈍いのに、時間が見つかりにくゝなつたので、中々仕事は思ふ程進捗しない。

伊知地「もう大分片づきましたか？」

伊知地さんが首を振り振り上つて來た。それにつづいて加藤さんが長いコンパスで近づいて來た。

加藤「まだ印を捺しとるんか、何日かゝるんなら、よい加減に捺してお置きい、ちつたあゆがんでもねいが」とニコ〳〵して居る。

達「先生方の備品の整理は如何です？もうよつぽど出來ましたか」

伊知地さんと加藤さんとが備品係なのだ。達子もにつこりしながらさう云つた。

伊知地「備品は何處へ何があるか歩きまはつて索さにやならんのに閉口です。こゝに戸棚が四つですなあ。本箱が一つ二つ三つ……十二ですか。卒業生の寫眞ですかあれは」

伊知地さんはそんなに云ひながら這入つて來て、ずらりと並べて掛けてある寫眞の前に立つた。

伊「古くさいのもあるなあ、女の卒業生がたつた三人か。其の次はそれでも七人になつとる。オイ／＼加藤々々販路の廣い分が居らあや」

伊知地さんが首を一振り振ると、加藤さんものそりと其の側に歩いて行つた。

加藤「どこに。それか。すまして居るもんぢやのう。それで販路が廣いんぢやあからハ、、、、」

二人の話が如何にも面白さうなので達子も好奇心が起きて立つて側へいつた。そして二人の視線の焦點を見つけようとした。

達「販路の廣いつて誰の事ですの？」

伊「へッへ、、、まあ云ひますまい、のう加藤」

達子は二人の視線の落ち合つたと思はれる邊に八重子さんの小さい時の姿を見た。

達「判りました。此の人でせう」

伸び上つて寫眞に手をとどかして八重子さんを指した。

加藤「ハ、、、あんたも知つとるんか」

達「わたし何も知りませんけいど、先生達のお目が今此の人を見て居ましたものホ、、、先生方は人がお惡いんですなあ、女教員には皆いろんなしこ名をおつけになつてるんでせう。私の事だつて何とか被仰つて居るのに違ありませんわ。教へて下さい怒りやしませんからホ、、、」

達子は伊知地さんと加藤さんとを等分に見て笑ひながら云つた。伊知地さんの方が口の筋肉を動かし始めた。

伊「云ひませうか、へッへ、、、お怒りんさんなよ。あんたは販路の狹い分です。販路が狹いと云うて、顏が奇麗にないとか何か缺點があつて其の爲に販路が狹いんぢやありませんよ、誤解が無い樣にして下さい。ようざんすかへッへッへ、、、」

加藤「ハッハ、、、」

加藤さんは視線を寫眞の方にやつたまま高く笑つた。伊知地さんは犬齒に上脣を引つかけたり下したりしながら、これも視線をそらしてニヤ／＼笑つて居る。

達「有り難う存じました、よく教へて下さいました。參考になりますわホ、、、」

伊「お怒りさんなよう」

二人は圖書室の隣の講堂の備品を調べるべく其の方に去つた。八重子さんの販路の廣さを噂しつつ。

達子は自分の渾名について新らしい刺戟を受けたもので、又考へねばならなかつた。

「人は適評を下すものだ。販路が狹いとはよくいつたものだ。それは達子が思つて見てもそれに違ない。買手がなくて販路が狹いのぢやないが賣り惜みをするから狹いのだ。いはゞ氣位が高すぎるのだらう。それを今まで自分では意識した事はなかつた。人から云はれて始めて氣がついたのだ。しかし今日の二人の擧動から見ると單にそれだけの意味ではないらしい。あの嘲笑めいた笑の裏には、達子と永野さんの關係を意味しては居らなかつたらうか?それもなる程尤もだ。達子自身にも或は永野さんといふ人があるから他の緣談に耳が傾かないんぢやないかとそれは思ふ。思はぬ事はない。でも今日迄に自分ではつきりと意識してあの人を自分の所夫にしたいと思つた事もなし、又一人を守る爲に他の人を排斥した事もない。すべてが自然にぼんやりして居る間に販路が狹いと評語を下されるだけの事實が出來て來たのだ。しかし永野さんと達子との間は嘲笑を受けるに値するだらうか? 達子は嘗て一度も馴れ〳〵しい言葉や甘つたるい言葉を使つた事もない。況んや戀なんか仄めかす樣な言語を發した事はない。永野さんだつてさうだ。人の見る見ないに係はらず二人の間は嚴然として禮儀正しいものだ。それのに人は何故戀だと感づくだらう?そしてそれを嘲笑するだらう?達子の行爲の何處に缺點があるのだ。八重子さんの樣にあの學校の校長とも云々首席訓導とも云々。村長とも云々で奥さんに見つけられて寢衣で飛んで逃げたの走つたのと、たとひそれが誇張した人の噂としても、前にはHさんに戀した人だ。それが夢にもそんな事があつてはならぬと達子は思ふ。それは個性の發展で自己を擴充して行く方法かも知らないが、統一した人格といふ者は何處にある。或は戀を遊戯視して居る所に統一があるのかも知れないが、戀を遊戯視するなら、生活活動をも社會組織をもすべてを遊戯視する人に違ない。この嚴肅なる人生に於てそれこそ許すべからざる、不眞面目極まる人間だと達子にだつて判る。大いに嘲笑しても罰してもよいと思ふが、達子自身の行爲は何處が惡いだらうか? もし惡いなら男教員に對して偏頗な行爲でも出來

て、一部の人が羨望の情を起すに至つたらそこに罪があるかも知れない。いくら克己して居るつもりでも色に出るのだらう。以後は注意せうと思つた。

七十四

圖書の整理の出來ない間に其の次の仕事は押しよせて來た。それは運動會だ。達子は前に遊戯の講習をさへした位だからといふ理由で、方々の學級の女生徒をはねかけられて、表情遊技やダンスや體操や、種々なものを教へたり練習したりしなければならなかつた。お千代さんも手傳つては呉れるけれど元來おとなしい人だし、肥田さんはボッテリして容易に動けないし、輕井さんは敏捷に活潑に動ける人だが、とかく男教員と衝突しがちで穩かに物の相談が出來ないから、まあ自分の擔任學年に得意の薙刀でも教へて、其の方に過剩の精力を伸ばして居ようとする傾向があるし、自然達子が女教員側では運動會に關しては、花形役者の位置に立たねばならなかつた。

男教員側では女教員と違つて誰でも相當役立つて働くが、中にも永野さんは日頃の運動好

ほどあつて、運動會に對しても最も興味と熱心とを持つてゐる中心人物だつた。

酒倉なんかと來ては、運動よりも酒や女の方が好きなのだから、體操の時間が來ると何時でも歎聲を洩らす位だ。或日の事だつた、體操の時間に雨が降つて酒倉さん大喜び細い目を細くして、

酒「有難いのう、今日は雨休みぢや。いつつもこれからは體操の時間には雨が降ると定つて呉れれや嬉しいにのう。流して置いちや遊んでやるに。イヒイヒ　ヒヽヽヽ」

一服つけてポンとはたぎつゝそんなに云つて居る。達子が横合からおどけのつもりで、

達「酒倉先生、それでも降るものときまつて仕舞うては、又戸内運動場が作られたり何とか方法が考へられますから、さううまい工合には行きますまいぢやございませんか？　偶然に降るから有難いんでせう」

と笑ひ〳〵口を出した。

酒倉さんはそれには何とも答へずにフイと出て行つてしまつた。それでも達子は自分の言葉が酒倉の氣に障つたのだとは夢ほども氣がつかなかつた。

それから以後に「さうは行かん」といふ言葉がしきりに男教員間に流行しだした。それでも達子は達子の言葉が其の出處であらうとも思はず、時には掲示板に大きな文字で書かれても達子は平氣だつた。永野さんが其の文字の側に「ヒケミ」と書き添へると皆がドッと笑つた。達子は益々何の事か判らず、男教員間の隱語だらう位に思つて、自分もニコ〳〵して居たのだつた。

「さうは行かん」。「さうは行かん」と云つて居るうちに日にちは過ぎて行つて、運動會の當日は來た。

それ〳〵係がきめられて、赤や白や綠やとり〳〵の色の布切を左腕に括りつけて、男教員も女教員も足を宙に、時には人にぶつゝかりながら飛び廻り駈け歩き逆上する程働いた。そのお蔭で一つの演技がすんだかと思つて居ると、もう次の演技が始められて居る。百何十回といふプログラムが流れる如くに進行して一分のたるみもない。實に氣持がよい運動會だ。とりわけ審判係の永野さんの審判振は、其の日のお天氣の樣に晴れ〳〵と公明正大で齒ぎれがよくて、見物人に氣持のよい感じを抱かせた事は達子の僻目だけでは無かつた。達子は賞品係で其の審判の結果を一々書き止めるのに忙殺せられねばならなかつた。

樂隊の奏樂裡に豫定通りの進行を遂げて生徒の歡呼は有頂天に達した。

「賞品授與」と宣すると、ドッと鬨を作つて生徒は賞品を山ほど積んだ机を目あてに集まつて來た。

達「そんなに押しよせないでお並びなさい」

達子が聲を絞つても、燕の子が囀づる樣に云つて居る子供の聲の集まりに打ち勝つ事は出來ない。

達「一回駈足、一等何之誰」

と達子が云つて見た所で聲の通る事ならばこそ。聞こゑないから一層騒いで押しかけるばかりだ。

賞品係の記錄に遺漏があつてはと、立合つて居る審判係の永野さんが見兼ねて應援しようと、達子の手から授與原簿を受取つて割れる樣な聲で讀み上げ出す。達子が賞品を取つて渡さうとすると、もう自分の番手が來るかと思ふ受賞者の連中が群衆を掻き別けて割り込

んで來る。其の度にドドドッと人波が立つ。なだれかかつた人波に達子は押されて「觸れてはならぬ」と踏みこたへて居たかひもなく、脆くも永野さんの體に押し付けられてしまつた。達子の左足と永野さんの右足とがぎつしりくつ付く。ぐるりから押されて居るので達子が足を引くわけにも、永野さんが引くわけにも行かない。達子は其の刹那に嘗て味はつた事のない快感を覺えた。そして「何時までも此の樣に押しつけられて居りたい」と欲して居る自分の心を見出した。だから、押し返した所で返せもせぬが、自分から生徒を押し返してまで永野さんから離れようとはしなかつた。押すがままに押させて置いて、目と手と耳とを働かせて讀み上げられるに隨つて賞品を渡して行つたのだつた。

人波に押されて異性の足が觸れ合つたといへばそれまでゝ、さほど大事件でもない樣なが其の實此の出來事はそれで終を告げはしなかつた。具象的な人波は達子の肉體によせ、肉體の壓迫は心に振動を傳へ、其の振動は永く〳〵達子の心に殘つて、他日新らしい刺戟から新らしい振動が心に起る場合にでも必ず干渉して、妙な形の波紋を作らせずには置かなかつた。

七十五

靜かに內省して見ると、達子の心には運動會以後革命が起きた樣だ。それは其れまでは永野さんに戀をして居たにしても、其の對象は强ち永野さんでなくても永野さんの樣な人であつたらよかつたので、云はば抽象的の概念に戀して居たのだつた。だから若し他に永野さんの樣な人が有つて其の人が婚媾を求めて來、兩親や親戚がそれを許したならば達子の心は其の方に向ふ可能性があつたのだ。

しかし一度肉體を接して快感を起したとなると、たとひそれが衣服を隔てゝ足の一部分が接したに止まるとしても、精神上の情意の作用は肉交したと何等選ぶ所はない。所謂五十歩百歩なのだ。

他の男教員が今まで幾十度か幾百度かといふ程、達子の手に觸れ足に觸れ肩に觸れ脊に觸れたものだが、達子は其の都度いやな感じこそすれ、決して接觸によつて快感を貪つた事はなかつた。具象的の出來事は同じでも、其の刺戟によつて興奮せしめられて生じた感情

には天地の差がある。嫌と思つて觸れれば、たとひ其れが異性であつても、毛蟲や長蟲に觸れると差はない。だから達子は今始めて異性に觸れる悦を味はつたのだ。

今までの多くの場合といふより凡ての場合、男子の方が能働的に偶然らしく裝ひながら、其の實わざと接觸して來るのだ。さうすると達子の方では壓迫せられる樣な感じがして、同時に恐怖の情が起るのが常だつた。それのに今度の場合はどちらが能働的でもなく、眞に偶然に咄嗟の間に接觸してしまつたので、壓迫の感じも恐怖の情も起る餘裕をもたなかつた。そして永野さんの意識にはどんな事が上つて來たか知らないが、達子は確に快感を覺ゑると同時に接觸の永續を願つた。

して見ると新らしい行爲を始めようと意志が働いたのではないけれど、時間的に長延かせたいといふ能働的な慾求がそこには有つたのだ。

そこで達子は永野さんから快感を貪つたといふ認識と、能働的な慾求を自分が起したといふ認識と、二つの認識から一種の責任の感じが湧いて來るのをおぼろげながら覺ゑた。何事によらず能働的に事を始める者は、其の始めた一事に對しては最後まで責任を持たねば

ならず、たとへ受働的の場合でも、其の受働に甘んじるのは其の人間の能働的情意の作用だから、これ亦責任を持たねばならぬ。それが即ち操だ。決して「あれは夢だつた、心からではなかつた」などと糊塗するわけには行かない。いかに微細な形而上の現象でも神の記錄には書き殘されて居る筈だ。

永野さんが萬一にも他日求婚して來られる事があるなら、達子はそれに應じねばならぬ責任が生じたわけだ。之れと類似した責任を決して他の人に向つて作つてはならない。達子の肉體は一つしかないから。

無論媒介者が日日の樣に彼此れと云つて來るのもすべて拒絶して、それは有る事か無い事か判らないけれど、永野さんから正式に婚媾を求めて來られる日を待たなければならぬ。求めて來られても兩親や親戚が不賛成であるならば、又其の時更に自分の踏むべき道を選べばそれでよい。求めて來られなかつても同樣だ。解決の日にぶつかるまではたゞ自分の身も心も純に持つ事さへ努めればよいのだ。もう抽象的の問題ではなくなつてしまつた。現實の、しかも目前の問題だ。蟬の殼か薄絹か、そんなものは脱ぎ捨ててしまつた眞劍勝

負だ。國有レ道不レ變塞強哉矯。國無レ道至レ死不レ變強哉矯の實行に取りかゝらねばならぬのだ。仕官の道も戀の道も中庸を得ねばならぬ點に於ては同じ事だ。成と不成とはこれ天意だ。成に處するにも不成に處するにも、其の場合々々の道がある、それが人の道だ。それを踏まうと努力して其の努力を緩めない所が人格だ。悲しくても苦しくても今日から其の道に出發するのだ。

達子はそんなに思ひつつも左の足の接した部分を撫でて見ると、嬉しい樣な氣持がして新らしい勇氣が自分の體に湧き出すのを覺ゑるのだつた。眞言宗では弘法大師が入寂後でもなほお髮が伸びるので、金剛峰寺の高僧がお弟子をつれて頭を剃りに行くと、お弟子の目には大師樣のお姿は見ゑないのに落ちて來る髮だけ見ゑる。そこでお弟子が有難く且つ不思議に思つて、高僧に賴んで一寸だけ自分の手をお大師樣に觸れさせて貰つた所が、其の觸れた自分の手が勿體なくて仕方がなくなつて、一策を案じて首に吊したものださうな。それが輪袈裟の濫觴だといふ事だが、達子も左の足の觸れた部分が大切な樣な氣がして、どうにかして置きたい樣に思はれたりした。

七十六

運動會に興奮した學校の氣分が稍靜まつてしんみりと學習にむいて來たと思ふと、もう十一月の半を過ぎて居た。十二月一日といふ日が目前に迫つた。あゝ其の一日。其の日は新兵の入營すべき日だ。一年志願をしてある永野さんは行かなければならない日なのだ。達子の心は惜別の悲に渦卷かないで居られようか。

男教員は料亭に行つて一杯傾けて送別するにきまつて居るが、女子がそんな仲間に加はつて酒の場に出るのも懲りたし、何の催しもしないで別れるのも物足りないし、達子はどうしたものだらうとお千代さんに話して見た。

千代「私もそんなに思うて居ました。何かよい分別はないものでせうか。餞別品を贈るか茶話會を開くかしたらどうでせう」

と早速同感して一緒になつて考へて呉れた。決してお千代さんは達子に阿るのでも何でもないが、達子の心はお千代さんの心、お千代さんの心は達子の心といつた風に往來が自由

に出來るのだ。二つであつて其の實同一の樣なものだ。

達「どちらでもよろしいわ、何とかしなけりや本當に氣がすみませんもの。でも九月に來たばかりの輕井さんや肥田さんに割前をかけるのは氣の毒だし、二人だけでして却つて他の女教員に氣持惡く思はせてもそれも惡し」

例の心配性の達子が心配げに云ふと、

千代「それは何も秘密にしたりなんかしないで、一應『私共はこんなにしようかと思うて居ます』とうちあけて、仲間に這入らうと這入るまいとそれは隨意にしたらよいぢやないでせうか」

と簡單にきめて呉れる。

達「それはさうですわ。でもどんなに云ひますか？　あんた云うて下さる？」

達子は飛んだり跳ねたりはしても割に氣が小さいのだ。

千代「云うてもよろしいわ」

そこでお千代さんが外交委員で、お裁縫の先生と輕井さんと肥田さんとに云つてまわつた處が、輕井さんなんかは大喜びで盛に茶話會を催さうといふし、少々ケチ臭い肥田さんも氣持よく仲間に這入るといふし、お裁縫の先生は勿論昨年からの交際だし、月末統計は云ふに及ばず、何でも書く事は一切世話になつて居たのだから、個人ででも何か餞別品を贈らうと思つて居た、幸な事だといはれるし、話は纏つた。そこで先づ盛大なる茶話會といへばどんなにしたらよからうと輕井さんを參謀長にする。

輕井「賑やかに餘興をしませうね。たゞ茶菓だけぢやつまりませんもの。私ね、皆さんに羅刀の舞を敎へて上げますから四人で舞ひませう、割に上品なよいものですよ。ねねさうしませう。それから皆さんも隱し藝をお出しなさいよ。福引もよいと思ひますがね、まあ少々お金がかかつても、宴會の仲間に這入る事を思へば何でもございませんもの、盛に面白くしませうねねホッホッ、、、、」

達子は氣を兼ねて居た人達からこんなに熱心な態度に出られた事が非常に嬉しかつた。これは輕井さんの性質からでもあるが、又永野さんの人に嫌がられない德にもよるのだと永野さんを讃美したい氣もした。

思ひ立つ日が吉日ですぐから薙刀の舞の稽古を始めた。當日までに人に見られては興を殺ぐから隱れて稽古をしようと、事務室から離れた音樂堂の前の空地にそつと薙刀を持ち出して四人は集まつた。

輕井さんが先づ薙刀をかい込んで眞面目な顏になつて、模範を示すべく中央に出た。

輕「『しーきしーまのー』と三歩靜かに前に出るのですよ。それから『やーまとー』と左の側の方にかう薙刀をまはして『ごこーろをー』といひつゝかう云ふ風に始の姿勢に戻り、同時に三歩後によるのですよ。ホヽヽこゝまで一寸なすつて御覽なさいませホヽヽヽ」

そこで三人が輕井さんの後について『しーきしーまのー』と足並を揃へて前進した。『やーまとー』と歌はうとして居る所へ人の來る氣はひがした。無言でそこにつつ立つたのは酒倉だ。輕井さんが一番に見つけて薙刀を横たへたまま走つて行つた。

輕「先生、今來ちやいけませんのよホッホッヽヽヽお願ですからあちらに行つて居て下さいねホヽヽヽ」

しやがれた樣な太い聲で笑ひながら、しぶとく去るまいとする酒倉の前に立ち塞つた。三人も動作をやめて駈けつけて口々に退去を賴んだ。無論ぢやれる樣な態度で笑ひながら。酒倉が默つて去つたと思つたら、事務室の昇降口の所まで歸つて破れる樣な大きな聲をした。

酒「生意氣な女教員奴一寸來い」

四人はクス〳〵笑ひながら又『やーまとーごこーろをー』とつゞけて居た。すると又、

酒「歸れというたら歸らんか、女教員歸れーい」とどなるのだ。

達子が「どうしませう歸りますか?」といふと輕井さんが「何かまふもんですか酒醉見た樣なものですよ、捨てときませう」とそんなに云ふので知らぬ顏をして居ると、

酒「まだ聞ねんか女教員歸れーい」

と一層大きな聲をしてわめき立てるのだ。輕井さんがむつとして

輕「何用か歸つて聞いてやりませう、ほんにやかましくて仕方がないねに」

とつぶやきながら薙刀をしまつた。

四人が事務室に歸つて見ると酒倉が見た事はない、まるで火の樣に怒つて居る。

酒「何故歸れと云ふのに直ぐ歸らなんだ？」
輕「私は貴郎に命令せられて歸る義務を持ちませんもの」
酒「何ぢや、そんなら何故さつきわしの胸を薙刀で押して歸れといふたんぢや？」
輕「歸つて下さいと頼んだまでですよ。何も貴郎が私達に命令なさつた樣に、命令的な言葉は用ひた覺はございませんわ」
輕井さんも本氣で怒り出す。
酒「何故わしに歸れといふ理由があるのぢや？　一人一人に聞くから返答せい」

七十七

事は面倒になつて來た。校長が居られたら酒倉もこんなに猛ることは得しないのだが、生憎校長は居られない。事務室は殺氣立つた。男教員はぞろ〳〵歸つて行き出した。
達子は默つてさつきからの酒倉と輕井さんとの問答を聞いて居たが、自分が發起者で居て輕井さん一人に戰はせるのが氣の毒になつて口を出した。

達「酒倉先生。先生にお歸り下さいと申しましたのが大變お氣に障つた樣ですが、それは稽古中の拙い所を御覽に入れては、上手になつて今度御覽に入れる時の興をそぐからと思つたからで、動機は決して惡いのぢやないのですから、そこには御諒察下すつて勘辨して下さらねばなりませんわ。なあ先生、また上手になつていづれお目にかけるのですから」
多少なだめるつもりで云つたが中々酒倉の逆上は鎭靜しない。
酒「動機ぢやの糸瓜ぢやのと、そんなものは何でもよい。わしは學校中どこへでも行く權利がある。女教員に干渉して貰はんでもよい」
大きな聲で氣狂の樣に云ふので小貫さんが聞き兼ねて調停を始めた。
小貫「まあ酒倉そんなに怒るな。今も高野さんが云はれる通りに惡氣でせられた事ぢやないのだから、君も大人げがないもうよし給へ。今日の所は僕に預け給へ。僕が女教員の方によく云うて置くから、のうもう歸り給へ」
首席訓導の小貫さんにさう云はれて、酒倉も默つて小貫さんに連れられて門の方に出て行つた。事務室にはもう男教員は一人も居らない。輕井さんもいつの間に歸つたのやら机の

上をキチンと片付けて往んでしまつて居る。肥田さんも重さうな體を昇降口まで運び出して居る。お千代さんが荷物を抱へて「達子さん私共も歸りませう」といつて居る。小貫先生に一口お禮をいはうと、門口から引き返して來る其の人を達子は待ち心でぐづ〳〵して居るのだ。

達「小貫先生どうも有難う存じました。心安立てで申しました事が、つひ酒倉先生のお氣に障りましてとんだ事になりました」

酒倉が往んでくれてホッとしたが、でもまだ震ひ聲で達子は云つた。

小貫「ハ、、、酒倉は氣が短いものですから。いやまたあれの事ですからお心持が了解したらすぐ機嫌が直りませう。一寸それについて他にもお話したい事がありますから暫くお殘り下さいませんか」

達子は何だらうと恐ろしい樣な氣がした。小貫さんは奥さんもあるし、色つぽくない人だから其點は心配ないが、肉の奴隷の樣な酒倉と了解ありげなのは不思議な現象だとも思つた。二人きりになると小貫さんが云ひ出した。

小貫「實はよほど前から一度お話して見たいと思うて居たのですが、よい機會がなかつたのです。他でもないですが、貴女や西町さんが私達即ち今年來た者を誤解しては被居らないかとたゞそれだけです」

と少し云ひにくさうに笑顔をして卷煙草を取り出して火をつけた。

達「何をでせう？何も先生方について考へた事はございませんが」

達子は既往の意識を一々點檢する樣に內省しつゝ云つた。

小貫「或は私共の邪推であるかも知れないですが……まあ打ち割つて云うてしまへば、私達が貴女方の擧足をとらうと思つて居ると、そんなに貴女方が思うてはお出でにならんでせうか？萬一さうでしたら其れは貴女方の誤解ですから……」

達子はほんとに寢耳に水ほど驚いた。ただあきれて感心して聞いた。心と心との交通の出來ぬものはこんなに誤解が生ずるからいもんだ。どんな擧動が誤解を起したのだらうと、

達「先生、それは私達のどんな擧動からそんなにお感じになりました？　私達はそんな事を思ひもそめた事はないのですが」

と聞いて見た。

小貫さんは煙草の灰を一寸はたいて、

小貫「いや、それならよいですが私共は大變憤慨して居たのです。どんな擧動と云うて、まあ何かにつけてそんなに感ぜられたのですなあ。今覺わて居る一つ二つを云うて見ると……何です、私が西町さんの所に參觀に行つたのです。處が次の日にはすぐ私の所に參觀に來られた事や、それから西町さんがこんな事を云はれたのです『私は今度の研究教授に唱歌をするとよろしいけれど、よい聲も出ず、參觀人に拍子でも取られると困るから』と、其れは私が二三日前に西町さんの唱歌を參觀して思はず足拍子を取つたのです。だから其の言葉がひどく身にこたへたのです。も一つは西町さんが先日研究教授をなさつた時穗積が酷評をしたでせう、其の時に貴女が『去年は男先生は女子の教授には酷な評はなさらなかつた』と被仰つたでせう、それを穗積は自分に當てたものと取つたのです。酒倉は酒倉で何かにつけて貴女が姑顏をして自分の權利に關する事にまで啄を入れる。何でも『雨が降るから體操を流す』と酒倉が云つたら貴女が『さうは行かん』と被仰つたとかで

それを最も憤慨して居ます。伊知地も『歸る時禮をしても女教員が答禮をせぬ』と云うて居ます。加藤君は前から居るのですが、それでも『貴女が參觀に來るなら來たらよいのに廊下をうろつく』といつて怒つて居ます。恐らく男教員は貴女方に對して殆ど誰もよい感じを持つて居らない樣です。それで今日の樣な事件も起つて來るのです。先達なんか隨分ひどい諷刺を男教員達がして居て、私は聞くに堪へないで其場をはづしたのでしたが、お氣がつきませんでしたか？」

達「全く何も存じませんでした。初耳です。私共がそんな不注意な事をしては誤解なさるのも御尤です。全く不注意からです。心には何も思つては居ないのですから……」

達子は辯解の言葉はろくに出ずに涙の方が先に出るのだつた。小貫さんの煙草は空しく燃えて灰がふるひもせぬのにホロ〳〵散つた。

七十八

親に叱られる事と、寄宿舍にはいつた始めが淋しくてつらかつた事とより他には悲みとい

ふ事を味はつた事のない達子の頭は知らない間に「人は皆自分を可愛がつて呉れるもの、庇つて呉れるもの」といふ風に思ふ樣になつて居た。其の達子に小貫さんの言葉は實に鐵槌の樣なものだつた。仁だの義だの中庸だのと小理屈は云つても、實際に適用する事は甚だむつかしい。「此處にあつても厭はれず彼處にあつてもいとはれず」といふ人間には中中なれないものだとつく〴〵思つた。

其の日は家に歸ると日誌に今日の顚末を書いた。そして色々と考へた。

達子は昨年は事務室の女王のやうに可愛がられた。それのに今年はまるで敵のやうにせられる。何故だらう?何故男と女とは中庸を得た淸い美しい交際といふものは出來ないのだらう? 自分も女學生時代に「男女の交際はお互に稗益してよい筈であるけれど、其の實うまく行くものでない。若い間はなるべく避けた方がよい」と聞いて、「なに自分は性といふ考を超越して、きつと淸い美しい交際をなし得るぞ」と思つて居たがやはり駄目だ。中立してかたよらず强なるかな矯と、口くせの樣に云つた所で駄目だ。戀になるか喧嘩になるかだ。昨年は達子が戀らしい戀もせずに居たし、お千代さんだつて結婚せずに居た。

だから可愛がられたのだらう。そして女の方は無關心でも、男の方は既婚の人未婚の人を問はず、性的慾求が裏面に多少流れて居た樣な氣がする。性をぬきにした純なる敬愛だつたとは斷言出來ない樣だ。大方今年でもお千代さんも未婚で居り、達子も戀を知らずに居るなら八方から可愛がられて、同じ動作をしたにしても誰も怒りもせず、今度の樣な事件は無論起らなかつたかも知れないのだ。嗚呼年はとりたくないものだ。年を取らばこそ戀も知る。戀をすれば人も憎む。此の頃の男敎員の心理作用は、丁度達子の女學校時代に、I先生と赤澤さんとを排斥したそれと同じ樣なのだらう。何も個人として赤澤さんが達子に惡くむけた事もないのに達子は赤澤さんが嫌になつた。他の人に上の席をしめられても口惜しくはないのに、赤澤さんが達子より上席で卒業した事だけは忌々しかつた。I先生だつて達子の一番すきな先生だつたのに、結婚なすつたら急に一番いやな先生になつてしまつた。今いくら達子が戀を語らず、甘つたるくもせず、公平に交つて居るつもりでも、心にある事は顯はれずには置かないから、もう凡て人が知つて居るのだらう。それで第一よい感情が持つて貰へないのだ。加藤さんなんかは昨年は妹の樣に可愛がつて呉れて居た